ど、出來ることなら、せめて一日でも二日でも、彼女との間柄を、今まで通り混り氣のないものにして置きたいと思ふのである。

若しお多が附文を讀んだなら、そこには、どうせ齒の浮く樣な殺し文句が並べてあるのだらうが、世間知らずの彼女にしては、恐らく生れて始めての戀文でもあらうし、それに相手があの若者であつて見れば、(その時分外に若い男のお客なぞはなく、殆ど子供と女ばかりだつたので、附文の主は立所に分る筈だ)どんなにか胸躍らせ、顏をほてらせて、甘い氣持になることであらうそれからは、定めし物思ひ勝ちになつて、彼とも以前の樣には口を利いても呉れなからう。あ、さうだ、一層のこと、折を見て、彼女があの附文を讀まない先に、そつとポケットから引拔いて、破り捨てて了はうかしら。無論、その樣な姑息な手段で、若い男女の間を裂き得やうとも思はぬけれど、でもたつた今宵一よさでも、これを名殘りに元のまゝの淸い彼女と言葉を交して置きたかつた。

それからやがて十時頃でもあつたらうか。活動館がひけたかして、一しきり館の前の人通りが賑かになつたあとは、一時にひつそりとして了つて、見物達も、公園生え拔きのチンピラ共の外は、大抵歸つて了ひ、お客樣も二三人來たかと思ふと、あとが途絕える樣になつた。さうなる

と、館員達は歸りを急いで、中には、そつと板圍ひの中の洗面所へ、歸支度の手を洗ひに入つたりするのである。格二郎も、お客の隙を見て、樂隊臺を降りて、別に手を洗ふ積りはなかつたけれど、お多の姿が見えぬので、若しや洗面所ではないかと、その板圍ひの中へ入つて見た。すると、偶然にも、丁度お多が洗面臺に向うむきになつて、一生懸命顏を洗つてゐる、そのムツクリとふくらんだお尻の所に、さい前の附文が、半分ばかりもはみ出して、今にも落ち相に見えるのだ。格二郎は、最初からその氣で來たのではなかつたけれど、それを見るとふと拔取る心になつて、

「お多坊、手廻しがいゝね。」

と云ひながら、何氣なく彼女の背後に近寄り、手早く封筒を引拔くと、自分のポケットへ落し込んだ。

「アラ、びつくりしたわ。ア、、おぢさんなの、あたしや又、誰かと思つた。」

すると彼女は、何か彼がいたづらでもしたのではないかと氣を廻して、お尻を撫で廻しながら、ぬれた顏をふり向けるのであつた。

「まあ、たんと、おめかしをするがいゝ。」

彼はさう云ひ捨てゝ、板圍ひを出ると、その隣の機械場の隅に隱れて、拔取つた封筒を開いて見た。と、今それをポケットから出す時に、ふと氣がついたのだが、手紙にしては何だか少し重味が違ふ樣に思はれるのだ。で、急いで封筒の表を見たが、宛名は、妙なことには、お冬ではなくて、四角な文字で、難しい男名前が記され、裏はと見ると、どうしてこれが戀文なものか、活版刷りでどこかの會社の名前か、所番地、電話番號までも、こま〳〵と印刷されてあるのだつた。そして、中味は、手の切れる樣な十圓札が、ふるへる指先で勘定して見ると、丁度十枚、外でもない、それは何人かの月給袋なのである。

一瞬間、夢でも見てゐるか、何か飛んでもない間違ひを仕出來した感じで、ハッとうろたへたけれど、よく〳〵考へて見れば、一途に附文だと思ひ込んだのが彼の誤りで、さつきの若者は、多分スリででもあつたのか、そして、巡査に睨まれて、逃げ場に困り、呑氣相に木馬に乘つてごまかさうとしたのだけれど、まだ不安なので、スリ取つたこの月給袋を、丁度前にゐたお冬のポケットにそつと入れて置いたものに相違ない、といふことが分つて來た。

すると、その次の瞬間には、彼は何か大儲けをした樣な氣持ちになつて來るのであつた。名前が書いてあるのだから、スラれた人は分つてゐるけれど、どうせ當人はあきらめてゐるだらう

し、スリの方にしても、自分の身體の危いことだから、まさか、あれは俺のだと云つて、取返しに來ることもなからう。若し來た所で、知らぬと云へば、何の證據もないことだ。それに本人のお冬は實際少しも知らないのだから、結局うやむやに終つて了ふのは知れてゐる。とすると、この金は俺の自由に使つてもいゝ譯だな。

だが、それでは、今日さまに濟むまいぞ。勝手な云ひ譯をつけて見た所で、結局は盜人の上前をはねることだ。今日さまは見通しだ。どうしてそのまゝ濟むものか。だが、お前は、さうしてお人好しにビク〳〵してゐたばつかりに、今日が日まで、このみじめな有樣を續けてゐるのではないか、天から授かつたこのお金を、むざ〳〵捨てることがあるものか。濟む濟まぬは第二として、これだけの金があれば、あの可哀相な、いぢらしいお冬の爲に、思ふ存分の買物がしてやれるのだ。いつか見たショーウインドの高い方のショールや、あの子の好きな臙脂色の半襟や、ヘヤピンや、それから帶だつて、着物だつて、儉約をすれば一通りは買ひ揃へることが出來るのだ。

さうして、お冬の喜ぶ顏を見て、眞から感謝をされて、一緒に御飯でもたべたら……あゝ、今俺には、たゞ決心さへすれば、それがなんなく出來るのだ。あゝ、どうしよう、どうしよう。

と、格二郎は、その月給袋を胸のポケット深く納めて、その邊をうろ〳〵と行つたり來たりするのであつた。

「アラ、いやなおぢさん。こんな所で何をまご〳〵してるのよ。」

それが假令安白粉にもせよ。のびが悪くて顏がまだらに見えるにせよ。兎も角、お冬がお化粧をして、洗面所から出て來たのを見ると、そして、彼にしては胸の奥をくすぐられる樣なその聲を聞くと、ハツと妙な氣になつて、夢の樣に、彼はとんでもないことを口走つたのである。

「オオ、お冬坊、今日は歸りに、あのショールを買つてやるぞ。俺は、ちやんと、そのお金を用意して來てゐるのだ。どうだ。驚いたか。」

だが、それを云つて了ふと、外の誰にも聞えぬ程の小聲ではあつたものゝ、思はずハツとして、口を蓋したい氣持だつた。

「アラ、さうを、どうも有難う。」

ところが、可憐なお冬坊は、外の娘だつたら、何とか常談口の一つも利いて、からかひ面をしようものを、すぐ眞に受けて、眞から嬉しさうに、少しはにかんで、小腰をかゞめさへしたものだ、となると、格二郎も今更ら後へは引かれぬ譯である。

「いゝとも、館がはねたら、いつもの店で、お前のすきなのを買つてやるよ。」

でも、格二郎は、さも浮々と、そんなこと受合ひながらも、一つには、いゝ年をした爺さんが、かうして、十八の小娘に夢中になつてゐるかと思ふと、消えて了ひ度い程恥しく、一こと物を云つたあとでは、何とも形容の出來ぬ、胸の悪くなる樣な、はかない樣な、寂しい樣な、變な氣持に襲はれるのと、もう一つは、その恥しい快樂を、自分の金でもあることか、泥棒のうは前をはねた、不正の金によつて、得ようとしてゐる淺間しさ、みぢめさが、ぢつとしてゐられぬ程に心を責め、お冬のいとしい姿の向うには、古女房のヒステリイ面、十二を頭に三人の子供達のおもかげ、そんなものが、頭の中を萬字巴とかけ巡つて、最早物事を判斷する氣力もなく、まゝよ、なる樣になれとばかり、彼は突如として大聲に叫び出すのであつた。

「機械場のお父つあん、一つ景氣よく馬を廻しておくんなさい。俺あ一度こいつに乘つて見たくなつた。お冬坊、手がすいてゐるなら、お前も乘んな、そつちのおばさん、いや失敬失敬、お梅さんも、乘んなさい。ヤア、樂隊屋さん。一つラッパ拔きで、やつつけて貰はうかね。」

「馬鹿々々しい。お止しよ。それよか、もう早く片づけて歸ることにしようぢやないか。」

お梅といふ年增の切符切りが、佛頂面をして應じた。

「イヤ、なに、今日はちつとばかり、心嬉しいことがあるんだよ。ヤア、皆さん、あとで一杯づつおごりますよ。どうです。一つ廻してくれませんか。」

「ヒヤ〳〵、よからう。お父つあん、一廻し廻してやんな。監督さん、合圖の笛を願ひますぜ。」

太鼓叩きが、お調子にのつて怒鳴つた。

「ラツパさん、今日はどうかしてゐるね。だが餘り騷がない樣に賴みますぜ。」

監督さんが苦笑ひをした。

で結局、木馬は廻り出したものだ。

「サア、一廻り、それから、今日は俺がおごりだよ。お多坊も、お梅さんも、監督さんも、木馬に乘つた乘つた。」

醉つぱらひの樣になつた格二郎の前を、背景の、山や川や海や、木立や、洋館の遠見なぞが、丁度汽車の窓から見る樣に、うしろへ、うしろへと走り過ぎた。

「バンザーイ。」

たまらなくなつて、格二郎は木馬の上で兩手を擴げると、萬歲を連呼した。ラツパ拔きの變妙な樂隊が、それに和して鳴り響いた。

「こゝはお國を何百里、離れて遠き滿洲の……。」

そして、

ガラガラ、ゴツトン、ガラガラ、ゴツトン、廻轉木馬は廻るのだ。

人でなしの戀

一

門野、御存知でゐらつしやいませう。十年以前になくなつた先の夫なのでございます。こんなに月日がたちますと門野と口に出していつて見ましても、一向他人様の様で、あの出來事にしましても、何だか、かう夢ではなかつたかしら、なんて思はれるほどでございます。門野家へ私がお嫁入りをしましたのは、どうした御縁からでございましたかしら、申すまでもなく、お嫁入り前に、お互に好き合つてゐたなんて、そんなみだらなのではなく、仲人が母を說きつけて、母が又私に申し聞かせて、それを、おぼこ娘の私は、どう否やが申せませう。おきまりでございますわ。疊にのの字を書きながら、ついうなづいてしまつたのでございます。

でも、あの人が私の夫になる方かと思ひますと、狹い町のことで、それに先方も相當の家柄なものですから、顏位は見知つてゐましたけれで、噂によれば、何となく氣むづかしい方の様だがとか、あんな綺麗な方のことだから、えゝ、御承知かも知れませんが、門野といふのは、それは

それは、凄い様な美男子で、いゝえおのろけではございません。美しいといひます中にも、病身なせゐもあつたのでございませう、どこやら陰氣で、青白く、透き通る様な、ですから、一層水際立つた殿御ぶりだつたのでございますが、それが、たゞ美しい以上に、何かかう凄い感じを與へたのでございます。その様に綺麗な方のことですから、きつと外に美しい娘さんもおありでせうし、もしさうでないとしましても、私の様なこのお多福が、どうまあ一生可愛がつて貰へよう、などゝ色々取越苦勞もしますれば、從つてお友達だとか、召使などの、その方の噂話にも聞き耳を立てるといつた調子なのでございます。

そんな風にして、段々洩れ聞いた所を寄せ集めて見ますと、心配をしてゐた、一方のみだらな噂などはこれつぱかりもない代りには、もう一つの氣むづかし屋の方は、どうして一通りでないことが分つて來たのでございます。いはゞ變人とでも申すのでございませう。お友達なども少く多くは內の中に引込み勝ちで、それに一番いけないのは、女ぎらひといふ噂すらあつたのでございます。それも、遊びのおつき合ひをなさらぬための、そんな噂なら別條はないのですけれど、本當の女ぎらひらしく、私との緣談にしましてからが、元々親御さん達のお考へで、仲人に立つた方は、私の方よりは、却て先方の御本人を說きふせるのに骨が折れたほどだと申すのでござい

ます。尤もそんなハッキリした噂を聞いた譯ではなく、誰かゞ一寸口をすべらせたのから、私が、お嫁入りの前の娘の敏感で獨合點をしてゐたのかも知れません。いゝえ、いざお嫁入りをして、あんな目にあひますまでは、本當に私の獨合點に過ぎないのだと、しひてもそんな風に、こちらに都合のよい樣に、氣休めを考へてゐたことでございます。これで、いくらか、うぬぼれもあつたのでございますわね。

あの時分の娘々した氣持を思ひ出しますと、われながら可愛らしい樣でございます。一方ではそんな不安を感じながら、でも、隣町の呉服屋へ衣裳の見立に參つたり、それを家中の手で裁縫したり、道具類だとか、細々した手廻りの品々を用意したり、その中へ先方からは立派な紬納が屆く、お友達にはお祝ひの言葉やら、羨望の言葉やら、誰かにあへばひやかされるのがなれつこになつてしまつて、それが又恥かしいほど嬉しくて、家中にみち〳〵た花やかな空氣が、十九の娘を、もう有頂天にしてしまつたのでございます。

一つは、どの樣な變人であらうが、氣むづかし屋さんであらうが、今申す水際立つた殿御振に、私はすつかり魅せられてゐたのでもございませう。それに又、そんな性質の方に限つて、情が濃かなのではないか、私なら私一人を守つて、凡ての愛情といふ愛情を私一人に注ぎつくして、可

愛がつて下さるのではないか、などゝ、私はまあなんてお人よしに出來てゐたのでございませう。そんな風に思つても見るのでございました。

初めの間は、遠い先のことの樣に、指折數へてゐた日取りが、夢の間に近づいて、近づくに從つて、甘い空想がずつと現實的な恐れに代つて、いざ當日、御婚禮の行列が門前に勢揃ひをいたします。その行列が又、自慢に申すのではありませんが、十幾つりの私の町にしては飛切り立派なものでしたが、その中にはさまつて、車に乘る時の心持といふものは、どなたも味はひなさることでせうけれど、本當にもう、氣が遠くなる樣でございましたつけ、まるで屠所の羊でございますわね。精神的に恐しいばかりでなく、もう身内がずきずき痛む樣な、それはもう、何と申してよろしいのやら。……

二

何がどうなつたのですか、兎も角も夢中で御婚禮を濟せて、一日二日は、夜さへ眠つたのやら眠らなかつたのやら、舅姑がどの樣な方なのか、召使達が幾人ゐるか、挨拶もし、挨拶されてゐながらも、まるで頭に殘つてゐないといふ有樣なのでございます。するともう、里歸り、夫と

車を並べて、夫の後姿を眺めながら走つてゐても、それが夢なのか現なのか、……まあ、私はこんなことばかりおしやべりしてゐまして、御免下さいまし、肝心の御話がどこかへ行つてしまひますわね。

さうして、御婚禮のごた〳〵が一段落つきますと、案ずるよりは生むが易いと申しますか、門野は噂程の變人といふでもなく、却て世間並よりは物柔かで、私などにも、それは優しくしてくれるのでございます。私はほつと安心いたしますと、今までの苦痛に近い緊張が、すつかりほぐれてしまひまして、人生といふものは、こんなにも幸福なものであつたのかしら、なんて思ふ樣になつて參つたのでございます。それに舅姑御二人とも、お嫁入前に母親が心づけてくれましたことなどまるで無駄に思はれたほど、好い御方ですし、外には、門野は一人子だものですから、小舅などもなく、却て氣拔けのする位、御嫁さんなんて氣苦勞の入らぬものだと思はれたのでございました。

門野の男ぶりは、いゝえ、さうぢやございませんのよ。これがやつぱり、お話の內なのでございますわ。さうして一しよに暮す樣になつて見ますと、遠くから、垣間見てゐたのと違つて、私にとつては、生れてはじめての、この世にたつた一人の方なのですもの、それは當り前でございま

ませうけれど、日が經つにつれて、段々立まさつて見え、その水際立つた男ぶりが、類なきものに思はれ初めたのでございます。いゝえ、お顏が綺麗だとか、そんなことばかりではありません。戀なんて何と不思議なものでございませう。門野の世間並をはづれた所が、變人といふほどではなくても、何とやら憂鬱で、しよつちう一途に物を思ひつゞけてゐる樣な、しんねりむつゝりとした、それで縹致はと申せば、今いふ透き通る樣な美男子なのでございますよ、それがもう、いふにいはれぬ魅力となつて、十九の小娘を、さん〳〵に責めさいなんだのでございます。

ほんとうに世界が一變したのでございます。二た親のもとで育てられてゐた十九年を現實世界にたとへますなら、御婚禮の後の、それが不幸にもたつた半年ばかりの間ではありましたけれど、その間はまるで夢の世界か、お伽噺の世界に住んでゐる氣持でございました。大げさに申しますれば、浦島太郎が乙姫樣の御寵愛を受けたといふ龍宮世界、あれでございますわ。世間ではお嫁入りはつらいものとなつてゐますのに、私のはまるで正反對ですわね。いゝえ、さう申すよりは、そのつらい所まで行かぬ內に、あの恐ろしい破綻が參つたといふ方が當たつてゐるのかも知れませんけれど。

その半年の間を、どの樣にして暮しましたことやら、たゞもう樂かつたと申す外に、こま〳〵

したことなど忘れても居りますし、それに、このお話には大して關係のないことですから、おのろけめいた思出話は止しにいたしませうけれど、門野が私を可愛がつてくれましたことは、それはもう世間のどの様な女房思ひの御亭主でも、とても眞似も出來ないほどでございました。無論私は、それをたゞ〳〵有難いことに思つて、いはゞ陶醉してしまつて、何の疑ひを抱く餘裕もなかつたのでございますが、この門野が私を可愛がり過ぎたといふことには、あとになつて考へますと、實に恐しい意味があつたのでございます。といつて、何も可愛がり過ぎたのが破綻の元だと申す譯ではありません、あの人は、眞心をこめて、私を可愛がらうと努力してゐたに過ぎないのでございます。それが決して、だましてやらうといふ樣な心持ではなかつたのですから、あの人が努力すればするほど、私はそれを眞に受けて、眞から手賴つて行く身も心も投げ出してすがりついて行く、といふ譯でございました。ではなぜ、あの人がそんな努力をしましたか、尤もこれらのことは、ずつとずつと後になつて、やつと氣づいたのでありますけれど、それには、實に恐ろしい理由があつたのでございます。

三

「變だな」と氣がついたのは、御婚禮から丁度半年ほどたつた時分でございました。今から思へば、あの時、門野の力が、私を可愛がらうとする努力が、いたましくも盡きはてゝしまつたものに相違ありません。その隙に乘じて、もう一つの魅力が、グングンとあの人を、そちらの方へひつぱり出したのでございませう。

男の愛といふものが、どの樣なものであるか、小娘の私が知らう筈はありません。門野の樣な愛し方こそ、すべての男の、いゝえ、どの男にも勝つた愛し方に相違ないと、長い間信じ切つてゐたのでございます。ところが、これほど信じ切つてゐた私でも、やがて、少しづつ少しづつ、門野の愛に何とやら僞りの分子を含むことを、感づき初めないではゐられませんでした。……

……そのエクスタシイは形の上に過ぎなくて、心では、何か遙なものを追つてゐる、妙に冷い空虛を感じたのでございます。私を眺める愛撫のまなざしの奥には、もう一つの冷い目が、遠くの方を凝視してゐるのでございます。愛の言葉を囁いてくれます、あの人の聲音すら、何とやらうつろで、機械仕掛の聲の樣にも思はれるのでございます。でも、まさか、その愛情が最初から總て僞りであつたなどとは、當時の私には思ひも及ばぬことでした。これはきつと、あの人の愛が私から離れてどこかの人に移りはじめたしるしではあるまいか、そんな風に疑つて見るの

が、やつとだつたのでございます。

疑ひといふものゝ癖として、一度さうしてきざしが現れますと、丁度夕立雲が擴がる時の樣な、恐しい早さでもつて、相手の一擧一動、どんな微細な點までも、それが私の心一杯に、深い深い疑惑の雲となつて、群がり立つのでございます。あの時の御言葉の裏にはきつとかういふ意味を含んでゐたに相違ない。いつやらの御不在は、あれは一體どこへいらしつたのであらう。こんなこともあつた、あんなこともあつたと、疑ひ出しますと際限がなく、よく申す、足の下の地面が、突然なくなつて、そこへ大きな眞暗な空洞が開けて、はて知れぬ地獄へ吸ひ込まれて行く感じなのでございます。

ところが、それほどの疑惑にも拘らず、私は何一つ、疑ひ以上の、ハッキリしたものを掴むことは出來ないのでございました。門野が家をあけると申しましても、極く僅の間で、それが大抵は行先が知れてゐるのですし、日記帳だとか手紙類、寫眞までも、こつそり調べて見ましても、あの人の心持を確め得る樣な跡は、少しも見つかりはしないのでございます。ひよつとしたら、娘心のあさはかにも、根もないことを疑つて、無駄な苦勞を求めてゐるのではないかしら、幾度か、そんな風に反省して見ましても、一度根を張つた疑惑は、どう解かうすべもなく、ともすれ

ば、私の存在をさへ忘れ果てた形で、ぼんやりと一つ所を見つめて、物思ひに耽つてゐるあの人の姿を見るにつけ、やつぱり何かあるに相違ない、きつと〳〵、それに極つてゐる。では、もしや、あれではないのかしら。といひますのは、門野は先から申します樣に、非常に憂鬱なたちだものですから、自然引込思案で、一間にとぢ籠つて本を讀んでゐる樣な時間が多く、それも、書齋では氣が散つていけないと申し、裏に建つてゐました土藏の二階へ上つて、幸ひそこに先祖から傳はつた古い書物が澤山積んでありましたので、薄暗い所で、夜などは昔ながらの雪洞をともして、一人ぽつちで書見をするのが、あの人の、もつと若い時分からの、一つの樂みになつてゐたのでございます。それが、私が參つてから半年ばかりといふものは、忘れた樣に、土藏のそばへ足ぶみもしなくなつてゐたのが、ついその頃になつて、又しても、繁々と土藏へ入る樣になつて參つたのでございます。この事柄に何か意味がありはしないか。私はふとそこへ氣がついたのでございました。

四

土藏の二階で書見をするといふのは少し風變りと申せ、別段とがむべきことでもなく、何の怪

しい譯もない、と一應はさう思ふのですけれど、又考へ直せば、私としましては、出來るだけ氣を配つて、門野の一擧一動を監視もし、あの人の持物なども檢べましたのに、何の變つた所もなく、それで、一方ではあの拔けがらの愛情、うつろの目、そして時には私の存在をすら忘れたかと見える物思ひでございませう。もう藏の二階を疑ひでもする外には、何のてだても殘つてゐないのでございます。それに妙なのは、あの人が藏へ行きますのが、極つて夜更けなことで、時には隣に寢てゐます私の寢息を窺ふ樣にして、こつそりと床の中を拔け出して、御小用にでもいらつしつたのかと思つてゐますと、そのまゝ長い間歸つていらつしやらない。緣側に出て見れば、土藏の窓から、ぼんやりとあかりがついてゐるのでございます。何となく凄い樣な、いふにいはれない感じに打たれることが屢々なのでございます。土藏だけは、お嫁入りの當時、一巡中を見せて貰ひましたのと時候の變り目に一二度入つたばかりで、たとへ、そこへ門野がとぢ籠つてゐましても、まさか、藏の中に私をうと〳〵しくする原因がひそんでゐようとも考へられませんので、別段、あとをつけて見たこともなく、從つて藏の二階だけが、これまで、私の監視を脫れてゐたのでございますが、それをすら、今は疑ひの目を以て見なければならなくなつたのでございます。

お嫁入りをしましたのが春の半、夫に疑ひを抱き始めましたのがその秋の丁度名月時分でございました。今でも不思議に覺えてゐますのは、門野が緣側に向うむきに蹲つて、靑白い月光に洗はれながら、長い間ぢつと物思ひに耽つてゐた、あのうしろ姿、それを見て、どういふ譯か、妙に胸を打たれましたのが、あの疑惑のきつかけになつたのでございます。それから、やがてその疑ひが深まつて行き、遂には、あさましくも、門野のあとをつけて、土藏の中へ入るまでになつたのが、その秋の終りのことでございました。

何といふはかない緣でありませう。あの樣にも私を有頂天にさせた、夫の深い愛情が（先にも申す通り、それは決して本當の愛情ではなかつたのですけれど）たつた半年の間にさめてしまつて、私は今度は玉手箱をあけた浦島太郎の樣に、生れて始めての陶醉境から、ハッと眼覺めると、そこには恐しい疑惑と嫉妬の、無限地獄が口を開いて待つてゐたのでございます。

でも最初は、土藏の中が怪しいなどとハッキリ考へてゐた譯ではなく、疑惑に責められるまゝたつた一人の時の夫の姿を垣間見て、出來るならば迷ひを晴らしたい、どうかそこに私を安心させる樣なものがあつてくれます樣にと祈りながら、一方ではその樣な泥坊じみた行ひが恐しく、といつて一度思ひ立つたことを、今更中止するのは、どうにも心殘りなまゝに、ある晩のこと、

袷一枚ではもう肌寒い位で、この頃まで庭に鳴きしきつてゐました、秋の蟲共も、いつか聲をひそめ、それに丁度闇夜で、庭下駄で土藏への道々、空をながめますと、星は綺麗でしたけれど、それが非常に遠く感じられ、不思議と物淋しい晩のことでありましたが、私はたうとう、土藏へ忍び込んで、そこの二階にゐる筈の夫の隙見を企てたのでございます。

もう母屋では、御兩親をはじめ召使達も、とつくに床についてをりました。田舍町の廣い屋敷のことでございますから、まだ十時頃といふのに、しんと靜まり返つて、藏まで參りますのに、眞つ暗なしげみを通るのが、こはい樣でございました。その道が又、御天氣でもじめ〳〵した樣な地面で、しげみの中には、大きな蝦蟇が住んでゐて、グルルル……グルルル……といやな鳴き聲さへ立てるのでございませう。それをやつと辛抱して、藏の中へたどりついても、そこも同じ樣に眞つ暗で、樟腦のほのかな薫りに混つて、冷い、かび臭い藏特有の一種の匂ひが、ゾーッと身を包むのでございます。もし心の中に嫉妬の火が燃えてゐなかつたら十九の小娘に、どうまああの樣な眞似が出來ませう。本當に戀ほど恐しいものはございませんわね。

闇の中を手探りで、二階への階段まで近づき、そつと上を覗いて見ますと、暗いのも道理、梯子段を上つた所の落し戸が、ピッタリ締つてゐるのでございます。私は息を殺してて、一段々々

と音のせぬ樣に注意しながら、やつとのことで梯子の上まで昇り、ソッと落し戸を押し試みて見ましたが、門野の用心深いことには、上から締りをして、開かぬ樣になつてゐるではございませんか。たゞ御本を讀むのなら、何も錠まで卸さなくてもと、そんな一寸したことまでが、氣縣りの種になるのでございます。

どうしようかしら。こゝを叩いて開けて頂かうかしら。いや〳〵、この夜更けに、そんなことをしたなら、はしたない心の内を見すかされ、猶更疎んじられはしないかしら。でも、この樣な、蛇の生殺しの樣な狀態が、いつまでも續くのだつたら、とても私には耐へられない。一そ思ひ切つてこゝを開けて頂いて、母屋から離れた藏の中を幸ひに、今夜こそ、日頃の疑ひを夫の前にさらけ出して、あの人の本當の心持を聞いて見ようかしら。などと、とつおいつ思ひ惑つて、落し戸の下に佇んでゐました時、丁度その時、實に恐ろしいことが起こつたのでございます。

五

その晩、どうして私が藏の中へなど參つたのでございませう。夜更けに藏の二階で、何事のあらう筈もないことは、常識で考へても分りさうなものですのに、ほんたうに馬鹿々々しい樣な、

疑心暗鬼から、ついそこへ參つたといふのは、理窟では説明の出來ない、何かの感應があつたのでございませうか。俗にいふ蟲の知らせでもあつたのでございませうか。この世には、時々常識では判斷のつかない樣な、意外なことが起るものでございます。その時、私は藏の二階から、ひそ〳〵話の聲を、それも男女二人の話聲を、洩れ聞いたのでございました。男の聲はいふまでもなく門野のでしたが、相手の女は一體全體何者でございませうか。

まさかと思つてゐました、私の疑ひが、餘りに明かな事實となつて現れたのを見ますと、世慣れぬ小娘の私は、たゞもうハッとして、腹立たしいよりは恐ろしく、恐ろしさと、身も世もあらぬ悲しさに、ワッと泣き出したいのを、僅にくひしめて、瘧の樣に身を戰かせながら、でも、そんなでゐて、やつぱり上の話聲に聞き耳を立てないではゐられなかつたのでございます。

「この樣なあふ瀨を續けてゐては、あたし、あなたの奥樣にすみませんわね。」

細々とした女の聲は、それが餘りに低いために、殆ど聞き取れぬほどでありましたが、聞えぬ所は想像で補つて、やつと意味を取ることが出來たのでございます。聲の調子で察しますと、女は私よりは三つ四つ年かさで、しかし私の樣にこんなに太つちやうではなく、ほつそりとした、丁度泉鏡花さんの小説に出て來る樣な、夢の樣に美しい方に違ひないのでございます。

「私もそれを思はぬではないが」と、門野の聲がいふのでございます。「いつもいつて聞かせる通り、私はもう出來るだけのことをして、あの京子を愛しようと努めたのだけれど、悲しいことには、それがやつぱり駄目なのだ。若い時から馴染を重ねたお前のことが、どう思ひ返しても、思ひ返しても、私にはあきらめ兼ねるのだ。京子にはお詫のしようもないほど濟まぬことだけれど濟まない濟まないと思ひながら、やつぱり、私はかうして、夜毎にお前の顏を見ないではゐられぬのだ。どうか私の切ない心の内を察しておくれ。」

門野の聲ははつきりと、妙に切口上に、せりふめいて、私の心に食ひ入る樣に響いて來るのでございます。

「嬉しうございます。あなたの樣な美しい方に、あの御立派な奥樣をさし置いて、それほどに思つて頂くとは、私はまあ、何といふ果報者でせう。嬉しうございますわ。」

そして、極度に鋭敏になつた私の耳は、女が門野の膝にでももたれたらしい氣勢を感じるのでございます。……

まあ御想像なすつて下さいませ。私のその時の心持がどの樣でございましたか。もし今の年でしたら、何の構ふことがあるものですか、いきなり、戸を叩き破つてゞも、二人のそばへ駈込ん

で、恨みつらみのありたけを、並べもしたでせうけれど、何を申すにも、まだ小娘の當時では、とてもその樣な勇氣が出るものではございません。込み上げて來る悲しさを、袂の端で、ぢつと押へて、おろ〳〵と、その場を立去りも得せず、死ぬる思ひを續けたことでございます。

やがて、ハッと氣がつきますと、ハタ〳〵と、板の間を歩く音がして、誰かゞ落し戸の方へ近づいて參るのでございます。今こゝで顏を合はせては、私にしましても、又先方にしましてもあんまり恥かしいことですから、私は急いで梯子段を下ると、藏の外へ出てその邊の暗闇へ、そつと身をひそめ一つには、さうして女奴の顏をよく見覺えてやりませうと、恨みに燃える目をみはつたのでございます。ガタガタと、落し戸を開く音がして、パッと明りがさし、雪洞を片手にそれでも足音を忍ばせて下りて來ましたのは、まがふ方なき私の夫、そのあとに續く奴めと、いきまいて待てど暮せど、もうあの人は、藏の大戸をガラ〳〵と締めて、私の隱れてゐる前を通りすぎ、庭下駄の音が遠ざかつていつたのに、女は下りて來る氣勢もないのでございます。

藏のことゆゑ一方口で、窓はあつても、皆金網で張りつめてありますので外に出口はない筈。それが、こんなに待つても、戸の開く氣勢も見えぬのは、餘りといへば不思議なことでございます。第一、門野が、そんな大切な女を一人あとに殘して、立去る譯もありません。これはもし

や、長い間の企らみで、藏のどこかに、祕密な抜け穴でも拵へてあるのではなからうか。さう思へば、眞つ暗な穴の中を、戀に狂つた女が、男にあひたさ一心で、怖さも忘れ、ゴソ〳〵と傳つてゐる景色が幻の樣に目に浮かび、その幽かな物音の中に一人でゐるのが怖くなつたのでございます。また夫が私のゐないのを不審に思つてはと、それも氣が〻りなものですから、兎も角も、その晩は、それだけで、母屋の方へ引返すことにいたしました。

六

それ以來、私は幾度闇夜の藏へ忍んで參つたことでございませう。そして、そこで、夫達の樣樣の睦言を立聞きしては、どの樣に、身も世もあらぬ思ひをいたしたことでございませう。その度毎に、どうかして相手の女を見てやりませうと、色々に苦心をしたのですけれど、いつも最初の晩の通り、藏から出て來るのは夫の門野だけで、女の姿なぞはチラリとも見えはしないのでございます。ある時はマッチを用意して行きまして、夫が立去るのを見すまし、ソッと藏の二階へ上つて、マッチの光でその邊を探し廻つたこともありましたが、どこへ隱れる暇もないのに、女の姿はもう影もさゝぬのでございます。またある時は、夫の隙を窺つて、晝間藏の中へ忍び込

み、隅から隅を覗き廻つて、もしや拔け道でもありはしないか、又ひよつとして、窓の金網でも破れてはしないかと、樣々に檢べて見たのですけれど、藏の中には、鼠一匹逃げ出す隙間も見當たらぬのでございました。

何といふ不思議でございませう。それを確めますと、私はもう、悲しさ口惜しさよりも、いふにいはれぬ不氣味さに、思はずゾッとしないではゐられませんでした。さうしてその翌晩になれば、どこから忍んで參るのか、やつぱり、いつもの艶めかしい囁き聲が、夫との睦言を繰返し、又幽靈の樣に、いづことも知れず消え去つてしまふのでございます。もしや何かの生靈が、門野に魅入つてゐるのではないでせうか。生來憂鬱で、どことなく普通の人と違つた所のある、蛇を思はせる樣な門野には（それ故に又、私はあれほども、あの人に魅せられてゐたのかも知れません）さうした、生靈といふ樣な、異形のものが、魅入り易いのではありますまいか。などゝ考へますと、はては、門野自身が、何かかう魔性のものにさへ見え出して、何とも形容の出來ない、變な氣持になつて參るのでございます。一そのこと、里へ歸つて、一伍一什を話さうか、それとも、門野の親御さま達に、このことをお知らせしようか、私は餘りの怖さ不氣味さに幾度かそれを決心しかけたのですけれど、でも、まるで雲を摑む樣な、怪談めいた事柄を、うかつにいひ出

しては頭から笑はれさうで、却て恥をかく樣なことがあつてはならぬと、娘心にもヤッと堪へて、一日二日は、その決心を延ばしてゐたのでございます。考へて見ますと、その時分から、私は隨分きかん坊でもあつたのでございますわね。

そして、ある晩のことでございました。私はふと妙なことに氣づいたのでございます。それは、藏の二階で、門野達のいつものあふ瀨が濟みまして、門野がいざ二階を下りるといふ時に、バタンと輕く、何かの蓋のしまる音がして、それから、カチ〳〵と錠前でも卸すらしい氣勢がしたのでございます。よく考へて見れば、この物音は、ごく幽かではありましたが、いつの晩にも必ず聞いた樣に思はれるのでございます。藏の二階でそのやうな音を立てるものは、そこに幾つも並んでゐます長持の外にはありません。さては相手の女は長持の中に隱れてゐるのではないからし。生きた人間なれば、食事も攝らなければならず、第一、息苦しい長持の中に、そんな長い間忍んでゐられやう道理はない筈ですけれど、なぜか、私には、それがもう間違ひのない事實の樣に思はれて來るのでございます。

そこへ氣がつきますと、もうぢつとしてはゐられません。どうかして、長持の鍵を盜み出して、長持の蓋をあけて、相手の女奴を見てやらないでは氣が濟まぬのでございます。なあに、い

ざとなつたら、くひついてゞも、ひつ掻いてゞも、あんな女に負けてなるものか、もうその女が長持の中に隱れてゐるときまりでもした樣に、私は齒ぎしりを嚙んで、夜のあけるのを待つたものでございます。

その翌日、門野の手文庫から鍵を盜み出すことは、案外易々と成功いたしました。その時分には私はもうまるで夢中ではありましたけれど、それでも、十九の小娘にしましては、身に餘る大仕事でございました。それまでとても、眠られぬ夜が續き、さぞかし顏色も青ざめ、身體も瘦せ細つてゐたことでありませう。幸ひ御兩親とは離れた部屋に起き伏してゐましたのと、夫の門野は、あの人自身のことで夢中になつてゐましたのとで、その半月ばかりの間を、怪しまれもせず過ごすことが出來たのでございます。さて、鍵を持つて、晝間でも薄暗い、冷たい土の匂ひのする、土藏の中へ忍び込んだ時の氣持、それがまあ、どんなでございましたか。よくまああの樣な眞似が出來たものだと、今思へば、一そ不思議な氣もするのでございます。

ところが鍵を盜み出す前でしたか、それとも藏の二階へ上りながらでありましたか、千々に亂れる心の中で、私はふと滑稽なことを考へたものでございます。どうでもよいことではありますけれど、ついでに申上げて置きませうか。それは、先日からのあの話聲はもしや門野が獨で、聲

色を使つてゐたのではないかといふ疑ひでございました。まるで落し話の樣な想像ではありますが、例へば小說を書きますためとか、お芝居を演じますためとかに、人に聞えない藏の二階で、そつとせりふのやり取りを稽古してゐらつしやるのではあるまいか、そして、長持の中には女なぞではなくて、ひよつとしたら、芝居の衣裳でも隱してあるのではないか、といふ途方もない疑ひでございました。ほほほゝゝゝ、私はもうのぼせ上つてゐたのでございますわね。意識が混亂して、ふとその樣な、我身に都合のよい妄想が、浮かび上るほど、それほど私の頭は亂れ切つてゐたのでございます。なぜと申して、あの睦言の意味を考へましても、その樣な馬鹿々々しい聲色を使ふ人が、どこの世界にあるものでございますか。

七

門野家は町でも知られた舊家だものですから、藏の二階には、先祖以來の樣々の古めかしい品々が、まるで骨董屋の店先の樣に並んでゐるのでございます。三方の壁には今申す丹塗りの長持が、ズラリと並び、一方の隅には、昔風の縱に長い本箱が、五つ六つ、その上には、本箱に入り切らぬ黃表紙、靑表紙が、蟲の食つた背中を見せて、ほこりまみれに積み重ねてあります。棚の

上には、古びた軸物の箱だとか、大きな紋のついた兩掛け、葛籠の類古めかしい陶器類、それらに混つて、異樣に目を惹きますのは、鐵漿の道具だといふ、巨大なお椀のやうな塗物、塗り盥、それには皆、年數がたつて赤くなつてゐますけれど、一々金紋が蒔繪になつてゐるのでございます。それから一番不氣味なのは、階段を上つたすぐの所に、まるで生きた人間の樣に鎧櫃の上に腰かけてゐる、二つの飾り具足、一つは黑絲縅のいかめしいので、もう一つはあれが緋縅と申すのでせうか、黑ずんで、所々絲が切れてはゐましたけれど、それが昔は、火の樣に燃えて、さぞかし立派なものだつたのでございませう。兜もちやんと頂いて、それに鼻から下を覆ふ、あの恐ろしい鐵の面までも揃つてゐるのでございます。晝でも薄暗い藏の中で、それをぢつと見てゐますと、今にも籠手、脛當が動き出して、丁度頭の上に懸けてある、大身の槍を取るかとも思はれ、いきなりキャッと叫んで、逃げ出したい氣持さへいたすのでございます。

小さな窓から、金網を越して、淡い秋の光がさしてはゐますけれど、その窓があまりに小さいため、藏の中は、隅の方になると、夜の樣に暗く、そこに蒔繪だとか、金具だとかいふものだけが、魑魅魍魎の目の樣に、怪しく、鈍く、光つてゐるのでございます。その中で、あの生靈の妄想を思ひ出しでもしようものなら、女の身で、どうまあ辛抱が出來ませう。あの怖さ恐ろしさ

を、やつと堪へて、兎も角も、長持を開くことが出來ましたのは、やつぱり、戀といふ曲者の強い力でございませうね。

まさかそんなことがと思ひながら、でも何となく薄氣味惡くて、一つ〳〵長持の蓋を開く時には、からだ中から冷いものがにじみ出し、ハッと息も止まる思ひでございました。ところが、その蓋を持上げて、まるで棺桶の中でも覗く氣で、思ひ切つて、グッと首を入れて見ますと、豫期してゐました通り、或は豫期に反して、どれもこれも古めかしい衣類だとか、夜具、美しい文庫類などが入つてゐるばかりで、何の疑はしいものも出ては來ないのでございます。でも、あの極つた樣に聞えて來た、蓋のしまる音、錠前のおりる音は、一體何を意味するのでありませう。をかしい、をかしいと思ひながらふと目にとまつたのは、最後に開いた長持の中に、幾つかの白木の箱がつみ重なつてゐて、その表に、床しいお家流で「お雛樣」だとか「五人囃子」だとか「三人上戸」だとか、書き記してある、雛人形の箱でございました。私は、どこにも怪しいものがゐないことを確めて、いくらか安心してゐたのでもありませう、その際ながら、女らしい好奇心から、ふとそれらの箱を開けて見る氣になりました。

一つ一つ外に取り出して、これがお雛樣、これが左近の櫻、右近の橘と、見て行くに從つ

て、そこに、樟腦の匂ひと一緒に、何とも古めかしく、物懷しい氣持が漂つて、昔物のきめの濃やかな人形の肌が、いつとなく、私を夢の國へ誘つて行くのでございました。私はさうして、暫くの間は、雛人形で夢中になつてゐましたが、やがてふと氣がつきますと、長持の一方の側に、外のとは違つて、三尺以上もある樣な長方形の白木の箱が、さも貴重品といつた感じで、置かれてあるのでございます。その表には、同じくお家流で「拜領」と記されてあります。何であらうと、そつと取り出して、それを開いて中の物を一目見ますと、ハッと何かの氣に打たれて、私は思はず顏をそむけたのでございます。そして、その瞬間に靈感といふのは、あゝした場合を申すのでございませうね、數日來の疑ひが、もう、すつかり解けてしまつたのでございます。

八

それほど私を驚かせたものが、ただ一個の人形に過ぎなかつたと申せば、あなたはきつと「なんだ。」とお笑ひなさるかも知れません。ですが、それは、あなたが、まだ本當の人形といふものを、昔の人形師の名人が精根を盡くして、拵へ上げた藝術品を、御存知ないからでございますあなたはもしや、博物館の片隅なぞで、ふと古めかしい人形に出あつて、その餘りの生々しさ

に、何とも知れぬ戰慄をば感じなすつたことはないでせうか。それが若し女兒人形や稚兒人形であつた時には、それの持つ、この世の外の夢の樣な魅力に、びつくりなすつたことはないでせうか。あなたは御みやげ人形といはれるものゝ、不思議な凄味を御存知でゐらつしやいませうか。或は又、往昔衆道の盛んでございました時分、好き者達が、馴染の色若衆の似顏人形を刻ませて日夜愛撫したといふあの奇態な事實を御存知でゐらつしやいませうか。いゝえ、その樣な遠いことを申さずとも、例へば、文樂の淨瑠璃人形にまつはる不思議な傳說、近代の名人安本龜八の生人形なぞを御承知でございましたなら、私がその時、たゞ一個の人形を見て、あの樣に驚いた心持を、十分御察し下さることが出來ると存じます。

私が長持の中で見つけました人形は後になつて、門野のお父さまに、そつと御尋ねして知つたのでございますが、殿樣から拜領の品とかで、安政の頃の名人形師立木と申す人の作と申すことでございます。俗に京人形と呼ばれてをりますけれど、實は浮世人形とやらいふものなさうで、身の丈三尺餘り、十歲ばかりの小兒の大きさで、手足も完全に出來、頭には昔風の島田を結ひ昔染の大柄友染が着せてあるのでございます。これも後に伺つたのですけれど、それが立木といふ人形師の作風なのださうで、そんな昔の出來にも拘らず、その女兒人形は、不思議と近代的な顏を

してゐるのでございます。眞ッ赤に充血して何かを求めてゐる樣な、厚味のある唇、唇の兩脇で二段になつた豐頰、物いひたげにパッチリ開いた二重瞼、その上に大樣に頰笑んでゐる濃い眉、そして何よりも不思議なのは、羽二重で紅綿を包んだ樣に、ほんのりと色づいてゐる、微妙な耳の魅力でございました。その花やかな、情慾的な顏が、時代のために幾分色があせて唇の外は妙に靑ざめ、手垢がついたものか、滑かな肌がヌメ〳〵と汗ばんで、それゆゑに、一層惱ましく、凄かしく見えるのでございます。

薄暗く、樟腦臭い、土藏の中で、その人形を見ました時には、ふつくらと恰好よくふくらんだ乳のあたりが、呼吸をして、今にも唇がほころびさうで、その餘りの生々しさに私はハッと身震を感じたほどでありました。

まあ何といふことでございませう、私の夫は、命のない、冷たい人形を戀してゐたのでございます。この人形の不思議な魅力を見ましては、もう、その他に謎の解き樣はありません。人嫌ひな夫の性質、藏の中の睦言、長持の蓋のしまる音、姿を見せぬ相手の女、色々の點を考へ合せて、その女と申すのは、實はこの人形であつたと解釋する外はないのでございます。

これは後になつて、二三の方から伺つたことを、寄せ集めて、想像してゐるのでございますが、門野は生れながらに夢見勝ちな、不思議な性癖を持つてゐて、人間の女を戀する前に、ふとしたことから、長持の中の人形を發見して、それの持つ强い魅力に魂を奪はれてしまつたのでございませう。あの人は、ずつと最初から、藏の中で本なぞ讀んではゐなかつたのでございます。あの方から伺ひますと、人間が人形とか佛像とかに戀したためしは、昔から決して少くはないと申します。不幸にも私の夫がさうした男で、更に不幸なことには、その夫の家に偶然稀代の名作人形が保存されてゐたのでございます。

人でなしの戀、この世の外の戀でございます。その樣な戀をするものは、一方では、生きた人間では味はふことの出來ない、惡夢の樣な、或は又お伽噺の樣な、不思議な歡樂に魂をしびらせながら、しかし又一方では、絕え間なき罪の苛責に責められて、どうかしてその地獄を逃れたいと、あせりもがくのでございます。門野が、私を娶つたのも、無我夢中に私を愛しようと努めたのも、皆そのはかない苦悶の跡に過ぎぬのではございませんか。さう思へば、あの睦言の「京子に濟まぬ云云」といふ、言葉の意味も解けて來るのでございます。夫が人形のために女の聲色を使つてゐたことも、疑ふ餘地はありません。あゝ、私は、何といふ月日の下に生れた女でございませう。

九

さて　私の懺悔話と申しますのは、實はこれからあとの、恐ろしい出來事についてゞございます。長々とつまらないおしやべりをしました上に、「まだ續きがあるのか」と、さぞうんざりなさいませうが、いゝえ、御心配には及びません。その要點と申しますのは、ほんの僅かな時間で、すつかりお話出來ることなのでございますから。

びつくりなすつてはいけません。その恐ろしい出來事と申しますのは、實はこの私が人殺しの罪を犯したお話でございます。その樣な大罪人が、どうして處罰をも受けないで安穩に暮してゐるかと申しますと、その人殺しは私自身直接に手を下した譯でなくいはゞ間接の罪なものですから、たとへあの時私がすべてを自白してゐましても、罪を受けるほどのことはなかつたのでございます。とはいへ、法律上の罪はなくとも、私は明かにあの人を死に導いた下手人でございます。それを、娘心のあさはかにも、一時の恐れにとりのぼせて、つい白狀しないで過ごしましたことは、返す返すも申譯なく、それ以來ずつと今日まで、私は一夜としてやすらかに眠つたことはありません。今かうして懺悔話をいたしますのも、亡き夫への、せめてもの罪亡ぼしでございます。

しかし、その當時の私は、戀に目がくらんでゐたのでございませう。私の戀敵が、相手もあらうに生きた人間ではなくて、いかに名作とはいへ、冷い一個の人形だと分りますと、そんな無生の泥人形に見返られたかと、もう口惜しくて口惜しくて、口惜しいよりは畜生道の夫の心が淺間しく、もしこの樣な人形がなかつたなら、こんなことにもなるまいと、はては立木といふ人形師さへうらめしく思はれるのでございます。エ、、まゝよこの人形奴の、艶かしい這面を、叩きのめして、手足を引ちぎつてしまつたなら、門野とてまさか相手のない戀も出來はすまい。さう思ふと、もう一ときも猶豫がならず、その晩、念のために、もう一度夫と人形とのあふ瀨を確めた上、翌早朝、藏の二階へ駈上つて、たうとう人形を滅茶々々に引ちぎり目も鼻も口も分らぬ樣に叩きつぶしてしまつたのでございます。かうして置いて、夫のそぶりを注意すれば、まさかそんな筈はないのですけれど、私の想像が間違つてゐたかどうか分る譯なのでございます。

さうして丁度人間の轢死人の樣に、人形の首、胴、手足とばらばらになつて、昨日に變る醜いむくろをさらしてゐるのを見ますと、私はやつと胸をさすることが出來たのでございます。

十

その夜、何も知らぬ門野は、又しても私の寢息を窺ひながら、雪洞をつけて、緣外の闇へと消えました。申すまでもなく人形とあふ瀨を急ぐのでございます。私は眠つたふりをしながら、そつとその後姿を見送つて、一應は小氣味のよい樣な、しかし又何となく悲しい樣な、不思議な感情を味はつたことでございます。

人形の死骸を發見した時、あの人はどの樣な態度を示すでせう。異常な戀の恥かしさに、そつと人形のむくろを取り片づけて、そ知らぬふりをしてゐるか、それとも、下手人を探し出して、怒りつけるか、怒りのまゝ叩かれようと、怒鳴られようと、もしさうであつたなら、私はどんなに嬉しからう。門野が怒るからには、あの人は人形と戀なぞしてゐなかつたしるしなのですもの。私はもう氣もそゞろに、ぢつと耳をすまして、土藏の中の氣勢を窺つたのでございます。

さうして、どれほど待つたことでせう。待つても待つても、夫は歸つて來ないのでございます。壞れた人形を見た上は、藏の中に何の用事もない筈のあの人が、もういつもほどの時間もたつたのになぜ歸つて來ないのでせう。もしかしたら、相手はやつぱり人形ではなくて、生きた人

間だつたのでありませうか。それを思ふと氣が氣でなく、私はもう辛抱がしきれなくて、床から起き上りますと、もう一つの雪洞を用意して、闇のしげみを藏の方へと走るのでございました。

藏の梯子段を駈上りながら、見れば例の落し戸は、いつになく開いたまゝ、それで上には雪洞がともつてゐると見え、赤茶けた光りが、階段の下までも、ぼんやり照してをります。ある豫感にハッと胸を躍らせて、一飛びに階上へ飛上つて、「旦那樣」と叫びながら、雪洞のあかりにすかして見ますと、あゝ私の不吉な豫感は適中したのでございました。そこには夫のと、人形のと、二つのむくろが折り重なつて、板の間は血潮の海、二人のそばに家重代の名刀が、血を啜つてころがつてゐるのでございます。人間と土くれとの情死、それが滑稽に見えるどころか、何とも知れぬ嚴肅なものが、サーッと私の胸を引しめて、聲も出ず涙も出ず、たゞもう茫然と、そこに立ちつくす外はないのでございました。

見れば、私に叩きひしがれて、半殘つた人形の唇から、さも人形自身が血を吐いたかの樣に、血潮の飛沫が一しづく、その首を抱いた夫の腕の上にタラリと垂れて、そして人形は、斷末魔の不氣味な笑ひを笑つてゐるのでございました。

D坂の殺人事件

（上）事實

それは九月初旬のある蒸し暑い晩のことであつた。私は、D坂の大通りの中程にある、白梅軒といふ、行きつけのカフエで、冷しコーヒを啜つてゐた。當時私は、學校を出たばかりでまだこれといふ職業もなく、下宿屋にゴロ〳〵して本でも讀んでゐるか、それに飽ると、當てどもなく散歩に出て、あまり費用のかゝらぬカフエ廻りをやる位が、毎日の日課だつた。この白梅軒といふのは、下宿屋から近くもあり、どこへ散歩するにも必ずその前を通る樣な位置にあつたので、隨つて一番よく出入した譯であつたが、私といふ男は惡い癖で、カフエに入るとどうも長尻になる。それも、元來食慾の少い方なので、一つは嚢中の乏しいせゐもあつてだが、洋食一皿註文するでなく、安いコーヒを二杯も三杯もお代りして、一時間も二時間もぢつとしてゐるのだ。さうかといつて、別段、ウエトレスに思召があつたり、からかつたりする譯ではない。まあ、下宿より何となく派手で、居心地がいゝのだらう。私はその晩も、例によつて、一杯の冷しコーヒを十

分もかゝつて飲みながら、いつもの往來に面したテーブルに陣取つて、ボンヤリ窓の外を眺めてゐた。

さてこの白梅軒のあるD坂といふのは、以前菊人形の名所だつた所で、狹かつた通りが、市區改正で取擴げられ、何間道路とかいふ大通になつて間もなく、だからまだ大通の兩側に所々空地などもあつて、今よりはずつと淋しかつた時分の話だ。大通を越して白梅軒の丁度眞向うに、一軒の古本屋がある。實は私は、先程から、そこの店先を眺めてゐたのだ。みすぼらしい場末の古本屋で、別段眺める程の景色でもないのだが、私には一寸特別の興味があつた。といふのは、私が近頃この白梅軒で知合になつた一人の妙な男があつて、名前は明智小五郎といふのだが、話をして見ると如何にも變り者で、それで頭がよさ相で、私の惚れ込んだことは、探偵小說好なのだ。その男の幼馴染の女が、今ではこの古本屋の女房になつてゐるといふことを、この前、彼から聞いてゐたからだつた。二三度本を買つて覺えて居る所によれば、この古本屋の細君といふのが、却々の美人で、どこがどうといふではないが、何となく官能的に男を引きつける樣な所があるのだ。彼女は夜はいつでも店番をしてゐるのだから、今晩もゐるに違ひないと、店中を、といつても二間半間口の手狹な店だけれど、探して見たが、誰れもゐない。いづれそのうちに出て來

るだらうと、私はぢつと目で待つてゐたものだ。

だが、女房は却々出て來ない。で、いゝ加減面倒臭くなつて、隣の時計屋へ目を移さうとしてゐる時であつた。私はふと店と奥の間との境に閉めてある障子の格子戸がピッシャリ閉るのを見つけた。——その障子は、專門家の方では無窓と稱するもので、普通、紙をはるべき中央の部分が、こまかい縱の二重の格子になつてゐて、それが開閉出來るのだ——ハテ變なこともあるものだ。古本屋などといふものは、萬引され易い商賣だから、假令店に番をしてゐなくても、奥に人がゐて、障子のすき間などから、ぢつと見張つてゐるものなのに、そのすき見の箇所を塞いで了ふとはをかしい。寒い時分なら兎も角九月になつたばかりのこんな蒸し暑い晩だのに。第一あの障子が閉切つてあるのから變だ。そんな風に色々考へて見ると、古本屋の奥の間に何事かあり相で、私は目を移す氣になれなかつた。

古本屋の細君といへば、ある時、このカフェのウエトレス達が、妙な噂をしてゐるのを聞いたことがある。何でも、錢湯で出逢ふお神さんや娘さん達の棚卸しの續きらしかつたが、「古本屋のお神さんは、あんな綺麗な人だけれど、裸體になると、身體中傷だらけだ、叩かれたり抓られたりした痕に違ひないわ。別に夫婦仲が惡くもない樣だのに、おかしいわねえ。」すると別の女が言

れを受けて喋るのだ「あの並びの蕎麥屋の旭屋さんのお神さんだつて、よく傷をしてゐるわ。あれもどうも叩かれた傷に違いないわ。」……で、この、噂話が何を意味するか、私は深くも氣に止めないで、たゞ亭主が邪慳なのだらう位に考へたことだが。讀者諸君、それが却々さうではなかつたのだ。この一寸した事柄が、この物語全體に大きな關係を持つてゐたことが、後になつて分つた。

それは兎も角、さうして、私は三十分程も同じ所を見詰めてゐた。蟲が知らすとでも云ふのか、何だかかう、傍見をしてゐるすきに何事か起り相で、どうも外へ目が向けられなかつたのだ。其時、先程一寸名前の出た明智小五郎が、いつもの荒い棒縞の浴衣を着て、變に肩を振る歩き方で、窓の外を通りかゝつた。彼は私に氣づくと會釋をして中へ入つて來たが、冷しコーヒを命じて置いて、私と同じ樣に窓の方を向いて、私の隣に腰かけた。そして、私が一つ所を見詰めてゐるのに氣づくと、彼はその私の視線をたどつて、同じく向うの古本屋を眺めた。しかも、不思議なことには、彼も亦如何にも興味ありげに、少しも目をそらさないで、その方を凝視し出したのである。

私達は、さうして、申合せた樣に同じ場所を眺めながら、色々無駄話を取交した。その時私達

の間にどんな話題が話されたか、今ではもう忘れてもゐるし、それに、この物語には餘り關係のないことだから、略するけれど、それが、犯罪や探偵に關したものであつたことは確かだ。試みに見本を一つ取出して見ると、

「絶對に發見されない犯罪といふものは不可能でせうか。僕は隨分可能性があると思ふのですがね。例へば、谷崎潤一郎の「途上」ですね。あゝした犯罪は先づ發見されることはありませんよ。尤も、あの小説では、探偵が發見したことになつてますけど、あれは作者のすばらしい想像力が作り出したことですからね。」と明智。

「イヤ、僕はさうは思ひませんよ。實際問題としてなら兎も角、理論的に云つて、探偵の出來ない犯罪なんてありませんよ。唯、現在の警際に「途上」に出て來る樣な偉い探偵がゐない丈ですよ。」と私。

ざつとかう云つた風なのだ。だが、ある瞬間、二人は云ひ合せた樣に、ふと默り込んで了つた。さつきから話しながらも目をそらさないでゐた向うの古本屋に、ある面白い事件が發生してゐたのだ。

「君も氣づいてゐる樣ですね。」

と私が囁くと、彼は即座に答へた。

「本泥坊でせう。どうも變ですね。僕も此處へ入つて來た時から、見てゐたんですよ。これで四人目ですね。」

「君が來てからまだ三十分にもなりませんが、三十分に四人も、少しをかしいですね。僕は君の來る前からあすこを見てゐたんですよ。一時間程前にね、あの障子があるでせう。あれの格子の樣になつた所が、閉るのを見たんですが、それからずつと注意してゐたのです。」

「家の人が出て行つたのぢやないのですか。」

「それが、あの障子は一度も開かないのですよ。出て行つたとすれば裏口からでせうが、……三十分も人がゐないなんて確かに變ですよ。どうです、行つて見ようぢやありませんか。」

「さうですね。家の中には別狀ないとしても、外で何かあつたのかも知れませんからね。」

私はこれが犯罪事件でもあつて呉れゝば面白いがと思ひながらカフエを出た。明智とても同じ思ひに違ひなかつた。彼も少からず興奮してゐるのだ。

古本屋は、よくある型で、店は全體土間になつてゐて、正面と左右に天井まで屆く樣な本棚を取付け、その腰の所が本を並べる爲の臺になつてゐる。土間の中央には、島の樣に、これも本を

並べたり積上げたりする爲の、長方形の臺が置いてある。そして、正面の本棚の右の方が三尺許りあいてゐて、奥の部屋との通路になり、先に云つた一枚の障子が立てゝある。いつもは、この障子の前の半疊程の疊敷の所に、主人か細君がチョコンと坐つて番をしてゐるのだ。

明智と私とは、その疊敷の所まで行つて、大聲に呼んで見たけれど、何の返事もない。果して誰もゐないらしい。私は障子を少し開けて、奥の間を覗いて見ると、中は電燈が消えて眞暗だが、どうやら、人間らしいものが、部屋の隅に倒れてゐる樣子だ。不審に思つてもう一度聲をかけたが、返事をしない。

「構はない、上つて見ようぢやありませんか。」

そこで、二人はドカ〳〵奥の間へ上り込んで行つた。明智の手で電燈のスヰッチがひねられた。そのとたん、私達は同時に「アッ」と聲を立てた。明るくなつた部屋の片隅には、女の死骸が横はつてゐたのだ。

「こゝの細君ですね。」やつと私が云つた。「首を絞められてゐる樣ぢやありませんか。」

明智は側へ寄つて、死體を檢べてゐたが、「とても蘇生の見込はありませんよ。早く警察へ知らせなきや。僕、自動電話まで行つて來ませう。君、番をしてゝ下さい。近所へはまだ知らせない方がいゝでせう。手掛りを消して了つてはいけないから。」

彼はかう命令的に云ひ殘して、半町許りの所にある自動電話へ飛んで行つた。

平常から、犯罪だ探偵だと、議論丈は却々一人前にやつてのける私だが、さて實際に打つつかつたのは初めてだ。手のつけ樣がない。私は、たゞ、まじ〳〵と部屋の樣子を眺めてゐる外はなかつた。

部屋は一間切りの六疊で、奥の方は、右一間は幅の狹い緣側をへだてゝ、二坪許りの庭と便所があり、庭の向うは板塀になつてゐる。——夏のことで、開けぱなしだから、すつかり、見通しなのだ、——左半間は開き戸で、その奥に二疊敷程の板の間があり裏口に接して狹い流し場が見え、そこの腰高障子は閉つてゐる。向つて右側は、四枚の襖が閉つてゐて中は二階への物入場になつてゐるらしい。ごくありふれた安長屋の間取だ。

死骸は、左側の壁寄りに、店の間の方を頭にして倒れてゐる。私は、なるべく兇行當時の模樣を亂すまいとして、一つは氣味も惡かつたので、死骸の側へ近寄らない樣にしてゐた。でも、狹い部屋のことであり、見まいとしても、自然その方に目が行くのだ。女は荒い中形模樣の浴衣を着て、殆ど仰向きに倒れてゐる。併し、着物が膝の上の方までまくれて、股がむき出しになつて

ゐる位で、別に抵抗した様子はない。首の所は、よくは分らぬが、どうやら、絞められた痕が紫色になつてゐるらしい。

表の大通りには往來が絶えない。聲高に話し合つて、カラ〳〵と日和下駄を引きずつて行くのや、酒に醉つて流行唄をどなつて行くのや、至極天下泰平なことだ。そして、障子一重の家の中には、一人の女が慘殺されて横つてゐる。何といふ皮肉だ。私は妙にセンテイメンタルになつて、呆然と佇んでゐた。

「すぐ來る相ですよ。」

明智が息を切つて歸つて來た。

「あ、さう。」

私は何だか口を利くのも大儀になつてゐた。二人は長い間、一言も云はないで顔を見合せてゐた。

間もなく、一人の正服の警官が背廣の男と連立つてやつて來た。正服の方は、後で知つたのだが、K警察署の司法主任で、もう一人は、その顔つきや持物でも分る様に、同じ署に屬する警察醫だつた。私達は司法主任に、最初からの事情を大略説明した。そして、私はかう附加へた。

「この明智君がカフェへ入つて來た時、偶然時計を見たのですが、丁度八時半でしたから、この障子の格子が閉つたのは、恐らく八時頃だつたと思ひます。その時は確か中にも電燈がついてました。ですから、少くとも八時頃には、誰れか生きた人間がこの部屋にゐたことは明です。」

司法主任が私達の陳述を聞取つて、手帳に書留めてゐる間に、警察醫は一應死體の檢診を濟ませてゐた。彼は私達の言葉のとぎれるのを待つて云つた。

「絞殺ですね。手でやられたのです。これ御覽なさい。この紫色になつてゐるのが指の痕です。それから、この出血してゐるのは爪が當つた箇所ですよ。拇指の痕が頸の右側についてゐるのを見ると、右手でやつたものですね。さうですね。恐らく死後一時間以上はたつてゐないでせう。併し、無論もう蘇生の見込はありません。」

「上から押へつけたのですね。」司法主任が考へ考へ云つた。「併し、それにしては、抵抗した様子がないが……恐らく非常に急激にやつたのでせうね。ひどい力で。」

それから、彼は私達の方を向いて、この家の主人はどうしたのだと尋ねた。だが、無論私達が知つてゐる筈はない。そこで、明智は氣を利かして、隣家の時計屋の主人を呼んで來た。

司法主任と時計屋の問答は大體次の様なものであつた。

「主人はどこへ行つて居るのかね。」
「こゝの主人は、毎晩古本の夜店を出しに參りますんで、いつも十二時頃でなきゃ歸つて參りません。ヘイ。」
「どこへ夜店を出すんだね。」
「よく上野の廣小路へ參ります樣ですが、今晩はどこへ出しましたか、どうも手前には分り兼ねますんで。ヘイ。」
「一時間ばかり前に、何か物音を聞かなかつたかね。」
「物音と申しますと。」
「極つてるぢやないか。この女が殺される時の叫び聲とか、格鬪の音とか……。」
「別段これといふ物音を聞きません樣で御座いましたが。」
さうかうする內に、近所の人達が聞傳へて集つて來たのと、通りがかりの彌次馬で、古本屋の表は一杯の人だかりになつた。その中に、もう一方の隣家の足袋屋のお上さんがゐて、時計屋に應援した。そして、彼女も何も物音を聞かなかつた旨陳述した。
この間に、近所の人達は、協議の上、古本屋の主人の所へ使を走らせた樣子だつた。

そこへ、表に自動車の止る音がして、數人の人がドヤ〳〵と入つて來た。それは警察からの急報で駈けつけた裁判所の連中と、偶然同時に到着したK警察署長、及び當時名探偵といふ噂の高かつた小林刑事などの一行だつた。——無論これは後になつて分つたことだ、といふのは、私の友達に一人の司法記者があつて、それがその事件の係りの小林刑事とごく懇意だつたので、私は後日彼から色々と聞くことが出來たのだ。——先着の司法主任は、この人達の前で今までの模樣を說明した。私達も先の陳述をもう一度繰返さねばならなかつた。
「表の戸を閉めませう。」
突然、黑いアルパカの上衣に白いズボンといふ、下廻りの會社員見たいな男が、大聲でどなつて、さつさと戸を閉め出した。これが小林刑事だつた。彼はかうして彌次馬を擊退して置いて、さて探偵にとりかゝつた。彼のやり方は如何にも傍若無人で、檢事や署長などはまるで眼中にない樣子だつた。彼は始めから終りまで一人で活動した。他の人達は唯、彼の敏捷な行動を傍觀する爲にやつて來た見物人に過ぎない樣に見えた。彼は第一に死體を檢べた。頸のまはりは殊に念入りにいぢり廻してゐたが、
「この指の痕には別に特徵がありません。つまり普通の人間が、右手で押へつけたといふ以外に

何の手掛りもありません。」

と檢事の方を見て云つた。次に彼は一度死體を裸體にして見るといひ出した。そこで、議會の祕密會見たいに、傍聽者の私達は、店の間へ追出されねばならなかつた。だから、その間にどう云ふ發見があつたか、よく分らないが、察する所、彼等は死人の身體に澤山の生傷のあることを注意したに相違ない。カフエのウエトレスの噂してゐたあれだ。

やがて、この祕密會は解かれたけれど、私達は奥の間へ入つて行くのを遠慮して、例の店の間と奥との境の疊敷の所から奥の方を覗き込んでゐた。幸なことには、私達は事件の發見者だつたし、それに、後から明智の指紋をとらねばならぬことになつた爲に、最後まで追出されずに濟んだ。といふよりは抑留されてゐたといふ方が正しいかも知れぬ。併し小林刑事の活動は奥の間丈に限られてゐた譯でなく、屋内屋外の廣い範圍に亘つてゐたのだから、一つ所にぢつとしてゐた私達に、その捜査の模様が分らう筈はないのだが、うまい工合に、檢事が奥の間に陣取つてゐて、始終殆ど動かなかつたので、刑事が出たり入つたりする毎に、一々捜査の結果を報告するのを、洩れなく聞きとる事が出來た。檢事はその報告に基いて、調書の材料を書記に書きとめさせてゐた。

先づ、死體のあつた奥の間の捜索が行はれたが、遺留品も、足跡も、その他探偵の目に觸れる何物もなかつた樣子だ。だゞ一つのものを除いては、

「電燈のスキッチに指紋があります。」黑いエボナイトのスキッチに何か白い粉をふりかけてゐた刑事が云つた。「前後の事情から考へて、電燈を消したのは犯人に相違ありません。併し、これをつけたのはあなた方の内どちらですか。」

明智が自分だと答へた。

「さうですか。あとであなたの指紋をとらせて下さい。この電燈は觸らない樣にして、このまゝ取はづして持つて行きませう。」

それから、刑事は二階へ上つて行つて暫く下りて來なかつたが、下りて來るとすぐに裏口の路地を檢べるのだといつて出て行つた。それが十分もかゝつたらうか。やがて、彼はまだついたままの懷中電燈を片手に、一人の男を連れて歸つて來た。それは汚れたクレップシャツにカーキ色のズボンといふ扮裝で、四十許りの汚い男だ。

「足跡はまるで駄目です。」刑事が報告した「この裏口の邊は、日當りが悪いせゐか、ひどいぬかるみで、下駄の跡が滅多無性についてゐるんだから、迚も分りつこありません。ところで、この

男ですが。」と今連れて來た男を指し「これは、この裏の路地を出た所の角に店を出してゐたアイスクリーム屋ですが、若し犯人が裏口から逃げたとすれば、路地は一方口なんですから、必ずこの男の目についた筈です。君、もう一度私の尋ねることに答へて御覽。」

そこで、アイスクリーム屋と刑事の問答。

「今晩八時前後に、この路地を出入したものはないかね。」

「一人もありませんので、日が暮れてからこつち、猫の子一匹通りませんので」アイスクリーム屋は却々要領よく答へる。

「私は長らくこゝへ店を出させて貰つてますが、あすこは、この長屋のお上さん達も、夜分は滅多に通りませんので、何分あの足場の悪い所へ持つて來て、眞暗なんですから。」

「君の店のお客で路地の中へ入つたものはないかね。」

「それも御座いません。皆さん私の目の前でアイスクリームを食べて、すぐ元の方へお歸りになりました。それはもう間違はありません。」

さて、若しこのアイスクリーム屋の證言が信用すべきものだとすると、犯人は假令この家の裏口から逃げたとしても、その裏口からの唯一の通路である路地は出なかつたことになる。さればといつて、表の方から出なかつたことも、私達が白梅軒から見てゐたのだから間違はない。では、彼は一體どうしたのであらう。小林刑事の考によれば、これは、犯人がこの路地を取りまいてゐる裏表二側の長屋の、どこかの家に潛伏してゐるか、それとも借家人の内に犯人があるのかどうかであらう。尤も二階から屋根傳ひに逃げる路はあるけれど、二階を檢べた所によると、表の方の窓は、取りつけの格子が嵌つてゐて少しも動かした樣子はないのだし、裏の方の窓だつて、この暑さで、どこの家も二階は明けつぱなしで、中には物干で凉んでゐる人もある位だから、こゝから逃げるのは一寸難しい樣に思はれる。とかういふのだ。

そこで臨檢者達の間に、一寸捜査方針についての協議が開かれたが、結局、手分けをして近所を軒並に檢べて見ることになつた。といつても、裏表の長屋を合せて十一軒しかないのだから、大して面倒ではない。それと同時に家の中も再度、緣の下から天井裏まで殘る隈なく檢べられた。ところがその結果は、何の得る處もなかつたばかりでなく、却つて事情を困難にして了つた樣に見えた。といふのは、古本屋の一軒置いて隣の菓子屋の主人が、日暮れ時分からつい今し方まで、物干へ出て尺八を吹いてゐたことが分つたが、彼は始めから終ひまで、丁度古本屋の二階の窓の出來事を見逃す筈のない樣な位置に坐つてゐたのだ。

讀者諸君、事件は却々面白くなつて來た。犯人がどこから入つて、どこから逃げたのか、裏口からでもない、二階の窓からでもない、そして表からでは勿論ない。彼は最初から存在しなかつたのか、それとも煙の樣に消えて了つたのか。不思議はそればかりではない。小林刑事が、檢事の前に連れて來た二人の學生が、實に妙なことを申立てたのだ。それは裏側の長屋に間借してゐる、ある工業學校の生徒達で、二人共出鱈目を云ふ樣な男とも見えぬが、それにも拘らず、彼等の陳述は、この事件を益々不可解にする樣な性質のものだつたのである。

檢事の質問に對して、彼等は大體左の樣に答へた。

「僕は、丁度八時頃に、この古本屋の前に立つて、そこの臺にある雜誌を開いて見てゐたのです。すると、奥の方で何だか物音がしたもんですから、ふと目を上げてこの障子の方を見ますと、障子は閉まつてゐましたけれど、この格子の樣になつた所が開いてましたので、そのすき間に一人の男の立つてゐるのが見えました。併し、私が目を上げるのと、その、男が、この格子を閉めるのと殆ど同時でしたから、詳しいことは無論分りませんが、でも、帶の工合で男だつたことは確かです。」

「で、男だつたといふ外に何か氣附いた點はありませんか、背恰好とか、着物の柄とか。」

「見えたのは腰から下ですから、背恰好は一寸分りませんが、着物は黑いものでした。ひよつとしたら、細い縞か絣であつたかも知れませんけれど、私の目には黑無地に見えました。」

「僕もこの友達と一緒に本を見てゐたんです。」ともう一方の學生、「そして、同じ樣に物音に氣づいて同じ樣に格子の閉るのを見ました。ですが、その男は確かに白い着物を着てゐました。縞も模樣もない、眞白な着物です。」

「それは變ではありませんか。君達の内どちらかゞ間違でなけりや。」

「決して間違ではありません。」

「僕も嘘は云ひません。」

この二人の學生の不思議な陳述は何を意味するか、鋭敏な讀者は恐らくある事に氣づかれたであう。實は、私もそれに氣附いたのだ。併し、裁判所や警察の人達は、この點について、餘り深くは考へない樣子だつた。

間もなく、死人の夫の古本屋が、知らせを聞いて歸つて來た。彼は古本屋らしくない、きやしやな、若い男だつたが、細君の死骸を見ると、氣の弱い性質と見えて、聲こそ出さないけれど、涙をぽろ〳〵零してゐた。小林刑事は、彼が落着くのを待つて、質問を始めた。檢事も口を添へ

た。だが、彼等の失望したことには、主人は全然犯人の心當りがないといふのだ。彼は「これに限つて、人様に怨みを受ける様なものではございません」といつて泣くのだ。それに、彼が色々調べた結果、物とりの仕業でないことも確められた。そこで、主人の經歴、細君の身許其他様々の取調べがあつたけれど、それらは別段疑ふべき點もなく、この話の筋に大した關係もないので略することにする。最後に死人の身體にある多くの生傷について刑事の質問があつた。主人は非常に躊躇して居つたが、やつと自分がつけたのだと答へた。ところが、その理由については、くどく訊ねられたにも拘らず、餘り明白な答は與へなかつた。併し、彼はその夜ずつと夜店を出してゐたことが分つてゐるのだから、假令それが虐待の傷痕だつたとしても、殺害の疑ひはかゝらぬ筈だ。刑事もさう思つたのか、深くは穿鑿しなかつた。

さうして、その夜の取調べは一先づ終つた。私達は住所姓名などを書留められ、明智は指紋をとられて、歸途についたのは、もう一時を過ぎてゐた。

若し警察の捜索に手抜かりがなく、又證人達も嘘を云はなかつたとすれば、これは實に不可解な事件であつた。しかも、後で分つた所によると、翌日から引續いて行はれた、小林刑事のあらゆる取調べも何の甲斐もなくて、事件は發生の當夜のまゝ少しだつて發展しなかつたのだ。證人

達は凡て信頼するに足る人々だつた。十一軒の長屋の住人にも疑ふべき所はなかつた。被害者の國許も取調べられたけれど、これ亦、何の變つた事もない。少くとも、小林刑事――彼は先にも云つた通り、名探偵と噂されてゐる人だ――が、全力を盡して捜索した限りでは、この事件は全然不可解と結論する外はなかつた。これもあとで聞いたのだが、小林刑事が唯一の證據品として、頼みをかけて持歸つた例の電燈のスヰッチにも、落膽したことには、明智の指紋の外何物も發見することが出來なかつた。明智はあの際で慌てゝゐたせゐか、そこには澤山の指紋が印せられてゐたが、凡て彼自身のものだつた。恐らく、明智の指紋が犯人のそれを消して了つたのだらうと、刑事は判斷した。

讀者諸君、諸君はこの話を讀んで、ポウの「モルグ街の殺人」やドイルの「スベックルド・バンド」を聯想されはしないだらうか。つまり、この殺人事件の犯人が、人間でなくて、オラングータンだとか、印度の毒蛇だとかいふ様な種類のものだと想像されはしないだらうか。私も實はそれを考へたのだ。併し、東京のD坂あたりにそんなものが居るとも思はれぬし、第一障子のすき間から、男の姿を見たといふ證人がある。のみならず、猿類などだつたら、足跡の殘らぬ筈はなく、又人目にもついた譯だ。そして、死人の頸にあつた指の痕も、正に人間のそれだ。蛇がま

きついたとて、あんな痕は殘らぬ。

それは兎も角、明智と私とは、その夜歸途につきながら、非常に興奮して色々と話合つたものだ。一例を上げると、まあこんな風なことを。

「君は、ポーの「ル・モルグ」やルルーの「黄色の部屋」などの材料になつた、あのパリの Rose Delacourt 事件を知つてゐるでせう。百年以上たつた今日でも、まだ謎として殘つてゐるあの不思議な殺人事件を。僕はあれを思出したのですよ。今夜の事件も犯人の立去つた跡のない所は、どうやら、あれに似てゐるではありませんか。」と明智。

「さうですね。實に不思議ですね。よく、日本の建築では、外國の探偵小説にある樣な深刻な犯罪は起らないなんて云ひますが、僕は決してさうぢやないと思ひますよ、現にかうした事件もあるのですからね。僕は何だか、出來るか出來ないか分りませんけど、一つこの事件を探偵して見度い樣な氣がしますよ。」

さうして、私達はある横町で分れを告げた。其時私は、横町を曲つて、彼一流の肩を振る歩き方で、さつさと歸つて行く明智の後姿が、その派手な棒縞の浴衣によつて暗の中にくつきりと浮出して見えたのを覺えてゐる。

（下）推理

さて、殺人事件から十日程たつたある日、私は明智小五郎の宿を訪ねた。その十日の間に、明智と私とが、この事件に關して、何を爲し、何を考へそして何を結論したか。讀者は、それらを、この日、彼と私との間に取交された會話によつて、十分察することが出來るであらう。

それまで、明智とはカフェで顔を合してゐたばかりで、宿を訪ねるのは、その時が始めてだつたけれど、豫て所を聞いてゐたので、探すのに骨は折れなかつた。私は、それらしい煙草屋の店先に立つて、お上さんに、明智がゐるかどうかを尋ねた。

「エ、、いらつしやいます。一寸御待ち下さい、今お呼びしますから。」

彼女はさういつて、店先から見えてゐる階段の上り口まで行つて、大聲に明智を呼んだ。彼はこの家の二階を間借りしてゐたのだ。すると、

「オー！」

と變な返事をして、明智はミシ〳〵と階段を下りて來たが、私を發見すると、驚いた顔をして

「ヤー、御上りなさい」といつた。私は彼の後に從つて二階へ上つた。ところが、何氣なく、彼

の部屋へ一歩足を踏み込んだ時、私はアッと魂消てしまつた。部屋の様子が餘りにも異様だつたからだ。明智が變り者だといふことは知らぬではなかつたけれど、これは又變り過ぎてゐた。

何のことはない、四疊半の座敷が書物で埋まつてゐるのだ。眞中の所に少し疊が見える丈けで、あとは本の山だ、四方の壁や襖に沿つて、下の方は殆ど部屋一杯に、上の方程幅が狹くなつて、天井の近くまで、四方から書物の土手が迫つてゐるのだ。外の道具などは何もない。一體彼はこの部屋でどうして寢るのだらうと疑はれる程だ。第一、主客二人の坐る所もない、うつかり身動きし樣ものなら、忽ち本の土手くづれで、壓しつぶされて了ふかも知れない。

「どうも狹くつていけませんが、それに、座蒲團が無いのです。濟みませんが、柔か相な本の上へでも坐つて下さい。」

私は書物の山に分け入つて、やつと坐る場所を見つけたが、あまりのことに、暫く、ぼんやりとその邊を見廻してゐた。

私は、かくも風變りな部屋の主である明智小五郎の爲人について、こゝで一應説明して置かねばなるまい。併し、彼とは昨今のつき合ひだから、彼がどういふ經歷の男で、何によつて衣食し、何を目的にこの人生を送つてゐるのか、といふ樣なことは一切分らぬけれど、彼が、これと

いふ職業を持たぬ一種の遊民であることは確かだ。强ひて云へば、書生であらうか、だが、書生にしても餘程風變りな書生だ。いつか彼が「僕は人間を研究してゐるんですよ」といつたことがあるが、其時私には、それが何を意味するのかよく分らなかつた。唯、分つてゐるのは、彼が犯罪や探偵について、並々ならぬ興味と、恐るべく豐富な知識を持つてゐることだ。

年は私と同じ位で、二十五歳を越してはゐまい。どちらかと云へば痩せた方で、先にも云つた通り、歩く時に變に肩を振る癖がある、といつても、決して豪傑流のそれではなく、妙な男を引合ひに出すが、あの片腕の不自由な、講釋師の神田伯龍を思出させる樣な歩き方なのだ。伯龍といへば、明智は顏つきから聲音まで、彼にそつくりだ、――伯龍を見たことのない讀者は、諸君の知つてゐる内で、所謂好男子ではないが、どことなく愛嬌のある、そして最も天才的な顏を想像するがよい――たゞ明智の方は、髪の毛がもつと長く延びてゐて、モジャ〳〵ともつれ合つてゐる。そして、彼は人と話してゐる間にもよく、指で、そのモジャ〳〵になつてゐる髪の毛を、更らにモジャ〳〵にする爲の樣に引掻廻すのが癖だ。服裝などは一向構はぬ方らしく、いつも木綿の着物に、よれ〳〵の兵兒帶を締めてゐる。

「よく訪ねて呉れましたね。その後暫く逢ひませんが、例のD坂の事件はどうです。警察の方で

は一向犯人の見込がつかぬ様ではありませんか。」

明智は例の、頭を掻廻しながら、ジロ〳〵私の顔を眺めて云ふ。

「實は僕、今日はそのことで少し話があつて來たんですがね。」そこで私はどういふ風に切り出したものかと迷ひながら始めた。「僕はあれから、種々考へて見たんですよ。考へたばかりでなく、探偵の樣に實地の取調べもやつたのですよ。そして、實は一つの結論に達したのです。それを君に御報告しようと思つて……。」

「ホウ。そいつはすてきですね。詳しく聞き度いものですね。」

私は、さういふ彼の目付に、何が分るものかといふ樣な、輕蔑と安心の色が浮んでゐるのを見逃さなかつた。そして、それが私の逡巡してゐる心を激勵した。私は勢込んで話し始めた。

「僕の友達に一人の新聞記者がありましてね。それが、例の事件の係りの小林刑事といふのと懇意なのです。で、僕はその新聞記者を通じて、警察の模樣を詳しく知ることが出來ましたが、警察ではどうも捜査方針が立たないらしいのです。無論種々活動はしてゐるのですが、これといふ見込がつかぬのです。あの、例の電燈のスキッチですね。あれも駄目なんです、あすこには、君の指紋丈けつきやついてゐないことが分つたのです。警察の考へでは、多分君の指紋が犯人の指

紋を隱して了つたのだらうといふのですよ。さういふ譯で、警察が困つてゐることを知つたものですから、僕は一層熱心に調べて見る氣になりました。そこで、僕が到達した結論といふのは、どんなものだと思ひます。そして、それを警察へ訴へる前に、君の所へ話しに來たのは何の爲だと思ひます。

「それは兎も角、僕はあの事件のあつた日から、あることを氣づいてゐたのですよ。君は覺えてゐるでせう。二人の學生が犯人らしい男の着物の色について、まるで違つた申立てをしたことをね。一人は黑だといひ、一人は白だといふのです。いくら人間の目が不確だといつて、正反對の黑と白とを間違へるのは變ぢやないですか。警察ではあれをどんな風に解釋したか知りませんが、僕は二人の陳述は兩方とも間違でないと思ふのですよ。君、分りますか。あれはね、犯人が白と黑とのだんだらの着物を着てゐたんですよ。……つまり、太い黑の棒縞の浴衣かなんかですね。よく宿屋の貸浴衣にある樣な……では、何故それが一人には眞白に見え、もう一人には眞黑に見えたかといひますと、彼等は障子の格子のすき間から見たのですから、丁度その瞬間、一人の目が格子のすき間と着物の白地の部分と一致して見える位置にあり、もう一人の目が黑地の部分と一致して見える位置にあつたのです。これは珍しい偶然かも知れませんが、決して不可能で

はないのです。そして、この場合かう考へるより外に方法がないのです。

「さて、犯人の着物の縞柄は分りましたが、これでは單に捜査範圍が縮小されたといふ迄で、まだ確定的のものではありません。第二の論據は、あの電燈のスキッチの指紋なんです。僕は、さつき話した新聞記者の友達の傳手で小林刑事に頼んでその指紋を――君の指紋ですよ――よく檢べさせて貰つたのです。その結果愈々僕の考へてることが間違つてゐないのを確めました。ところで君、硯があつたら、一寸貸して戴れませんか。」

そこで、私は一つの實驗をやつて見せた。先づ硯を借りると、私は右手の拇指に薄く墨をつけて、懐から取出した半紙の上に一つの指紋を捺した。それから、その指紋の乾くのを待つて、もう一度同じ指に墨をつけ前の指紋の上から、今度は指の方向を換へて念入りに押へつけた。すると、そこには互に交錯した二重の指紋がハッキリ現れた。

「警察では、君の指紋が犯人の指紋の上に重つて、それを消して了つたのだと解釋してゐるのですが、併しそれは今の實驗でも分る通り不可能なんですよ。いくら強く押した所で、指紋といふものが線で出來てゐる以上、線と線との間に、前の指紋の跡が殘る筈です。もし前後の指紋が全く同じもので、捺し方も寸分違はなかつたとすれば、指紋の各線が一致しますから、或は後の指

紋が先の指紋を隠して了ふことも出來るでせうが、さういふことは先づあり得ませんし、假令さうだとしても、この場合結論は變らないのです。

「併し、あの電燈を消したのが犯人だとすれば、スキッチにその指紋が殘つてゐなければなりません。僕は若しや警察では、君の指紋の線と線との間に殘つてゐる先の指紋を見落してゐるのではないかと思つて、自分で檢べて見たのですが、少しもそんな痕跡がないのです。つまり、あのスキッチには、後にも先にも、君の指紋が捺されてゐるだけなのです。――どうして古本屋の人達の指紋が殘つてゐなかつたのか、それはよく分りませんが、多分、あの部屋の電燈はつけつぱなしで、一度も消したことがないのでせう。」

「君、以上の事柄は一體何を語つてゐるでせう。僕はかういふ風に考へるのですよ。一人の荒い棒縞の着物を着た男が、――その男は多分死んだ女の幼馴染で、戀を裏切られたとでもいふ理由からでせう――古本屋の主人が夜店を出すことを知つてゐて、その留守の間に女を襲つたのです。聲を立てたり抵抗したりした形跡がないのですから、女はその男をよく知つてゐたに相違ありません。で、まんまと目的を果した男は、死骸の發見を後らす爲に、電燈を消して立去つたのです。併し、この男の一期の不覺は、障子の格子のあいてゐるのを知らなかつたこと、そして、

驚いてそれを閉めた時に、偶然店先にゐた二人の學生に姿を見られたことでした。それから、男は一旦外へ出ましたが、ふと氣がついたのは、電燈を消した時、スキッチに指紋が殘つたに相違ないといふことです。これはどうしても消して了はねばなりません。然しもう一度同じ方法で部屋の中へ忍込むのは危險です。そこで、男は一つの妙案を思ひつきました。それは、自から殺人事件の發見者になることです。さうすれば、少しの不自然もなく、自分の手で電燈をつけて、以前の指紋に對する疑をなくして了ふことが出來るばかりでなく、まさか、發見者が犯人だらうとは誰しも考へませんからね、二重の利益があるのです。かうして、彼は何食はぬ顏で警察のやり方を見てゐたのです。大膽にも證言さへしました。しかも、その結果は彼の思ふ壺だつたのですよ。五日たつても十日たつても、誰も彼を捕へに來るものはなかつたのですからね。」

この私の話を、明智小五郎はどんな表情で聽いてゐたか。私は、恐らく話の中途で、何か變つた表情をするか、言葉を挾むだらうと豫期してゐた。ところが、驚いたことには、彼の顏には何の表情も現れぬのだ。一體平素から心を色に現さぬ質ではあつたけれど、餘り平氣すぎる。彼は始終例の髮の毛をモジャ〳〵やりながら、默り込んでゐるのだ。私は、どこまでづう〳〵しい男だらうと思ひながら最後の點に話を進めた。

「君はきつと、それぢや、その犯人はどこから入つて、どこから逃げたかと反問するでせう。確に、その點が明かにならなければ、他の凡てのことが分つても、何の甲斐もないのですからね。だが、遺憾ながら、それも僕が探り出したのですよ。あの晩の捜査の結果では、全然犯人の出て行つた形跡がない樣に見えました。併し、殺人があつた以上、犯人が出入しなかつた筈はないのですから、刑事の捜索にどこか拔目があつたと考へる外はありません。警察でもそれには隨分苦心した樣子ですが、不幸にして、彼等は、僕といふ一介の書生に及ばなかつたのですよ。

ナアニ、實は下らぬ事なんですがね、僕はかう思つたのですよ。これ程警察が取調べてゐるのだから、近所の人達に疑ふべき點は先づあるまい。もしさうだとすれば、犯人は、何か、人の目にふれても、それが犯人だとは氣づかれぬ樣な方法で通つたのぢやないだらうか。そして、それを目擊した人はあつても、まるで問題にしなかつたのではなからうか、とね。つまり、人間の注意力の盲點――我我の目に盲點があると同じ樣に、注意力にもそれがありますよ――を利用して、手品使が見物の目の前で、大きな品物を譯もなく隱す樣に、自分自身を隱したのかも知れませんからね。そこで、僕が目をつけたのはあの古本屋の一軒置いて隣の旭屋といふ蕎麥屋です。」

古本屋の右へ時計屋、菓子屋と並び、左へ足袋屋、蕎麥屋と並んでゐるのだ。

「僕はあすこへ行つて、事件の當夜八時頃に、便所を借りて行つた男はないかと聞いて見たのです。あの旭屋は君も知つてるでせうが、店から土間續きで、裏木戸まで行ける樣になつてゐて、その裏木戸のすぐ側に便所があるのですから、便所を借りる樣に見せかけて、裏口から出て行つて、又入つて來るのは譯はありませんからね。——例のアイスクリーム屋は路地を出た角に店を出してゐたのですから、見つかる筈はありません——それに、相手が蕎麥屋ですから、便所を借りるといふことが極めて自然なのです。聞けば、あの晩はお上さんは不在で、主人丈が店の間にゐたのだ相ですから、おあつらへ向きなんです。君、なんとすてきな思付ではありませんか。

そして、案の定、丁度その時分に便所を借りた客があつたのです。たゞ。殘念なことには、旭屋の主人は、その男の顏形とか着物の縞柄などを少しも覺えてゐないのですがね。——僕は早速この事を例の友達を通じて、小林刑事に知らせてやりましたよ。刑事は自分でも蕎麥屋を調べた樣でしたが、それ以上何も分らなかつたのです——。」

私は少し言葉を切つて、明智に發言の餘裕を與へた。彼の立場は、この際何とか一言云はないでゐられぬ筈だ。ところが、彼は相變らず頭を搔廻しながら、すまし込んでゐるのだ。私はこれまで、敬意を表する意味で間接法を用ゐてゐたのを直接法に改めねばならなかつた。

「君、明智君、僕のいふ意味が分るでせう。動かぬ證據が君を指さしてゐるのですよ。白狀すると、僕はまだ心の底では、どうしても君を疑ふ氣になれないのですが、かういふ風に證據が揃つてゐては、どうも仕方がありません。……僕は、もしやあの長屋の內に、太い棒縞の浴衣を持つてゐる人がないかと思つて、隨分骨折つて調べて見ましたが、一人もありません。それも尤もですよ。同じ棒縞の浴衣でも、あの格子に一致する樣な派手なのを着る人は珍らしいのですからね。それに、指紋のトリックにしても、便所を借りるといふトリックにしても、實に巧妙で、君の樣な犯罪學者ででもなければ、一寸眞似の出來ない藝當ですよ。それから、第一をかしいのは、君はあの死人の細君と幼馴染だといつてゐながら、あの晩、細君の身許調べなんかあつた時に、側で聞いてゐて、少しもそれを申立てなかつたではありませんか。

さて、さうなると、唯一の賴みは Alibi の有無です。ところが、それも駄目なのです。君は覺えてますか、あの晩歸り途で、白梅軒へ來るまで君が何處にゐたかといふことを、僕が聞きましたね。君は、一時間程、その邊を散步してゐたと答へたでせう。假令、君の散步姿を見た人があつたとしても、散步の途中で、蕎麥屋の便所を借りるなどはあり勝ちのことですからね。明智君、僕のいふことが間違つてゐますか。どうです。若し出來るなら君の辯明を聞かうぢやありません

か。」

讀者諸君、私がかういつて詰めよつた時、奇人明智小五郎は何をしたと思ひます。面目なさに俯伏して了つたとでも思ふのですか。どうして〳〵、彼はまるで意表外のやり方で、私の荒膽をひしいたのです。といふのは、彼はいきなりゲラ〳〵と笑ひ出したのです。

「いや失敬々々、決して笑ふつもりではなかつたのですけど、君が餘り眞面目だもんだから」明智は辯解する樣に云つた「君の考へは却々面白いですよ。僕は君の樣な友達を見つけたことを嬉しく思ひますよ。併し、惜しいことには、君の推理は餘りに外面的で、そして物質的ですよ。例へばですね。僕とあの女との關係についても、君は、僕達がどんな風な幼馴染だつたかといふことを、內面的に心理的に調べて見ましたか。僕が以前あの女と戀愛關係があつたかどうか。又現に彼女を恨んでゐるかどうか。君にはそれ位のことが推察出來なかつたのですか。あの晩、なぜ彼女を知つてゐることを云はなかつたか、その譯は簡單ですよ。僕は何も參考になる樣な事柄を知らなかつたのです。僕は、まだ小學校へも入らぬ時分に彼女と分れた切りなのですからね。尤も、最近偶然そのことが分つて、二三度話し合つたことはありますけれど。」

「では、例へば指紋のことはどういふ風に考へたらいゝのですか？」

「君は、僕があれから何もしないでゐたと思ふのですか。僕もこれで却々やつたのですよ。D坂は毎日の樣にうろついてゐましたよ。殊に古本屋へはよく行きました。そして、主人をつかまへて色々探つたのです。——細君を知つてゐたことはその時打明けたのですが、それが却つて便宜になりましたよ——君が新聞記者を通じて警察の模樣を知つた樣に、僕はあの古本屋の主人から、それを聞出してゐたんです。今の指紋のことも、ぢき分りましたから、僕も妙だと思つて檢べて見たのですが、ハハ……、笑ひ話ですよ。電球の線が切れてゐたのです。誰も消しやしなかつたのですよ。僕がスキッチをひねつた爲に燈がついたと思つたのは間違で、あの時、慌てゝ電燈を動かしたので、一度切れたタングステンが、つながつたのですよ。スキッチに僕の指紋丈しかなかつたのは、當りまへなのです。あの晩、君は障子のすき間から電燈のついてるのを見たと云ひましたね。とすれば、電球の切れたのは、その後ですよ。古い電球は、どうもしないでも、獨りでに切れることがありますからね。それから、犯人の着物の色のことですが、これは僕が說明するよりも……」

彼はさういつて、彼の身邊の書物の山を、あちらこちら發掘してゐたが、やがて、一册の古ぼけた洋書を掘りだして來た。

「君、これを讀んだことがありますか、ミュンスターベルヒの「心理學と犯罪」といふ本ですが、この「錯覺」といふ章の冒頭を十行許り讀んで御覽なさい。」

私は、彼の自信ありげな議論を聞いてゐる内に、段々私自身の失敗を意識し始めてゐた。で、云はれるまゝにその書物を受取つて、讀んで見た。そこには大體次の樣なことが書いてあつた。

嘗つて一つの自動車犯罪事件があつた。法廷に於て、眞實を申立てる旨宣誓した證人の一人は、問題の道路は全然乾燥してほこり立つてゐたと主張し、今一人の證人は、雨降り擧句で、道路はぬかるんでゐたと誓言した。一人は、問題の自動車は徐行してゐたといひ、他の一人は、あの樣に早く走つてゐる自動車を見たことがないと述べた。又、前者は、その村道には二三人しか居なかつたといひ、後者は、男や女や子供の通行人が澤山あつたと陳述した。この兩人の證人は、共に尊敬すべき紳士で、事實を曲辯したとて、何の利益がある筈もない人々だつた。

私がそれを讀み終るのを待つて明智は更らに本の頁を繰りながら云つた。

「これは實際あつたことですが、今度は、この「證人の記憶」といふ章があるでせう。その中程の所に、豫め計畫して實驗した話があるのですよ。丁度着物の色のことが出てますから、面倒でせうが、まあ一寸讀んで御覽なさい。」

それは左の樣な記事であつた。

（前略）一例を上げるならば、一昨年（この書物の出版は一九一一年）ゲッティンゲンに於て、法律家、心理學者及物理學者よりなる、ある學術上の集會が催されたことがある。隨つて、そこに集つたのは、皆、綿密な觀察に熟練した人達ばかりであつた。その町には、恰もカーニバルの御祭騷ぎが演じられてゐたが、突然、この學究的な會合の最中に、戸が開かれてけばけばしい衣裳をつけた一人の道化が、狂氣の樣に飛び込んで來た。見ると、その後から一人の黑人が手にピストルを持つて追驅けて來るのだ。ホールの眞中で、彼等はかたみがはりに、恐ろしい言葉をどなり合つたが、やがて道化の方がパッタリ床の上に倒れると、黑人はその上に躍りかゝつた。そして、ポンとピストルの音がした。と、忽ち彼等は二人共、かき消す樣に室を出て行つて了つた。全體の出來事が二十秒とはかゝらなかつた。人々は無論非常に驚かされた。座長の外には、誰一人、それらの言葉や動作が、豫め豫習されてゐたこと、その光景が寫眞

に撮られたことなどを悟つたものはなかつた。で、座長が、これはいづれ法廷に持出される問題だからといふので、會員各自に正確な記錄を書くことを賴んだのは、極く自然に見えた。（中略、この間に、彼等の記錄が如何に間違に充ちてゐたかを、バーセンテージを示して記してある）黑人が頭に何も冠つてゐなかつたことを云ひ當てたのは、四十人の內でたつた四人切りで、外の人達は、山高帽子を冠つてゐたと書いたものもあれば、シルクハットだつたと書くものもあるといふ有樣だつた。着物についても、ある者は赤だといひ、あるものは茶色だといひ、あるものは縞だといひ、あるものはコーヒ色だといひ、其他種々樣々の色合が彼の爲に發明せられた。ところが、黑人は實際は、白ズボンに黑の上衣を着て、大きな赤のネクタイを結んでゐたのだ。（後略）

「ミュンスターベルヒが賢くも說破した通り、」と明智は始めた。「人間の觀察や人間の記憶なんて、實にたよりないものですよ。この例にある樣な學者達でさへ、服の色の見分がつかなかつたのです。私が、あの晩の學生達は着物の色を見違へたと考へるのが無理でせうか。彼等は何者かを見たかも知れません。併しその者は棒縞の着物なんか着てゐなかつた筈です。無論僕ではなか

つたのです。格子のすき間から、棒縞の浴衣を思付いた君の着眼は、却々面白いにはです が、あまりお誂向きすぎるぢやありませんか。少くとも、そんな偶然の符合を信ずるよりは、君は、僕の潔白を信じて呉れる譯には行かぬでせうか。さて最後に、蕎麥屋の便所を借りた男のことですがね。この點は僕も君と同じ考だつたのです。どうも、あの旭屋の外に犯人の通路はないと思つたのですよ。で僕もあすこへ行つて調べて見ましたが、その結果は、殘念ながら、君とは正反對の結論に達したのです。實際は便所を借りた男なんてなかつたのですよ。」

讀者も已に氣づかれたであらうが、明智はかうして、證人の申立を否定し、犯人の指紋を否定し、犯人の通路をさへ否定して、自分の無罪を證據立てようとしてゐるが、併しそれは同時に、犯罪そのものを否定することになりはしないか。私は彼が何を考へてゐるのか少しも分らなかつた。

「で、君は犯人の見當がついてゐるのですか。」

「ついてますよ。」彼は頭をモジャ〳〵やりながら答へた。「僕のやり方は、君とは少し違ふのです。物質的な證據なんてものは、解釋の仕方でどうでもなるものですよ。一番いゝ探偵法は、心理的に人の心の奧底を見拔くことです。だが、これは探偵自身の能力の問題ですがね。兎も角、

僕は今度はさういふ方面に重きを置いてやつて見ましたよ。

最初僕の注意を惹いたのは、古本屋の細君の身體中に生傷のあつたことです。それから間もなく、僕は蕎麥屋の細君の身體にも同じ樣な生傷があるといふことを聞込みました。これは君も知つてゐるでせう。併し、彼女等の夫は、そんな亂暴者でもなさ相です。古本屋にしても、蕎麥屋にしても、おとなし相な、物分りのいゝ男なんですからね。僕は何となく、そこにある祕密が伏在してゐるのではないかと疑はないではゐられなかつたのです。で、僕は先づ古本屋の主人を捉へて、彼の口からその祕密を探り出さうとしました。僕が死んだ細君の知合だといふので、彼もいくらか氣を許してゐましたから、それは比較的樂に行きました。そして、ある變な事實を聞出すことが出來たのです。ところで、今度は蕎麥屋の主人ですが、彼はあゝ見えても却々しつかりした男ですから、探り出すのに可成骨が折れましたよ。でも、僕のある方法によつて、うまく成功したのです。

君は、心理學上の聯想診斷法が、犯罪捜査の方面にも利用され始めたのを知つてゐるでせう。澤山の簡單な刺戟語を與へて、それに對する嫌疑者の觀念聯合の遲速を計る、あの方法です。併し、あれは必ずしも、心理學者の云ふ樣に、犬だとか家だとか川だとか、簡單な刺戟語には限ら

ないし、そして又、常にクロノスコープの助けを借りる必要もないと、僕は思ひますよ。聯想診斷の骨を悟つたものにとつては、その樣な形式は大して必要ではないのです。それが證據に、昔の名判官とか名探偵とかいはれる人は心理學が今日の樣に發達しない以前から、唯彼等は天稟によつて、知らず識らずの間に、この心理學的方法を實行してゐたではありませんか。大岡越前守なども確かにその一人ですよ。小說で云へば、ポオの「ル・モルグ」の始めに、デュパンが友達の身體の動き方一つによつて、その心に思つてゐることを云ひ當てる所がありますね。ドイルもそれを眞似て、「レジデント、ペーシエント」の中で、ホームズに同じ樣な推理をやらせてますが、これらは皆、ある意味の聯想診斷ですからね。心理學者の種々の機械的方法は、唯かうした天稟の洞察力を持たぬ凡人の爲に作られたものに過ぎませんよ。話が傍路に入りましたが、僕はさういふ意味で、蕎麥屋の主人に對して、一種の聯想診斷をやつたのです。僕は彼に色々の話をしかけました。それも極くつまらない世間話をね。そして、彼の心理的反應を研究したのです。併しこれは、非常にデリケートな心持の問題で、それに可成複雜してますから、詳しいことはいづれゆつくり話すとして、兎も角その結果、僕は一つの確信に到達しました。つまり犯人を見つけたのです。

併し、物質的な證據といふものが一つもないのです。だから、警察に訴へる譯にも行きません。よし訴へても、恐らく取上げて呉れないでせう。それに、僕が犯人を知りながら、手を束ねて見てゐるもう一つの理由は、この犯罪には少しも惡意がなかつたといふ點です。變な云ひ方ですが、この殺人事件は、犯人と被害者と同意の上で行はれたのです。いや、ひよつとしたら被害者自身の希望によつて行はれたのかも知れません。」

私は色々想像をめぐらして見たけれど、どうにも彼の考へてゐることが分り兼ねた。私は自分の失敗を恥ぢることを忘れて、彼のこの奇怪な推理に耳を傾けた。

「で、僕の考を云ひますとね。殺人者は旭屋の主人なのです。彼は罪跡をくらます爲にあんな便所を借りた男のことを云つたのですよ。いや、併しそれは何も彼の創案でも何でもない。我々が惡いのです。君にしろ僕にしろ、さういふ男がなかつたかと、こちらから問を構へて、彼を教唆した樣なものですからね。それに、彼は僕達を刑事かなんかと思違へてゐたのです。では、彼は何故に殺人罪を犯したか。……僕はこの事件によつて、うはべは極めて何氣なさ相な、この人生の裏面に、どんなに意外な、陰慘な祕密が隱されてゐるかといふことを、まざ〳〵と見せつけられた樣な氣がします。それは、實に、あの惡夢の世界でしか見出すことの出來ない樣な種類の

ものだつたのです。

「旭屋の主人といふのは、サード卿の流れをくんだ、ひどい慘虐色情者で、何といふ運命のいたづらでせう。一軒置いて隣に、女のマゾッホを發見したのです。古本屋の細君は彼に劣らぬ被虐色情者だつたのです。そして、彼等は、さういふ病者に特有の巧みさを以て、誰にも見つけられずに、姦通してゐたのです。……君、僕の合意の殺人だといつた意味が分るでせう。……彼等は、最近までは、各々、正當の夫や妻によつて、その病的な慾望を、からうじて充してゐました。古本屋の妻君にも、旭屋の妻君にも、同じ樣な生傷のあつたのは其證據です。併し、彼等がそれに滿足しなかつたのは云ふまでもありません。ですから目と鼻の近所に、お互の探し求めてゐる人間を發見した時、彼等の間に非常に敏速な了解の成立したことは想像に難くないではありませんか。ところがその結果は、運命のいたづらが過ぎたのです。彼等の、パッシヴとアクティヴとの力の合成によつて、狂態が漸次倍加されて行きました。そして、遂にあの夜、この、彼等とても決して願はなかつた事件を惹起して了つた譯なのです……」

私は、明智のこの異樣な結論を聞いて、思はず身震ひした。これはまあ、何といふ事件だ！

そこへ、下の煙草屋のお上さんが、夕刊を持つて來た。明智はこれを受取つて、社會面を見て

ゐたが、やがて、そつと溜息をついて云つた。

「ア、、たうとう耐へ切れなくなつたと見えて、自首しましたよ。妙な偶然ですね。丁度その事を話してゐる時に、こんな報道に接するとは。」

私は彼の指さす所を見た。そこには、小さい見出しで、十行許り、蕎麥屋の主人の自首した旨が記されてあつた。

映畫の恐怖（感想）

私は活動寫眞を見てゐると恐しくなります。あれは阿片喫煙者の夢です。一吋のフイルムから、劇場一杯の巨人が生れ出して、それが、泣き、笑ひ、怒り、そして戀をします。スキフトの描いた巨人國の幻が、まざ〳〵と私達の眼前に展開するのです。

スクリーンに充滿した、私のそれに比べては、千倍もある大きな顏が、私の方を見てニヤリと笑ひます。あれが若し、自分自身の顏であつたなら！　映畫俳優といふものは、よくも發狂しないでゐられたものです。あなたは、自分の顏を凹面鏡に寫して見たことがありますか。赤子の樣に滑かなあなたの顏が、凹面鏡の面では、まるで望遠鏡でのぞいた月世界の表面の樣に、でこぼこに、物凄く代つてゐるでせう。鱗の樣な皮膚、洞穴の樣な毛穴、凹面鏡は怖いと思ひます。映畫俳優といふものは、絶えずこの凹面鏡を覗いてゐなければなりません。本當に發狂しないのが不思議です。

活動寫眞の技師は、暗い部屋の中で、たつた一人で、映畫の試寫をする場合があるに相違ありません。そこには音樂もなく、說明もなく、見物もゐないのです。カタ〳〵といふ映寫機の

把手の軋りと、自分自身の鼻息の外には何の音もないのです。彼はスクリーンの巨人達とさし向ひです。大寫しの顏が、ため息をつけば、それが聞えるかも知れません。哄笑すれば、雷の樣な笑聲が響くかも知れません。私達が、見物席の一番前列に坐つて、スクリーンと自分の眼との距離が、一間とは隔たぬ所から、映畫を見てゐますと、これに似た恐怖を感じることがあります。それは多く、暫く辯士の說明が切れて、音樂も伴奏をやめてゐる時です。私達は時として、巨人達の息づかひを聞き分ることが出來ます。

映寫中に、機械の故障で、突然フイルムの廻轉が止ることがあります。今迄スクリーンの上に生きてゐた巨人達が、ハッと化石します。瞬間に死滅します。生きた人間が突如人形に變つて了ふのです。私は活動寫眞を見物してゐて、それに逢ふと、いきなり席から立つて逃げ出したい樣なショックを感じます。生物が突然死物に變るといふのは、可成恐しいことです。

甚だ現實的な事を云ふ樣ですが、この恐怖には、もう一つの理由があります。それはフイルムが非常に燃え易い物質で出來てゐる點です。さうして廻轉が止つてゐる間に、レンズの焦點から火を發して、フイルム全體が燃え上り、劇場の大火を釀した例は屢々聞く所です。私は、スクリーンの上で、巨人達が化石すると、すぐにこの劇場の大火を聯想します。そして妙な戰慄を覺

えるのです。

「あなたには、こんな經驗はないでせうか。」

私は、いつか、場末の汚い活動小屋で、古い映畫を見てゐたことがあります。そのフイルムはもう何十回となく機械にかゝつて、どの場面も、どの場面も、まるで大雨でも降つてゐる樣に傷いてゐました。多分時間をつなぐ爲だつたのでせう。それを、眼が痛くなる程、おそく廻してゐるのです。畫面の巨人達は、まるで毒瓦斯に醉はされでもした樣に、ノロ〳〵動いてゐました。ふと、その動きが少しづゝ、少しづゝのろくなつて行く樣な氣がしたかと思ふと、何かにぶつゝかつた樣に、いきなり廻轉が止つて了ひました。顏丈け大寫しになつた女が、今笑ひ出さうとするその刹那に化石して了つたのです。

それを見ると、私の心臟は、ある豫感の爲に、烈しく波打ち始めました。早く、早く、電氣を消さなければ、ソラ、今にあいつが燃え出すぞ、と思ふ間に、女の顏の唇の所にポツリと、黑い點が浮き出しました。そして、見る〳〵、丁度夕立雲の樣に、それが擴がつて行くのです。一尺程も燃え擴つた時分に、始めて赤い焰が映り始めました。巨大な女の唇が、血の樣に燃えるのです。彼女が笑ふ代りに、焰が唇を開いて、ソラ、彼女は今、不思議な嘲笑を始めたで

はありませんか。唇を嘗め盡した焰は、鼻から眼へと益々〳〵燃え擴つて行きます。元のフイルムでは、ほんの一分か二分の燒け焦に過ぎないのでせうけれど、それがスクリーンには、直徑一丈もある、大きな焰の環になつて映るのです。劇場全體が猛火に包まれた樣にさへ感じられるのです。

スクリーンの上で、映畫の燃え出すのを見る程、物凄いものはありません。それは、たゞ焰の恐怖のみではないのです。色彩のない、光と影の映畫の表面に、ポツリと赤いものが現れ、それが人の姿を蝕んで行く、一種異樣の凄味です。

あなたは又、高速度撮影の映畫に、一種の凄味を感じませんか。

我々とは全く時間の違ふ世界、現實では絕對に見ることの出來ぬ不思議です。あすこでは、空氣が水銀の樣に重く見えます。人間や動物は、その重い空氣をかき分けて、やつとのことで蠢いてゐます。えたいの知れぬ凄さです。

私はある時、こんな寫眞を見たこともあります。

スクリーンの上半分には、どす黑い水がよどんでゐます。下半分には、えたいの知れぬ海草が、まつ黑にもつれ合つてゐます。丁度無數の蛇がお互に身を擦り合せて、鎌首をもたげてゞも

ゐる樣に。海底の寫眞なのです。それが、いつまでも〳〵何の變化もなく映つてゐます。見物達が退屈し切つて了ふ程も。と、海草の間から、フハリと黑いものが浮き上つて來ます。やつぱり海草の一種らしく見えるものです。何であらうと思つてゐますと、その黑いフハ〳〵したものゝ下から、ボツカリと白いものが現れて、それが、矢の樣に前方に突進して來ます。ハツと思つて見直すと、もうそこには、畫面一杯に女の顏が映つてゐるのです。藻の樣にかみの毛を振り亂した、まつぱだかの女の顏が。それから、彼女は色々に身をもがいて、溺死者の舞踏を始めます。水中の人間を、同じ水の中から見る物凄さは、海水浴などでよく經驗します。そして、それは高速度撮影の映畫から受ける、不思議な感じと似た味ひを持つてゐます。

これも場末の活動小屋で發見した、一つの恐怖です。小屋の入口で、お客に一つづゝ、紙の枠に、右には赤、左には青のセルロイドを張りつけた、簡單な眼鏡を渡します。何の故とも分らずに、私はそれを受取つて小屋の中へ這入ります。見ると正面の舞臺には「飛び出し寫眞」といふ文字を書いた、大きな立看板が立てゝあります。なる程、實體鏡の理窟で、映畫に奧行をつける仕掛けだなと、獨合點をして、それでも、その飛び出し寫眞の番を待ち兼ねます。

やがて、愈々それが映り始めます。たゞ見ると、赤と青とのゴツチャになつた。何とも形容の

出來ない、(それ故一寸凄くも感じられる)畫面ですが、木戸で渡された色眼鏡を通して見ますと、それがちやんと整つた奧行きのある形になるのです。こゝまでは至極あたり前のことで、何の變てつもありません。が、さて映畫の進むにつれて、實に不可思議な現象が起り始めるのです

寫眞は凡て簡單なもので、畫面に人間とか動物とかゞ現れて、それがズーツと見物の方へ近づいて來るとか、何か手に持つた品物を前方へつき出すとか、ほんの一寸した動作を、幾場面を撮したものに過ぎません。例へば一人の男が現れて、非常に長い木の棒を見物の方へそろ〳〵と突き出します。ある程度までは、その棒は畫面の中で延びてゐます。假令奧行がついても畫面の中で奧行がついてゐるに過ぎません、(こゝまでは普通の實體鏡と同じことです)ところが、ある程度を越すと、棒の先端が畫面を離れて、少しづゝ〳〵見物席の方へはみ出して來ます。そして、前の方の見物達の頭の上を通り越して、空中を進みます。まるでお伽噺の魔法の杖の樣に、どこまでも〳〵延びて來ます。私は餘りの恐しさに、思はず眼鏡を脫します。すると、そこには、やつぱりゴチヤ〳〵した赤と青との畫面が、無意味に動いてゐるばかりです。

又眼鏡をかけますと、棒の先端はもう眼の前二三寸の所まで迫つてゐます。それでもまだ少しづゝ少しづゝ延びてゐるのです。そして、二寸、一寸、五分と迫つて來て、ハツと思ふ間に、そ

の棒の先が、グサッと私の目につきさゝります。

同じ様にして、恐しいけものが、私に向つて突進して來たり、スクリーンから吹き出すホースの水が私の眼鏡をぬらしたり、もつと恐しいのは、一つの髑髏か、まつくらな空中を漂つて來て、私の額にぶつかつたりします。無論それらは皆一種の錯覺に過ないのですけれど、色眼鏡を通して見た、妙に陰鬱な世界で、こんな不思議に接しますと、丁度、醒めようともがきながら、どうしても醒めることの出來ない、恐しい惡夢でも見てゐる樣で、その映畫が終つた時、私の脇の下には、冷い汗が一杯にじんでゐた程も、變な恐怖を感じたものです。

これはよくあることですが、映畫のあと先が傷つくのを防ぐ爲に、不用なネガチブのフイルムが繼ぎ合せてある、それがどうかした拍子に、スクリーンへ現れることがあります。例へば一つの映畫劇が、おきまりのハッピイ、エンドで終るとします。見物達は多少とも興奮狀態に居ります。そして、いよ〳〵これでおしまひだ。さて拍手を送らうとしてゐる彼等の前に、ふと不思議なものが映ります。それは、劇の筋とは全然關係のない、而もネガチブの（光と影とが正反對になつてゐる）景色や人物などです。

一番恐しいのは、それが人物の大寫しである場合です。そこには白い着物を着た白髮頭の、大

佛の樣な姿が蠢いてゐます。無論顏はまつ黑です。そして、目と唇と鼻の穴丈け、白くうつろになつてゐるのが、その人物を、まるで人間とは違つたものに見せます。あれに出くはすと、私は、突然映畫の廻轉が止つた時と同樣の、或はそれ以上の恐怖を感じます。活動寫眞といふものは、何と不思議な生き物を創造することでせう。

映畫の恐怖。活動寫眞の發明者は、計らずも、現代に一つの新しい戰慄を、作り出したと云へないでせうか。

一人二役

人間、退屈すると、何を始めるか知れたものではないね。

僕の知人にTといふ男があつた。型の如く無職の遊民だ。大して金がある譯ではないが、まづ食ふには困らない。ピアノと、蓄音器と、ダンスと、芝居と、活動寫眞と、そして遊里の巷、その邊をグル／＼廻つて暮してゐる樣な男だつた。

ところで、不幸なことに、この男、細君があつた。さうした種類の人間に、宿の妻といふ奴は、いや笑ひごとぢやない。正に不幸といッつべきだよ。いや、まつたく。

別に嫌つてゐたといふ程ではないが、といつて、無論女房丈けで滿足してゐるTではない。あちらこちら、箸まめにあさり歩く。いふまでもなく、女房は燒くね。それが又、Tには一寸捨て難い、おつな樂みでもあつたのだ。一體Tの女房といふのが、なか／＼どうして、Tなんかに、勿體ない樣な美人でね。その女房に滿足しない程のTだから、その邊にざらにある賣女などに、これはといふ相手の見つからう筈もないのだが、そこがそれ、退屈だ。精力の過剩に困つてゐるのでもなければ、戀を求める譯でもない。たゞ退屈だ。次々と違つた女に接して行けば、そこに

いくらか變つた味がある。又、どうした拍子で、非常な掘出し物がないでもあるまい。Tの遊びは、大體そんな樣な意味合のものだつた。

さて、そのTがね、變なことを始めた話だよ。それが實に奇想天外なんだ。遊戯もこゝまで來ると、一寸凄くなるね。

誰しも感じることだらうが、自分の女房がね、自分以外の男に、つまり間男にだね、接しる時の樣子をすき見したら、さぞ變な味がするだらう、……いや、實際にやられては耐らないが、たゞ、ふつとそんな好奇心の起ることがある。Tのあの奇行の動機も、恐らく大部分はさうした好奇心だつたに相違ない。T自身では、彼の放蕩三昧に對する細君の嫉妬を封ずる手段だと稱してゐたがね。

で、彼は何をしたかといふと、ある夜のこと、頭から足の先まで、すつかり外で調へた新しい服裝で、鼻の下へはチョッピリ附髭までして、つまり手輕な變裝をしたんだね。そして、自分のでない、出鱈目のイニシアルを彫らせた銀のシガレット、ケースを袂へしのばせて、何氣ない風で自宅へ歸つたものだ。

細君は、Tがいつもの通り、どつかで夜更かしをして歸宅したのだと信じ切つてゐる。いや、

それは當然のことだが、つまりTの變裝に少しも氣がつかなかつた。夜更けに寢惚け眼で見たのだからそれも無理ではない。Tの方でも十分用心をして、新しい着物の縞柄なども、以前からあるのとまぎらはしい樣なものを選んでゐたし、附髭は床に這入るまで、掌や、ハンカチなどで隱す樣にした。で、結局、Tのこの奇妙な計畫はまんまと首尾よく成功したんだ。

床の中でね、彼等は電燈を消して寢る習慣だつたから、眞暗な床の中でだね、Tはやつと髭を押へてゐた手を離した。で、つまり、當然だね、その異樣な感觸が、細君を驚かせた。

「アラ、……」

細君が、可愛らしい悲鳴を上げたのは、こりや決して無理はない。同時にTとしては、こゝが最も難しい所だ。彼は細君が髭の存在を認めたことが分ると、早速向きを轉へて、二度と髭に觸らせない樣に、蒲團を被つて、グウ〳〵空鼾をかき出したものだ。

こゝで、細君が怪しんで、あくまで穿鑿立てをしようものなら、Tの計畫はすつかりオヂヤンだ。空鼾をかきながら、彼はもうビク〳〵ものだつたといふね。ところが、細君、案外暢氣なもので、何か感違ひしたとでも思つたのか、そのまゝぢつとしてゐる。暫く待つてゐると、スウスウと優しい鼾が聞えて來た。もうしめたものだ。

そこで、Tは、細君が十分寢込んだ折を見すまして、ソッと床の中から這ひ出した、手早く着物を着ると、例の銀のシガレット、ケース丈を枕許へ殘して、音のしない樣に、家から拔け出し、それも、まともな入口からでなくて、庭の塀をのり越したのだ。もうその時分車なんかありやしない、テクテクと、十何町を、行きつけの待合へ歩いた。醉狂な男もあつたものだ。

さて、翌朝だ。細君、目を醒して見ると、一緒に寢てゐた筈の夫が、も拔けのからだから、少なからず驚いた。家中探して見たが、どこにもゐない。寢坊の夫が、この早朝外出する筈もなし、妙だなと思ひながら、ふつと氣がついたのは、枕許のシガレット、ケースだ。一向見慣れぬ品だ。夫が始終持つてゐるのとは違ふ。で、手にとつて調べて見ると、まるで心當りのないイニシアルが刻んである。中の卷煙草まで、夫の常用のものとは違つてゐる。夫がどこかで取違へて來たのかとも考へて見たが、さて、何とやら腑に落ちぬ。と、思出すのは、昨夜の髭の一件だ。さあ、細君どれ程か心配したことであらう。

そこへ、Tが、昨夜家を明けたのがきまりが悪いといふ樣な、殊勝氣な顏つきで歸つて來た。無論服裝は、前日家を出た時のとほり換へてゐるし、つけ髭もとつてある。いつもなら、細君、だゞは置かないのだけれど。今日はそれどころではない。彼女の方に、途方もない心配があるの

だ。妙な工合で、だんまりで、Tは茶の間へ通る、細君は青い顔をしてあとからついて來る、と、いつた鹽梅だ。

暫くすると、細君がおづ〳〵しながら聞くんだね。

「この煙草入れ、どつかで取りかへていらつしつたのぢやなくつて。」

いふまでもなく、例の銀製のシガレット、ケース。

「いゝえ、それ、どうかしたのかい。」

と、Tがとぼけて見せると、

「だつて」と少しあまへて、「ゆうべ、あなたがもつてお歸りなすつたのぢやありませんか。」

「へええ、」と更にとぼけて「だが、僕のはちやんと、これ、こゝに持つてゐるよ。それに、第一僕がゆうべ歸つたつて？」こゝで少し調子を高める。この一言で、細君をハツとさせる譯だね。

などと、落語家みたいに、會話入りでやつちや、際限がないから、それはよすとして、よろしく一問一答を繰りかへしたのち、とゞ、細君が昨夜の一伍一什を、打開けて了ふところまでこぎつけた。

そこで、Tはさも不思議相な顔をして見せ、そんな馬鹿なことのあらう道理がない。自分はゆ

うべ××家で、何の誰と一晩呑みあかしたのだから、何ならあの男に聞いて見るがいゝ、と、これがつまり、探偵小説の言葉で云へばアリバイだね。それは前以つてちやんと賴み込んであるのだ。エ、お前がそのアリバイを勤めたのかつて、イヤ、違ふ違ふ。

「お前夢でも見たのではないか。いゝえ、決して夢ではありません。夢でなかつた證據には、ちやんと煙草入れが殘つてゐるのだ。はてな、昔の書物に、離魂病といふものが見えてゐるが、まさか今の時節、そんなこともあるまい。その離魂病といふのはね、一人の人間の姿が、二つに分れて、同時に、違つた場所で、違つた行をするといふのだ。などゝ、一寸怪談めいて見たり、お前そんなことを云つて、實はソツとどこかの男を引入れてゐるのではないか、」などゝ脅しつけて見たり、それが又、Tには、何とも愉快でたまらないといふのだから、因果さ。

が、兎も角も、その日は有耶無耶で濟んで了つた。無論、一度位では駄目だ。Tの計畫では、幾度も、幾度もそれを續けてやつて見る積りだつた。

二回目は、少々心配した。細君、前に懲りてゐるから、うつかり變裝して行かうものなら騷ぎ出しやしないかといふのだ。で、今度は、家に這入る時には、變裝もせず、髭もつけずに行つて、さて、電燈も消して、床につき、細君がもう寢入るといふ頃を見計らつて、夢現の間に、ほ

んの瞬間、例の髭の感觸を與へ、そして、寢入つて了つたのを見すまして、やつぱり前通りのイニシャルを縫ひつけたハンカチを殘して、家を拔け出す手筈にしたが、なんと、それが再びうまく成功したではないか。翌朝の模樣は、前の時と似たり寄つたりで。たゞ、細君の顏が、一層青ざめ、Tの狂言嫉妬が、更に手强くなつた位の相違だつた。

さうして、三度となり、四度と重なつて行くに從つて、Tのお芝居は益々上達し、今では、細君にとつては、煙草入れや、ハンカチのイニシアルの男が、はつきりした、實在の人物になつて來たが、それと同時に、こゝに妙なことが起つて來たのだ。これまでの所はね、まあ謂はゞ笑話にすぎないけれど、これから先は、話が少し固くなつて來るのだよ。人間の心が、如何にたよりない、そして又不思議なものだか、といつた風の、一寸考へさせられるものを含んでゐるのだよ。

第一に起つた變化は、細君の側にあつた。その貞女を以て聞えた細君がね、女なんて實際分らないものだ、變裝した方のTに對して、明かにTの外の男だと信じつゝ、ある好意を見せ始めたのだ。この邊の心理は可成不思議なものだが、併し、昔の物の本などによく例がある、つまり、それは、何人とも分らぬ男との、夜毎の逢瀨は、恐らく、彼女にとつて、一つのお伽噺であつた

のであらうか。

一方に於て、彼女は、變裝のTがその都度殘して行く、證據品を、夫であるTに隱す樣になつた。そればかりか、他の一方に於ては、變裝のTに對して、夫とは別人であると意識した上の、罪の囁きを囁く樣になつた。「あなたが、どこの何といふお方だか、その見知らぬあなたが、どうして妾の所へ通つて下さるのか、妾には少しも分らない。でも、あなたの御深切が、今ではもう、妾には忘れ難いものになつて了つた。あなたのお出でなさらぬ夜が淋しく感ぜられさへする。この次は、いつ來て下さるのでせうか。」さうした細君の變心（といふには少し變だけど）を知つた時の、Tの心持は、實際何とも形容の出來ぬ變てこなものであつたに相違ない。

一方から見れば、これは、Tの最初の目論見が完全に果された譯であつた。かうして、細君の方に大きな弱味が出來て了へば、彼の放蕩は五分々々だ。決して細君に對して引け目を感じる必要はない。だから、彼の計畫から云へば、この邊で、この妙な遊戲を打切つて、變裝した彼自身を、永久にこの世から葬つて了へばよいのだ、さうすれば、元々實在しない人物のことだから、あとに煩ひの殘る筈はない、とTは考へてゐた。

ところが、今彼の心は、最初は全然豫想しなかつた、極度の混亂に陷つて了つたのだ。假令、假

想の人物にもせよ、細君が彼以外の男を愛し始めたといふ、この恐しい事實が彼を撃つた。始めは狂言であつた嫉妬が、眞劍なものに變つて來た。若しかういふ心持が嫉妬といへるならばだ。そこには相手がないのだ。一體全體、誰に向つて嫉妬をするのだ。細君は決してT以外の男に肌身を許した譯ではない。つまり、彼の戀敵は、とりも直さず彼自身に外ならぬのだ。

さあ、さうなると、以前はさ程でもなかつた細君が、この世に二人とないものに思はれて來る。その細君を、他人に（正しく云へば自分自身にだが）奪はれたかと思ふと、くやしさは一通りではない。細君がぼんやり物思ひに耽つてゐる。ア、、彼女は今、もう一人の男のことを思つてゐるのだな。さう考へると、もうたまらない。Tは實に取返しのつかぬことをやつて了つたのだ。彼は自分自身の仕掛けた罠にかゝつたのだ。

慌てゝ、假裝を中止して見たところで、今更ら何の甲斐もなかつた。夫婦の間には、いつの間にか妙な隔意が生じてゐた。細君はともすれば憂鬱になつた。恐らく彼女は姿を見せぬ男のことを、諦め兼ねてゐるのに相違ない。Tはそれを見るのがつらかつた。と同時に、それ程心にかけてゐる男といふのが、實はもう一人の自分であることを考へると、それは滿更嬉しくないこともなかつた。

一層、一伍一什を打開けて了はうか、だがさうすることは、何となくいやだつた。一つは餘りに馬鹿々々しい自分の行爲が恥しくもあつたし、それに、もう一つは、實はこれが最大の原因なのだが、生れて始めて經驗した、忍ぶ戀路の身も世もあらぬ樂しさを、Tはどうにも忘れ兼ねた。彼は、そこに、本當の戀を見出した樣に思つた。本來のTに對しては、世間並の女房に過ぎなかつた彼女が、その心の奥底にあの樣な情熱を隱してゐようとは。Tは全く意外であつた。そして逢瀬が重なれば重なる程、そのことは明かになつて行つた。今更ら、あれは狂言だつたなどとどうして云へるものか。

併し、この二重生活をいつまでも續けることは、煩はしいばかりではなく、細君に眞相を悟られる虞があつた。これまでは、いつも夜更けを選んで、暗い電燈の下や、多くはその電燈さへもない闇の中で逢つてゐたのだし、一方明白なアリバイが用意してあつたから、まづ安全であつたけれど、そんな異常な會合がさう〳〵續けられるものではない。とすると、そこには三つの方法しかない。第一は假想の人物を葬つて了ふこと、第二はトリックの一伍一什を打明けること、そして第三は、實に變なことだけれど、彼が、妻君に愛想をつかされた、いはゞこの世に用のないTといふ人物を辭職して、その代りに一方の假想の男になり切つて了ふこと。

今も云ふ通り、假想の人物としての、細君との、謂はゞ初戀を發見した彼は、どうにも、第二の道を選ぶ氣にはなれなかつた。そこで非常に難しいことだとは思つたが、遂に、第三の方法を採ることに決心した。つまり、Aといふ男が、ABの二役を勤め、それから今度は、始めのAをすてゝ、まるで違つたBの方にばけて了ふのだ。嘗てこの世に存在しなかつた一人の人間を拵へるのだ。

さう決心すると、Tはまづ旅行と稱して、一ヶ月ばかり家をあけ、その間に、出來る丈け顏形を變へようとした。頭髮の刈り方を違へ、口髭を生し、眼鏡をかけ、醫者の手術を受けて、一重眼瞼を二重にし、その上顏面の一部に、小さい傷さへ拵へた、そして、髭が伸びた頃に、態々九州の方まで出掛けて行つて、そこから、細君の所へ一通の絶緣狀を送つたものだ。

細君は途方に暮れた。相談を持込む親戚とてもないのだ。幸ひ、夫が多額の金を殘して行つたので、その方の不自由は感じなかつたが、さうかといつて、ぢつとして居る譯には行かぬ。こんな時、あの方が來て下すつたら。きつと彼女はさう思つたに相違ない。丁度そこへ、假想の男になり濟したTが、ヒョッコリとやつて來た、最初は、細君、その男をTだといつて聞かなんだが、Tの友人が訪ねて來ても、まるで話が合はなかつたり、(それはTが豫め頼んだこの芝居の脇役

なのだ) 假裝の男の身許が明かになつたりしたので (これもTが拵へて置いたのだ) つい、彼等が全く別人であることを信ずる樣になつた。これが、何かさうする理由でもあつたのなら、いくら何でもだまされはしないのだらうが、T自身の心持を外にしては、まるで理由といふものがないのだ。まさか、こんな馬鹿々々しいお芝居が演じられようとは、誰にしたつて、思ひも寄らないからね。Tの細君は案外易々とだまされたのも、これは無理もないよ。

間もなく、彼等は住所を換へて同棲することになつた。無論名前もTではなくなつた。お蔭で、僕等Tの友人は、かたくお出入りをさし止められたものだ。聞くところによると、其後Tはふつつり遊ばなくなつた相だ。そして、この喜劇にも等しいお芝居が、案外好結果を納めて、彼等の仲は、引續き非常に睦じく行つてゐるといふ噂だ。世の中には變つた男もあるものだね。

ところで、お話はまだ少しあるんだよ。それは、つい最近のことだが、ある所で、僕はふと、昔Tであつた男に出逢つた。見ると彼は例の細君を同伴してゐる。で僕は、言葉をかけては惡いのだらうと思ひ、何氣ない風を裝つて、彼等の前を通り過ぎようとすると、意外にもTの方から僕の名前を呼びかけた。そして、

「いや、その御配慮には及びませんよ。」

昔から見ると、ずつと快活な聲でTが云つた。僕達はそこにあつた椅子に腰かけて、久しぶりで語り合つた。

「ナニネ、もうすつかり手品の種が分つてゐるのですよ。これをうまく擔いだ積りでゐた私の方が、實はすつかり、あべこべに擔がれてゐたのです。これは、あの私のいたづらを、最初から氣附いてゐたんだ相です。でも、別段害のある事柄ではなし、それで家庭が圓滿に行く樣にでもなれば、これに越したことはないと思ひ、つい、だまされた樣な體を裝つてゐたのだといひます。道理でうまく運び過ぎると思ひましたよ。ハハ……、女なんて魔物ですね。」

それを聞くと、傍に立つてゐた、相變らず美しいTの細君は、恥しさうにほゝゑんだ。

僕も、最初から、そんなことではあるまいかと、いくらか疑を抱いてゐたので、さして驚きはしなかつたが。Tには、それが自慢であるらしく、幾度も同じことを繰返して、自分で驚いて見せてゐた。この調子なら、先生やつぱり仲睦じくやつてゐるな。そこで、僕は竊に、御兩人を祝福したことであつた。

屋根裏の散歩者

一

多分それは一種の精神病でゝもあつたのでせう。郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやつて見ても、一向この世が面白くないのでした。

學校を出てから――その學校とても一年に何日と勘定の出來る程しか出席しなかつたのですが――彼に出來相な職業は、片端からやつて見たのです、けれど、これこそ一生を捧げるに足ると思ふ樣なものには、まだ一つも出つくはさないのです。恐らく、彼を滿足させる職業などは、この世に存在しないのかも知れません。長くて一年、短いのは一月位で、彼は職業から職業へと轉々しました。そして、たうとう見切りをつけたのか、今では、もう次の職業を探すでもなく、文字通り何もしないで、面白くもない其日々々を送つてゐるのでした。

遊びの方もその通りでした。かるた、球突き、テニス、水泳、山登り、碁將棋、さては各種の賭博に至るまで、迚もこゝには書き切れない程の、遊戯といふ遊戯は一つ殘らず、娯樂百科全書

といふ樣な本まで買込んで、探し廻つては試みたのですが、職業同樣、これはといふものもなく、彼はいつも失望させられてゐました。だが、この世には「女」と「酒」といふ、どんな人間だつて一生涯飽きることのない、すばらしい快樂があるではないか。諸君はきつとさう仰有るでせうね。ところが、我が郷田三郎は、不思議とその二つのものに對しても興味を感じないのでした。酒は體質に適しないのか、一滴も飲めませんし、女の方は、無論その慾望がない譯ではなく、相當遊びなどもやつてゐるのですが、さうかと云つて、これあるが爲に生き甲斐を感じるといふ程には、どうしても思へないのです。

「こんな面白くない世の中に生き長らへてゐるよりは、いつそ死んで了つた方がましだ。」

ともすれば、彼はそんなことを考へました。併し、そんな彼にも生命を惜しむ本能丈けは備つてゐたと見えて、二十五歳の今日が日まで、「死ぬ〳〵」といひながら、つい死切れずに生き長へてゐるのでした。

親許から月々いくらかの仕送りを受けることの出來る彼は、職業を離れても別に生活には困らないのです。一つはさういふ安心が、彼をこんな氣まゝ者にして了つたのかも知れません。そこで彼は、その仕送り金によつて、せめていくらでも面白く暮すことに腐心しました。例へば、職

業や遊戯と同じ様に、頻繁に宿所を換へて歩くことなどもその一つでした。彼は、少し大げさに云へば、東京中の下宿屋を、一軒残らず知つてゐました。一月か半月もゐると、すぐに次の別の下宿屋へと住みかへるのです。無論その間には、放浪者の様に旅をして歩いたこともあります。或は又、仙人の様に山奥へ引込んで見たこともあります。でも、都會にすみなれた彼には、辿も淋しい田舎に長くゐることは出來ません。一寸旅に出たかと思ふと、いつのまにか、都會の燈火に、雑沓に、引寄せられる様に、彼は東京へ歸つてくるのでした。そして、その度毎に下宿を換へたことは云ふまでもありません。

さて、彼が今度移つたうちは、東榮館といふ、新築したばかりの、まだ壁に濕り氣のある様な、まつさらの下宿屋でしたが、こゝで、彼は一つのすばらしい樂みを發見しました。そして、この一篇の物語は、その彼の新發見に關聯したある殺人事件を主題とするのです。が、お話をその方に進める前に、主人公の郷田三郎が、素人探偵の明智小五郎――この名前は多分御承知のこと思ひます。――と知り合ひになり、今まで一向氣附かないでゐた「犯罪」といふ事柄に、新しい興味を覺える様になつたいきさつについて、少しばかりお話して置かねばなりません。

二人が知り合ひになつたきつかけは、あるカフェで彼等が偶然一緒になり、その時同伴してゐた三郎の友達が、明智を知つてゐて紹介したことからでしたが、三郎はその時、明智の聰明らしい容貌や、話しつぶりや、身のこなしなどに、すつかり引きつけられて了つて、それから屢々彼を訪ねる様になり、又時には彼の方からも三郎の下宿へ遊びに來る様な仲になつたのです。明智の方では、ひよつとしたら、三郎の病的な性格に――一種の研究材料として――興味を見出してゐたのかも知れませんが、三郎は明智から様々の魅力に富んだ犯罪談を聞くことを、他意なく喜んでゐるのでした。

同僚を殺害して、その死體を實驗室の竈で灰にして了はうとしたウエブスター博士の話、數ケ國の言葉に通曉し、言語學上の大發見までしたユージン・エアラムの殺人罪、所謂保險魔で、同時に優れた文學批評家であつたウェーンライトの話、小兒の臀肉を煎じて養父の癩病を治さうとした野口男三郎の話、さては、數多の女を女房にしては殺して行つた所謂ブルーベヤドのランドルーだとか、アームストロングなどの、殘虐な犯罪談、それらが退屈し切つてゐた郷田三郎をどんなに喜ばせたことでせう。明智の雄辯な話しぶりを聞いてゐますと、それらの犯罪物語は、まるで、けば〳〵しい極彩色の繪卷物の様に、底知れぬ魅力を以て、三郎の眼前にまざ〳〵と浮んで來るのでした。

明智を知つてから二三ヶ月といふものは、三郎は殆どこの世の味氣なさを忘れたかと見えました。彼は様々の犯罪に關する書物を買込んで、毎日々々それに讀み耽るのでした。それらの書物の中には、ポオだとかホフマンだとか、或はガボリオだとかボアゴベだとか、その外色々な探偵小説なども混つてゐました。「ア、世の中には、まだこんな面白いことがあつたのか。」彼は書物の最終の頁をとぢる度毎に、ホッとため息をつきながら、さう思ふのでした。そして、出來ることなら、自分も、それらの犯罪物語の主人公の様な、目ざましい、けば〳〵しい遊戯（？）をやつと見たいものだと、大それたことまで考へる様になりました。

併し、いかな三郎も、流石に法律上の罪人になること丈けは、どう考へてもいやでした。彼はまだ、兩親や、兄弟や、親戚知己などの悲嘆や侮辱を無視してまで、樂しみに耽る勇氣はないのです。それらの書物によりますと、どの様な巧妙な犯罪でも、必ずどつかに破綻があつて、それが犯罪發覺のいと口になり、一生涯警察の眼を逃れてゐるといふことは、極く僅かの例外を除いては、全く不可能の様に見えます。彼にはたゞそれが恐しいのでした。彼の不幸は、世の中の凡ての事柄に興味を感じないで、事もあらうに「犯罪」に丈け、いひ知れぬ魅力を覺えることでした。そして、一層の不幸は、發覺を恐れる爲にその「犯罪」を行ひ得ないといふことでした。

そこで彼は、一通り手に入る丈けの書物を讀んで了ふと、今度は、「犯罪」の眞似事を始めました。眞似事ですから無論處罰を恐れる必要はないのです。それは例へばこんなことを。

彼はもうとつくに飽き果てゝゐた、あの淺草に再び興味を覺える様になりました。おもちや箱をぶちまけて、その上から色々のあくどい繪具をたらしかけた様な淺草の遊園地は、犯罪嗜好者に取つては、こよなき舞臺でした。彼はそこへ出かけては、活動小屋と活動小屋の間の、人一人漸く通れる位の細い暗い路地や、共同便所の背後などにある、淺草にもこんな餘裕があるのかと思はれる様な、妙にガランとした空地を、好んでさ迷ひました。そして、犯罪者が同類と通信する爲でゝもあるかの様に、白墨でその邊の壁に矢の印を書いて廻つたり、金持らしい通行人を見かけると、自分が掏摸にでもなつた氣で、どこまでも〳〵そのあとを尾行して見たり、妙な暗號文を書いた紙切れを――それにはいつも恐ろしい殺人に關する事柄などを認めてあるのです――公園のベンチの板の間へ挾んで置いて、樹蔭に隱れて、誰かゞそれを發見するのを待構へてゐたり、其外これに類した様々の遊戯を行つては、獨り樂むのでした。

彼は又、屢々變裝をして、町から町をさ迷ひ歩きました。勞働者になつて見たり、乞食になつて見たり、學生になつて見たり、色々の變裝をした中でも、女裝をすることが、最も彼の病癖を

喜ばせました。その爲には、彼は着物や時計などを賣り飛ばして金を作り、高價な鬘だとか、女の古着だとかを買ひ集め、長い時間かゝつて好みの女姿になりすますと、頭の上からすつぽりと外套を被つて、夜更けに下宿屋の入口を出るのです。そして、適當な場所で外套を脱ぐと、或時は淋しい公園をぶらついて見たり、或時はもうはねる時分の活動小屋へ這入つて、態と男子席の方へまぎれ込んで見たり、はては、きはどい惡戯までやつて見るのです。そして、服裝による一種の錯覺から、さも自分が姐妃のお百だとか蟒蛇お由だとかいふ毒婦にでもなつた氣持で、色々な男達を自由自在に飜弄する有樣を想像しては、喜んでゐるのです。

併し、これらの「犯罪」の眞似事は、ある程度まで彼の慾望を滿足させては呉れましたけれど、そして、時には一寸面白い事件を惹起しなぞして、その當座は十分慰めにもなつたのですけれど、眞似事はどこまでも眞似事で、危險がないだけに――「犯罪」の魅力は見方によつてはその危險にこそあるのですから――興味も乏しく、さういつまでも彼を有頂天にさせる力はありませんでした。もの〻三ヶ月もたちますと、いつとなく彼はこの樂みから遠ざかる樣になりました。そして、あんなにもひきつけられてゐた明智との交際も、段々とうと〳〵しくなつて行きました。

以上のお話によつて、郷田三郎と明智小五郎との交渉、又は三郎の犯罪嗜好癖などについて、讀者に呑み込んで頂いた上、さて、本題に戻つて、東榮館といふ新築の下宿屋で、郷田三郎がどんな樂しみを發見したかといふ點に、お話を進めることに致しませう。

二

三郎が東榮館の建築が出來上るのを待ち兼ねて、いの一番にそこへ引移つたのは、彼が明智と交際を結んだ時分から、一年以上もたつてゐました。隨つてあの「犯罪」の眞似事にも、もう一向興味がなくなり、といつて、外にそれに代る樣な事柄もなく、彼は毎日々々の退屈な長々しい時間を、過し兼ねてゐました。東榮館に移つた當座は、それでも、新しい友達が出來たりして、いくらか氣がまぎれてゐましたけれど、人間といふものは何と退屈極る生物なのでせう。どこへ行つて見ても、同じ樣な思想を同じ樣な表情で、同じ樣な言葉で、繰り返し〳〵、發表し合つてゐるに過ぎないのです。折角下宿屋を替へて、新しい人達に接して見ても、一週間たつかたゝないう内に、彼は又しても底知れぬ倦怠の中に沈み込んで了ふのでした。

さうして、東榮館に移つて十日ばかりたつたある日のことです。退屈の餘り、彼はふと妙な事

を考へつきました。

彼の部屋には、――それは二階にあつたのですが――安つぽい床の間の傍に、一間の押入がついてゐて、その内部は、鴨居と敷居との丁度中程に、押入れ一杯の巖乗な棚があつて、上下二段に分れてゐるのです。彼はその下段の方に數個の行李を納め、上段には蒲團をのせることにしてゐましたが、一々そこから蒲團を取出して、部屋の眞中へ敷く代りに、始終棚の上に寢臺の様に蒲團を重ねて置いて、眠くなつたらそこへ上つて寢ることにしたらどうだらう。彼はそんなことを考へたのです。これが今迄の下宿屋であつたら、假令押入れの中に同じ様な棚があつても、壁がひどく汚れてゐたり、天井に蜘蛛の巣が張つてゐたりして、一寸その中へ寢る氣にはなれなかつたのでせうが、こゝの押入れは、新築早々のことですから、非常に綺麗で、天井も眞白なれば、黄色く塗つた滑かな壁にも、しみ一つ出來てはゐませんし、そして全體の感じが、棚の作り方にもよるのでせうが、何となく船の中の寢臺に似てゐて、妙に、一度そこへ寢て見たい様な誘惑を感じさへするのです。

そこで、彼は早速その晩から押入れの中へ寢ることを始めました。この下宿は、部屋毎に内部から戸締りが出來る様になつてゐて、女中などが無斷で這入つて來る様なこともなく、彼は安心

してこの奇行を續けることが出來るのでした。さてそこへ寢て見ますと、豫期以上に感じがいゝのです。四枚の蒲團を積み重ね、その上にフハリと寢轉んで、目の上二尺ばかりの所に迫つてゐる天井を眺める心持は、一寸異様な味ひのあるものです、襖をピッシャリ締め切つて、その隙間から洩れて來る絲の様な電氣の光を見てゐますと、何だかう自分が探偵小説の中の人物にでもなつた様な氣がして、愉快ですし、又それを細目に開けて、そこから、自分自身の部屋を、泥坊が他人の部屋をでも覗く様な氣持で、色々の激情的な場面を想像しながら、眺めるのも、興味がありました。時によると、彼は晝間から押入れに這入り込んで、一間と三尺の長方形の箱の様な中で、大好物の煙草をプカリ〳〵とふかしながら、取りとめもない妄想に耽ることもありました。そんな時には、締切つた襖の隙間から、押入れの中で火事でも始まつたのではないかと思はれる程、夥しい白煙が洩れてゐるのでした。

ところが、この奇行を二三日續けてゐる間に、彼は又しても、妙なことに氣がついたのです。飽きつぽい彼は、三日目あたりになると、もう押入れの寢臺にも興味がなくなつて、所在なさに、そこの壁や、寢ながら手の屆く天井板に、落書などをしてゐましたが、ふと氣がつくと、丁度頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだかフカ〳〵と動く様なのです。どうし

たのだらうと思つて、手で突つぱつて持上げて見ますと、なんなく上の方へ外れることは外れるのですが、妙なことには、その手を離すと、釘づけにした箇所は一つもないのに、まるでバネ仕掛けの様に、元々通りになつて了ひます。どうやら、何者かゞ上から壓へつけてゐる様な手ごたへなのです。

はてな、ひよつとしたら、丁度この天井板の上に、何か生物が、例へば大きな青大將か何かゞゐるのではあるまいかと、三郎は俄に氣味が悪くなつて來ましたが、そのまゝ逃げ出すのも殘念なものですから、なほも手で押し試みて見ますと、ヅッシリと重い手ごたへを感じるばかりでなく、天井板を動かす度に、その上で何だかゴロ〳〵と鈍い音がするではありませんか。愈々變です。そこで彼は思切つて、力まかせにその天井板をはね除けて見ますと、すると、その途端、ガラ〳〵といふ音がして、上から何かゞ落ちて來ました。彼は咄嗟の場合ハッと片傍へ飛びのいたからよかつたものゝ、若しさうでなかつたら、その物體に打たれて大怪我をしてゐる所でした。

「ナアンダ、つまらない。」

ところが、その落ちて來た品物を見ますと、何か變つたものであればよいがと、少からず期待してゐた彼は、餘りのことに呆れて了ひました。それは、漬物石を小さくした様な、たゞの石

塊に過ぎないのでした。よく考へて見れば、別に不思議でも何でもありません。電燈工夫が天井裏へもぐる通路にと、天井板を一枚丈け態と外して、そこから鼠などが押入れに這入らぬ様に石塊で重しがしてあつたのです。

それは如何にも飛んだ喜劇でした。でも、その喜劇が奇縁となつて、郷田三郎は、あるすばらしい樂みを發見することになつたのです。

彼は暫くの間、自分の頭の上に開いてゐる、洞穴の入口とでも云つた感じのする、その天井の穴を眺めてゐましたが、ふと、持前の好奇心から、一體天井裏といふものはどんな風になつてゐるのだらうと、恐る〳〵その穴に首を入れて、四方を見廻しました。それは丁度朝の事で、屋根の上にはもう陽が照りつけてゐると見え、方々の隙間から澤山の細い光線が、まるで大小無數の探照燈を照してゞもゐる様に、屋根裏の空洞へさし込んでゐて、そこは存外明るいのです。

先づ目につくのは、縱に、長々と横へられた、太い、曲りくねつた、大蛇の様な棟木です。明るいといつても屋根裏のことで、さう遠くまでは見通しが利かないのと、それに、細長い下宿屋の建物ですから、實際長い棟木でもあつたのですが、それが、向うの方は霞んで見える程、遠く遠く連つてゐる様に思はれます。そして、その棟木と直角に、これは大蛇の肋骨に當る澤山の梁

が、兩側へ、屋根の傾斜に沿つてニヨキ〳〵と突き出てゐます。それ丈けでも隨分雄大な景色ですが、その上、天井を支へる爲に、梁から無數の細い棒が下つてゐて、それが、まるで鐘乳洞の内部を見る樣な感じを起させます。

「これは素敵だ。」

一隅屋根裏を見廻してから、三郎は思はずさう呟くのでした。病的な彼は、世間普通の興味にはひきつけられないで、常人には下らなく見える樣な、かうした事物に、却つて、云ひ知れぬ魅力を覺えるのです。

その日から、彼の「屋根裏の散歩」が始まりました。夜となく晝となく、暇さへあれば、彼は泥棒猫の樣に覗音を盗んで、棟木や梁の上を傳ひ歩くのです。幸なことには、建てたばかりの家ですから屋根裏につき物の蜘蛛の巣もなければ、煤や埃もまだ少しも溜つてゐず、鼠の汚したあとさへありません。それ故着物や手足の汚くなる心配はないのです。彼はシャツ一枚になつて、思ふがまゝに屋根裏を跳梁しました。時候も丁度春のことで、屋根裏だからといつて、さして暑くも寒くもないのです。

三

東榮館の建物は、下宿屋などにはよくある、中央に庭を圍んで、そのまはりに、桝型に、部屋が並んでゐる樣な作り方でしたから、隨つて屋根裏も、ずつとその形に續いてゐて、行止りといふものがありません。彼の部屋の天井裏から出發して、グルッと一廻りしますと、又元の彼の部屋の上まで歸つて來る樣になつてゐます。

下の部屋々々には、さも嚴重に壁で仕切りが出來てゐて、その出入口には締りをする爲の金具まで取りつけてあるのに、一度天井裏に上つて見ますと、これは又何といふ開放的な有樣でせう。誰の部屋の上を歩き廻らうと、自由自在なのです。若し、その氣があれば、三郎の部屋のと同じ樣な、石塊の重しのしてある箇所が所々にあるのですから、そこから他人の部屋へ忍び込んで、竊盜を働くことも出來ます。廊下を通つて、それをするのは、今も云ふ樣に、桝型の建物の各方面に人目があるばかりでなく、いつ何時他の止宿人や女中などが通り合はさないとも限りませんから、非常に危險ですけれど、天井裏の通路からでは、絶對にその危險がありません。

それから又、こゝでは、他人の祕密を隙見することも、勝手次第なのです。新築とは云つても、

下宿屋の安普請のことですから、天井には到る所に隙間があります。——部屋の中に居ては氣が附きませんけれど、暗い屋根裏から見ますと、その隙間が意外に多いのに一驚を喫します——稀には、節穴さへもあるのです。

この、屋根裏といふ屈指の舞臺を發見しますと、郷田三郎の頭には、いつのまにか忘れてゐたあの犯罪嗜好癖が又ムラ〳〵と湧き上つて來るのでした。この舞臺でならば、あの當時試みたそれよりも、もつと〳〵刺戟の強い、「犯罪の眞似事」が出來るに相違ない。さう思ふと、彼はもう嬉しくて耐らないのです。どうしてまあ、こんな手近な所に、こんな面白い興味があるのを、今日まで氣附かないでゐたのでせう。魔物の樣に暗闇の世開を歩き廻つて、二十人に近い、東榮館の二階中の止宿人の祕密を、次から次へと隙見して行く、そのこと丈けでも、三郎はもう十分愉快なのです。そして、久方振りで、生き甲斐を感じさへするのです。

彼は又、この「屋根裏の散歩」を、いやが上にも興味深くする爲に、先づ、身支度からして、さも本物の犯罪人らしく裝ふことを忘れませんでした。ピッタリ身についた、濃い茶色の毛織のシャツ、同じズボン下——ならうことなら、昔活動寫眞で見た、女賊プロテアの樣に、眞黑なシャツを着たかつたのですけれど、生憎そんなものは持合せてゐないので、まあ我慢することにし

て——足袋を穿き手袋をはめ——天井裏は、皆荒削りの木材ばかりで、指紋の殘る心配などは、殆どないのですが——そして、手にはピストル……が欲しくても、それもないので、懷中電燈を持つことにしました。

夜更けなど、晝とは違つて、洩れて來る光線の量が極く僅かなので、一寸先も見分けられぬ闇の中を、少しも物音を立てない樣に注意しながら、その姿で、ソロリ〳〵と、棟木の上を傳つてゐますと、何かから、自分が蛇にでもなつて、太い木の幹を這ひ廻つてゐる樣な氣持がして、我ながら妙に凄くなつて來ます。でも、その凄さが、何の因果か、彼にはゾク〳〵する程嬉しいのです。

かうして、數日、彼は有頂天になつて、「屋根裏の散歩」を續けました。その間には、豫期にたがはず、色々と彼を喜ばせる樣な出來事があつて、それを記す丈けでも、十分一篇の小說が出來上る程ですが、この物語の本題には直接關係のない事柄ですから、殘念ながら、端折つて、ごく簡單に二三の例をお話するに止めませう。

天井からの隙見といふものが、どれ程異樣な興味のあるものだかは、實際やつて見た人でなければ恐らく想像も出來ますまい。假令、その下に別段事件が起つてゐなくても、誰も見てゐるも

のがないと信じて、その本性をさらけ出した人間といふものを觀察すること丈けで、十分面白いのです。よく注意して觀ますと、ある人々は、その側に他人のゐる時と、ひとりきりの時とでは、立居ふるまひは勿論、その顏の相好までが、まるで變るものだといふことを發見して、彼は少なからず驚きました。それに、平常、横から同じ水平線で見るのと違つて、眞上から見下すのであるから、この、目の角度の相違によつて、あたり前の座敷が、隨分異樣な景色に感じられます。人間は頭のてつぺんや兩肩が、本箱、机、箪笥、火鉢などは、その上方の面丈けが、主として目に映ります。そして、壁といふものは、殆ど見えないで、その代りに、凡ての品物のバックには、疊が一杯に擴つてゐるのです。

何事がなくても、かうした興味がある上に、そこには、往々にして、滑稽な、悲慘な、或は物凄い光景が展開されてゐます。平常過激な反資本主義の議論を吐いてゐる會社員が、誰も見てゐない所では、貰つたばかりの昇給の辭令を、折鞄から出したり、しまつたり、幾度も〳〵、飽かず打眺めて喜んでゐる光景、ゾロリとしたお召の着物を不斷着にして、果敢ない豪奢振りを示してゐる、ある相場師が、いざ床につく時には、その、晝間はさも無造作に着こなしてゐた着物を、女の樣に、丁寧に疊んで、床の下へ敷くばかりか、しみでもついたのと見えて、それを丹念

に口で嘗めて——お召などの小さな汚れは、口で嘗めとるのが一番いゝのだといひます——一種のクリーニングをやつてゐる光景、何々大學の野球の選手だといふニキビ面の青年が、運動家にも似合はない臆病さを以て、女中への附文を、食べて了つた夕飯のお膳の上へ、のせて見たり、思ひ返して、引込めて見たり、又のせて見たり、モジ〳〵と同じことを繰返してゐる光景、中には大膽にも淫賣婦（？）を引入れて、茲に書くことを憚る樣な、すさまじい狂態を演じてゐる光景さへも、誰憚らず、見たい丈け見ることが出來るのです。

三郎は又、止宿人と止宿人との、感情の葛藤を研究することに、興味を持ちました。同じ人間が、相手によつて、樣々に態度を換へて行く有樣、今の先まで、笑顏で話し合つてゐた相手を、隣の部屋へ來ては、まるで不倶戴天の仇でゝもある樣に罵つてゐる者もあれば、蝙蝠の樣に、どちらへ行つても、都合のいゝお座なりを云つて、蔭でペロリと舌を出してゐる者もあります。そして、それが女の止宿人——東榮館の二階には一人の女畫學生がゐたのです——になると一層興味があります。「戀の三角關係」どころではありません。五角六角と、複雜した關係が、手に取る樣に見えるばかりか、競爭者達の誰れも知らない、本人の眞意が、局外者の「屋根裏の散歩者」に丈け、ハッキリと分るではありませんか。お伽噺に隱れ蓑といふものがありますが、天井裏の

三郎は、云はゞその隱れ蓑を着てゐるも同然なのです。

若しその上、他人の部屋の天井板をはがして、そこへ忍び込み、色々ないたづらをやることが出來たら、一層面白かつたでせうが、三郎には、その勇氣がありませんでした。そこには、三間に一箇所位の割合で、三郎の部屋のと同樣に、石塊で重しをした抜け道があるのですから、忍び込むのは造作もありませんけれど、いつ部屋の主が歸つて來るか知れませんし、さうでなくとも、窓は皆透明なガラス障子になつてゐますから、外から見つけられる危險もあり、それに、天井板をめくつて押入れの中へ下り、襖をあけて部屋に這入り、又押入れの棚へよぢ上つて、元の屋根裏へ歸る、その間には、どうかして物音を立てないとは限りません。それを廊下や隣室から氣附かれたら、もうおしまひなのです。

さて、ある夜更けのことでした。三郎は、一巡「散歩」を濟ませて、自分の部屋へ歸る爲に、梁から梁を傳つてゐましたが、彼の部屋とは、庭を隔てゝ、丁度向ひ側になつてゐる棟の、一方の隅の天井に、ふと、これまで氣のつかなかつた、幽かな隙間を發見しました。徑二寸ばかりの雲形をして、絲よりも細い光線が洩れてゐるのです。なんだらうと思つて、彼はソッと懷中電燈を點して、檢べて見ますと、それは可成大きな木の節で、半分以上まはりの板から離れてゐるの

ですが、あとの半分で、やつとつながり、危く節穴になるのを免れたものでした。一寸爪の先でこぢさへすれば、何なく離れて了ひ相なのです。そこで、三郎は外の隙間から下を見て、部屋の主が已に寢てゐることを確めた上、音のしない樣に注意しながら、長い間かゝつて、たうとうそれをはがして了ひました。都合のいゝことには、はがした後の節穴が、杯形に、下側が狹くなつてゐますので、その木の節を元々通りつめてさへ置けば、下へ落ちる樣なことはなく、そこにこんな大きな覗き穴があるのを、誰にも氣附かれずに濟むのです。

これはうまい工合だと思ひながら、その節穴から下を覗いて見ますと、外の隙間の樣に、縱には長くても、幅はせい〳〵一分内外の不自由なのと違つて、下側の狹い方でも直徑一寸以上はあるのですから、部屋の全景が、樂々と見渡せます。そこで、三郎は思はず道草を食つて、その部屋を眺めたことですが、それは偶然にも、東榮館の止宿人の内で、三郎の一番蟲の好かぬ、遠藤といふ齒科醫學校卒業生で、目下はどつかの齒醫者の助手を勤めてゐる男の部屋でした。その遠藤が、いやにのつぺりした蟲唾の走る樣な顏を、一層のつぺりさせて、すぐ目の下に寢てゐるのでした。

馬鹿に几帳面な男と見えて、部屋の中は、他のどの止宿人のそれにもまして、キチンと整頓し

てゐます。机の上の文房具の位置、本箱の中の書物の並べ方、蒲團の敷き方、枕許に置き並べた、舶來物でもあるのか、見なれぬ形の目醒し時計、漆器の卷煙草入れ、色硝子の灰皿、何れを見ても、それらの品物の主人公が、世にも綺麗好きな、重箱の隅を楊枝でほぢくる樣な神經家であることを證據立ててゐます。又遠藤自身の寢姿も、實に行儀がいゝのです。たゞ、それらの光景にそぐはぬのは、彼が大きな口を開いて、雷の樣な鼾をかいてゐることでした。

三郎は、何か汚いものでも見る樣に、眉をしかめて、遠藤の寢顏を眺めました。彼の顏は、綺麗といへば綺麗です。成程彼自身で吹聽する通り、女などには好かれる顏かも知れません。併し、何といふ間延びな、長々とした顏の造作でせう。濃い頭髮、顏全體が長い割には、變に狹い富士額、短い眉、細い目、始終笑つてゐる樣な目尻の皺、長い鼻、そして異樣な大ぶりな口。三郎はこの口がどうにも氣に入らないのでした。鼻の下の所から段を爲して、上顎と下顎とが、オンモリと前方へせり出し、その部分一杯に、青白い顏と妙な對照を示して、大きな紫色の脣が開いてゐます。そして、肥厚性鼻炎でゝもあるのか、始終鼻を詰らせ、その大きな口をポカンと開けて呼吸をしてゐるのです。寢てゐて、鼾をかくのも、やつぱり鼻の病氣のせゐなのでせう。

三郎は、いつでもこの遠藤の顏を見さへすれば、何だかかう背中がムズ〳〵して來て、彼ののつぺりした頰つぺたを、いきなり毆りつけてやり度い樣な氣持になるのでした。

四

さうして、遠藤の寢顏を見てゐる內に、三郎はふと妙なことを考へました。それは、その節穴から唾をはけば、丁度遠藤の大きく開いた口の中へ、うまく這入りはしないかといふことでした。なぜなら、彼の口は、まるで誂へでもした樣に、節穴の眞下の所にあつたからです。三郎は物好きにも、股引の下に穿いてゐた、猿股の紐を拔出して、それを節穴の上に垂直に垂らし、片目を紐にくつゝけて、丁度銃の照準でも定める樣に、試して見ますと、不思議な偶然です。紐と、節穴と、遠藤の口とが、全く一點に見えるのです。つまり節穴から唾を吐けば、必ず彼の口へ落ちるに相違ないことが分つたのです。

併し、まさかほんたうに唾を吐きかける譯にも行きませんので、三郎は、節穴を元の通り埋めて置いて、立去らうとしましたが、其時、不意にチラリとある恐しい考へが、彼の頭に閃きました。彼は思はず、屋根裏の暗闇の中で、眞靑になつて、ブル〳〵と震へました。それは實に、何

の恨みもない遠藤を殺害するといふ考へだつたのです。

彼は遠藤に對して何の恨みもないばかりか、まだ知り合ひになつてから、半月もたつてはゐないのでした。それも、偶然二人の引越しが同じ日だつたものですから、それを緣に、二三度部屋を訪ね合つたばかりで別に深い交渉がある譯ではないのです。では、何故その遠藤を、殺さうなどゝ考へたかといひますと、今も云ふ樣に、彼の容貌や言動が、毆りつけたい程蟲が好かぬといふことも、多少は手傳つてゐましたけれど、三郎のこの考の主たる動機は、相手の人物にあるのではなくて、たゞ殺人行爲そのものゝ興味にあつたのです。先からお話して來た通り、三郎の精神狀態は非常に變態的で、犯罪嗜好癖ともいふべき病氣を持つてゐ、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じたのは殺人罪なのですから、かうした考への起るのも決して偶然ではないのです。ただ今までは、假令屢々殺意を生ずることがあつても、罪の發覺を恐れて、一度も實行しようなどと思つたことがないばかりです。

ところが、今遠藤の場合は、全然疑を受けないで、發覺の憂なしに、殺人が行はれ相に思はれます。我身に危險さへなければ、假令相手が見ず知らずの人間であらうと、三郎はそんなことを顧慮するのではありません。寧ろ、その殺人行爲が、殘虐であればある程、彼の異常な慾望

は、一層滿足させられるのでした。それでは、何故遠藤に限つて、殺人罪が發覺しない——少くとも三郎がさう信じてゐたか——といひますと、それには、次の樣な事情があつたのです。

東榮館へ引越して四五日たつた時分でした。三郎は懇意になつたばかりの、ある同宿者と、近所のカフェへ出掛けたことがあります。その時同じカフェに遠藤も來てゐて、三人が一つテーブルへ寄つて酒を——尤も酒の嫌ひな三郎はコーヒでしたけれど——飲んだりして、三人とも大分いゝ心持になつて、連立つて下宿へ歸つたのですが、少しの酒に醉つぱらつた遠藤は、「まあ僕の部屋へ來て下さい。」と無理に二人を、彼の部屋へ引ぱり込みました。遠藤は獨ではしやいで、夜が更けてゐるのも構はず、女中を呼んでお茶を入れさせたりして、カフェから持越しの惚氣話を繰返すのでした。——三郎が彼を嫌ひ出したのは、その晩からです——その時、遠藤は、眞赤に充血した脣をペロ〳〵と嘗め廻しながら、さも得意らしくこんなことを云ふのでした。

「その女とですね、僕は一度情死をしかけたことがあるのですよ。まだ學校にゐた頃ですが、ホラ、僕のは醫學校でせう。藥を手に入れるのは譯ないんです。で、二人が樂に死ねる丈けの莫兒比涅を用意して、聞いて下さい、鹽原へ出かけたもんです。」

さう云ひながら、彼はフラ〳〵と立上つて、押入の所へ行き、ガタ〳〵襖を開けると、中に積

んであつた一つの行李の底から、ごく小さい、小指の先程の、茶色の瓶を探して來て、聽手の方へ差出すのでした。瓶の中には、底の方に、ホンのぽつちり、何かキラ〳〵光つた粉が這入つてゐるのです。

「それですよ。これつぽちつで、十分二人の人間が死ねるのですからね。……併し、あなた方、こんなこと喋づちやいやですよ。外の人に。」

そして、彼の怪氣話は、更らに長々と、止めどもなく續いたことですが、三郎は今、その時の毒藥のことを、計らずも思出したのです。

一天非の節穴から、毒藥を垂らして、人殺しをする！　まあ何といふ奇想天外な、すばらしい犯罪だらう。」

彼は、この妙計に、すつかり有頂天になつて了ひました。よく考へて見れば、その方法は、如何にもドラマテイックな丈け、可能性には乏しいものだといふことが分るのですが、そして又、何もこんな手數のかゝることをしないでも、他にいくらも簡便な殺人法があつた筈ですが、異常な思ひつきに幻惑させられた彼は、何を考へる餘裕もないのでした。そして、彼の頭には、たゞもうこの計畫についての都合のいゝ理窟ばかりが、次から次へと浮んで來るのです。

先づ藥を盗み出す必要がありました。が、それは譯のないことです。遠藤の部屋を訪ねて話し込んでゐれば、その内には、便所へ立つとか何とか、彼が席を外すこともあるでせう。その暇に、見覺えのある行李から、茶色の小瓶を取出しさへすればいゝのです。遠藤は、始終その行李の底を檢べてゐる譯ではないのですから、二日や三日で氣の附くこともありますまい。假令又氣附かれたところで、そんな毒藥を持つてゐることが已に違法なのですから、表沙汰になる筈もなく、それに、上手にやりさへすれば、誰が盗んだのかも分りはしません。

そんなことをしないでも、天井から忍び込む方が樂ではないでせうか。いや〳〵、それは危險です。先にも云ふ樣に、いつ部屋の主が歸つて來るか知れませんし、硝子障子の外から見られる心配もあります。第一、遠藤の部屋の天井には、三郎の所の樣に、石塊で重しをした、あの拔け道がないのです。どうして〳〵、釘づけになつてゐる天井板をはがして忍び入るなんて危險なことが出來るものですか。

さて、かうして手に入れた粉藥を、水に溶かして、鼻の病氣の爲に始終開きつぱなしの、遠藤の大きな口へ滴し込めば、それでいゝのです。たゞ心配なのは、うまく呑み込んで呉れるかどうかといふ點ですが、ナニ、それも大丈夫です。なぜといつて、藥が極く極く少量で、溶き方を濃

くして置けば、ほんの數滴で足りるのですから、熟睡してゐる時なら、氣もつかない位でせう。又氣がついたにしても恐らく吐き出す暇なんかありますまい。それから、莫兒比涅が苦い藥だといふことも、三郎はよく知つてゐましたが、假令苦くとも分量が僅かですし、尙ほ其上に砂糖でも混ぜて置けば、萬々失配する氣遣ひはありません、誰にしても、まさか天井から毒藥が降つて來ようなどとは想像もしないでせうから、遠藤が、咄嗟の場合、そこへ氣のつく筈はないのです。

併し、藥がうまく利くかどうか、遠藤の體質に對して多すぎるか或は少な過ぎるかして、たゞ苦悶する丈けで死に切らないといふ樣なことはあるまいか。これが問題です。成程、そんなことになれば非常に殘念ではありますが、でも、三郎の身に危險を及ぼす心配はないのです。といふのは、節穴は元々通り蓋をして了ひますし、天井裏にも、そこにはまだ埃など溜つてゐないのですから、何の痕跡も殘りません。指紋は手袋で防いであります。假令、天井から毒藥を垂らしたことが分つても、誰の仕業だか知れる筈はありません。殊に彼と遠藤とは、昨今の交際で、恨みを含む樣な間柄でないことは、周知の事實なのですから、彼に嫌疑のかゝる道理がないのです。いや、さうまで考へなくても、熟睡中の遠藤に、藥の落ちて來た方角などが、分るものではありませんの。

これが、三郎の屋根裏で、又部屋へ歸つてから、考へ出した蟲のいゝ理窟でした。讀者は已に、假令以上の諸點がうまく行くとしても、その外に、一つの重大な錯誤のあることを氣附かれたこと、思ひます。が、彼は愈々實行に着手するまで、不思議にも、少しもそこへ氣が附かないのでした。

五

三郎が、都合のよい折を見計らつて、遠藤の部屋を訪問したのは、それから四五日たつた時分でした。無論その間には、彼はこの計畫について、繰返し〳〵考へた上、大丈夫危險がないと見極めをつけることが出來たのです。のみならず、色々と新しい工風を附加へもしました。例へば、毒藥の瓶の始末についての考案もそれです。

若しうまく遠藤を殺害することが出來たならば、彼はその瓶を、節穴から下へ落して置くことに極めました。さうすることによつて、彼は二重の利益が得られます。一方では、若し發見されれば、重大な手掛りになる所のその瓶を、隱匿する世話がなくなること、他方では、死人の側に毒物の容器が落ちてゐれば、誰しも遠藤が自殺したのだと考へるに相違ないこと、そして、その

瓶が遠藤自身の品であるといふことは、いつか三郎と一緒に彼に惚氣話を聞かされた男が、うまく證明して呉れるに違ひないのです。尙ほ都合のよいのは、遠藤は毎晩、キチンと締りをして寢ることでした。入口は勿論、窓にも、中から金具で止めをしてあつて、外部からは絶對に這入れないことでした。

さて其日、三郎は非常な忍耐力を以て、顏を見てさへ蟲唾の走る遠藤と、長い間雜談を交へました。話の間に、屢々、それとなく殺意をほのめかして、相手を怖がらせてやり度いといふ、危險極る慾望が起つて來るのを、彼はやつとのことで喰止めました。「近い內に、ちつとも證據の殘らない樣な方法で、お前を殺してやるのだぞ、お前がさうして、女の樣に多辯にベチヤクチヤ喋れるのも、もう長いことではないのだ。今の內、せい〳〵喋り溜めて置くがいゝよ。」三郎は、相手の止めどもなく動く、大ぶりな脣を眺めながら、心の中でそんなこと繰返してゐました。この男が、間もなく、靑ぶくれの死骸になつて了ふのかと思ふと、彼はもう愉快で耐らないのです。

さうして話し込んでゐる內に、案の定、遠藤が便所に立つて行きました。それはもう、夜の十時頃でもあつたでせうか、三郎は拔目なくあたりに氣を配つて、硝子窓の外なども十分檢べた上、

音のしない樣に、しかし手早く押入れを開けて、行李の中から、例の藥瓶を探し出しました。いつか入れ場所をよく見て置いたので、探すのに骨は折れません。でも、流石に、胸がドキ〳〵して、脇の下からは冷汗が流れました。實をいふと、彼の今度の計畫の中、一番危險なのはこの毒藥を盜み出す仕事でした。どうしたことで遠藤が不意に歸つて來るかも知れませんし、又誰かゞ隙見をして居ないとも限らぬのです。が、それについては、彼はこんな風に考へてゐました。若し見つかつたら、或は見つからなくても、遠藤が藥瓶のなくなつたことを發見したら——それはよく注意してゐればぢき分ることです。殊に彼には天井の隙見といふ武器があるのですから——殺害を思ひ止りさへすればいゝのです。たゞ毒藥を盜んだといふ丈では、大した罪にもなりませんからね。

それは兎も角、結局彼は、先づ誰にも見つからずに、うま〳〵と藥瓶を手に入れることが出來たのです。そこで、遠藤が便所から歸つて來ると間もなく、それとなく話を切上げて、彼は自分の部屋へ歸りました。そして、窓には隙間なくカーテンを引き、入口の戸には締りをして置いて、机の前に坐ると、胸を躍らせながら懷中から可愛らしい茶色の瓶を取り出して、さてつくづくと眺めるのでした。

MORPHINUM HYDROCHLORICUM (0——05)

多分遠藤が書いたのでせう。小さいレッテルにはこんな文字が記してあります。彼は以前に藥物學の書物を讀んで、莫兒比涅のことは多少知つてゐましたけれど、實物にお目にかゝるのは今が始めてでした。多分それは鹽酸莫兒比涅といふものなのでせう。瓶を電燈の前に持つて行つて、すかして見ますと、小匙に半分もあるかなしの、極く僅かの白い粉が、綺麗にキラリ〳〵と光つてゐます。一體こんなもので人間が死ぬのか知ら、と不思議に思はれる程です。

三郎は、無論、それをはかる樣な精密な秤を持つてゐないので 分量の點は遠藤の言葉を信用して置く外はありませんでしたが、あの時の遠藤の態度口調は、酒に醉つてゐたとは云へ決して出鱈目とは思はれません。それに、レッテルの數字も 三郎の知つてゐる致死量の、丁度二倍程なのですから よもや間違ひはありますまい。

そこで、彼は瓶を机の上に置いて、側に、用意の砂糖や清水を並べ、藥劑師の樣な綿密さで、熟心に調合を始めるのでした。止宿人達はもう皆寢てしまつたと見えて、あたりは森閑と靜まり返つてゐます。その中で、マッチの棒に浸した清水を、用意深く、一滴一滴と、瓶の中へ垂らしてゐますと、自分自身の呼吸が、惡魔のため息の樣に、變に物凄く響くのです。それがまあ、どんなに三郎の變態的な嗜好を滿足させたことでせう。ともすれば 彼の目の前に浮んで來るのは、暗闇の洞窟の中で、沸沸と泡立ち煮える毒藥の鍋を見つめて、ニタリ〳〵と笑つてゐる、あの古の物語の、恐ろしい妖婆の姿でした。

併しながら、一方に於ては、其頃から これまで少しも豫期しなかつた、ある恐怖に似た感情が、彼の心の片隅に湧き出してゐました。そして、時間のたつに隨つて、少しづつ〳〵、それが擴つて來るのです。

MURDER CANNOT BE HID LONG; A MAN'S SON MAY, BUT AT THE LENGTH TRUTH WILL OUT.

誰かの引用で覺えてゐた、あのシェークスピアの不氣味な文句が、目もくらめく樣な光を放つて、彼の腦髓に燒きつくのです。この計畫には、絶對に破綻がないと、かくまで信じながらも、刻々に增大して來る不安を、彼はどうすることも出來ないのでした。

何の恨みもない一人の人間を、たゞ殺人の面白さに殺して了ふとは、それが正氣の沙汰か。お前は惡魔に魅入られたのか、お前は氣が違つたのか。一體お前は、自分自身の心を空恐しくは思はないのか。

長い間、夜の更けるのも知らないで、調合して了つた毒藥の瓶を前にして、彼は物思ひに耽つてゐました。一層この計畫を思止まることにしよう。幾度さう決心しかけたか知れません。でも、結局は、彼はどうしても　あの人殺しの魅力を斷念する氣にはなれないのでした。

ところが、さうしてとつおいつ考へてゐる内に、ハッと、ある致命的な事實が、彼の頭に閃きました。

「ウフフフ……。」

突然三郎は、をかしくて堪らない樣に、併し寢靜つたあたりに氣を兼ねながら、笑ひだしたのです。

「馬鹿野郎。お前は何とよく出來た道化役者だ！　大眞面目でこんな計畫を目論むなんて。もうお前の麻痺した頭には、偶然と必然の區別さへつかなくなつたのか。あの遠藤の大きく開いた口が、一度例の節穴の眞下にあつたからといつて、その次にも同じ樣にそこにあるといふことが、どうして分るのだ。いや寧ろ、そんなことは先づあり得ないではないか。」

それは實に滑稽極る錯誤でした。彼のこの計畫は已にその出發點に於て　一大迷妄に陷つてゐたのです。併し、それにしても、彼はどうしてこんな分り切つたことを、今迄氣づかずにゐたのでせう。實に不思議と云はねばなりません。恐らくこれは、さも利口ぶつてゐる彼の頭腦に、非常な缺陷があつた證據ではありますまいか。それは兎も角、彼はこの發見によつて　一方では甚だしく失望しましたけれど　同時に他の一方では、不思議な氣安さを感じるのでした。

「お蔭で俺はもう、恐しい殺人罪を犯さなくても濟むのだ。ヤレ〳〵助つた。」

さうはいふものゝ　その翌日からも、「屋根裏の散歩」をする度に、彼は未練らしく例の節穴を開けて、遠藤の動靜を探ることを怠りませんでした。それは一つは、毒藥を盜み出したことを遠藤が勘づきはしないかといふ心配からでもありましたけれど、併し又、どうかしてこの間の樣に、彼の口が節穴の眞下へ來ないかと　その偶然を待ちこがれてゐなかつたとは云へません。現に彼は、いつの「散歩」の場合にも、シャツのポケットから彼の毒藥を離したことはないのでした。

六

ある夜のこと――それは三郎が「屋根裏の散歩」を始めてからもう十日程もたつてゐました。十日の間も、少しも氣附かれる事なしに、毎日何回となく、屋根裏を這ひ廻つてゐた彼の苦心

は、一通ではありません。綿密なる注意、そんなありふれた言葉では、迚も云ひ現せない樣なものでした。――三郎は又しても遠藤の部屋の天井裏をうろついてゐました。そして、何かおみくじでも引く樣な心持で、吉か凶か、今日こそは、ひよつとしたら吉ではないかな。どうか吉が出て出て呉れます樣にと、神に念じさへしながら、例の節穴を開けて見るのでした。

すると、あゝ、彼の目がどうかしてゐたのではないでせうか。いつか見た時と寸分違はない恰好で、そこに鼾をかいてゐる遠藤の口が、丁度節穴の眞下へ來てゐたではありませんか。三郎は、何度も目を擦つて見直し、又猿股の紐を拔いて、目測さへして見ましたが、もう間違ひはありません。紐と穴と口とが、正しく一直線上にあるのです。彼は思はず叫聲を上げさうになつたのをやつと堪へました。遂にその時が來た喜びと、一方では云ひ知れぬ恐怖と、その二つが交錯した一種異樣の興奮の爲に、彼は暗闇の中で、眞靑になつて了ひました。

彼はポケットから、毒藥の瓶を取り出すと、獨でに震ひ出す手先を、ぢつとためながら、その栓を拔き、紐で見當をつけて置いて――おゝ、その時の何とも形容の出來ぬ心持！――ポトリポトリ、ポトリ、と數滴。それがやつとでした。彼はすぐ樣目を閉ぢて了つたのです。

「氣がついたか、きつと氣がついた。きつと氣がついた。そして、今にも、おゝ、今にも、どん

な大聲で叫び出すことだらう。」

彼は若し兩手があいてゐたら、耳を寒ぎ度い程に思ひました。

ところが、彼のそれ程の氣遣ひにも拘らず、下の遠藤はウンともスーとも云はないのです。毒藥が口の中へ落ちた所は確に見たのですから、それに間違ひはありません。でも、この靜けさはどうしたといふのでせう。三郎は恐る〳〵目を開いて節穴を覗いて見ました。すると、遠藤は、口をムニヤムニヤさせ、兩手で肩を擦る樣な恰好をして、丁度それが終つた所なのでせう。又もやグー〳〵と寢入つて了ふのでした。案ずるより産むが易いとはよく云つたものです。寢惚けた遠藤は、恐ろしい毒藥を飲み込んだことを少しも氣附かないのでした。

三郎は、可哀相な被害者の顏を、身動きもしないで、食ひ入る樣に見つめてゐました。それがどれ程長く感じられたか、事實は二十分とたつてゐないのに、彼には二三時間もさうしてゐた樣に思はれたことです。するとその時、遠藤がフッと目を開きました。そして、半身を起して、さも不思議相に部屋の中を見廻してゐます。目まひでもするのか、首を振つて見たり、目を擦つて見たり、譫言の樣な意味のないことをブツ〳〵と呟いて見たり、色々狂氣めいた仕草をして、それでも、やつと又枕につきましたが、今度は盛んに寢返りを打つのです。

やがて、寝返りの力が段々弱くなつて行き、もう身動きをしなくなつたかと思ふと、その代りに、雷の様な鼾聲が響き始めました。見ると、顔の色が、まるで酒にでも醉つた様に、眞赤になつて、鼻の頭や額には、玉の汗が沸々とふき出してゐます。熟睡してゐる彼の身内で、今、世にも恐ろしい、生死の爭鬪が行はれてゐるのかも知れません。それを思ふと身の毛がよだつ様です。

さて暫くすると、さしも赤かつた顔色が、徐々にさめて、紙の様に白くなつたかと思ふと、見る見る青藍色に變つて行きます。そして、いつの間にか鼾がやんで、どうやら、吸ふ息、吐く息の度數が減つて來ました。……ふと胸の所が動かなくなつたので、愈々最期かと思つてゐますと、暫くして、思ひ出した様に、又肩がピク〳〵して、鈍い呼吸が歸つて來たりします。そんなことが二三度繰り返されて、それでおしまひでした。……もう彼は動かないのです。グッタリと枕をはづした顔に、我々の世界のとはまるで別な、一種のほゝゑみが浮んでゐます。彼は遂に、所謂「佛」になつて了つたのでせう。

息をつめ、手に汗を握つて、その様子を見つめてゐた三郎は、始めてホッとため息をつきました。たうとう彼は殺人者になつて了つたのです。それにしても、何といふ樂々とした死に方だつ

たでせう。彼の犧牲者は、叫聲一つ立てるでなく、苦悶の表情さへ浮べないで、鼾をかきながら死んで行つたのです。

「ナアンだ。人殺しなんてこんなあつけないものか。」

三郎は何だかガッカリして了ひました。想像の世界では、もうこの上もない魅力であつた殺人といふ事が、やつて見れば、外の日常茶飯事と、何の變りもないのでした。この鹽梅なら、まだ何人だつて殺せるぞ。そんなことを考へる一方では、併し、氣拔けのした彼の心を、何ともえたいの知れぬ恐ろしさが、ジハ〳〵と襲ひ始めてゐました。見つめてゐる自分の姿が、三郎は俄に氣味悪くなつて來ました。妙に首筋の所がゾク〳〵して、ふと耳をすますと、どこかで、ゆつくり〳〵、自分の名を呼び續けてゐる様な氣さへします。思はず節穴から目を離して、暗闇の中を見廻しても、久しく明い所を覗いてゐたせゐでせう。目の前には、大きいのや小さいのや、黄色い環の様なものが、次々に現れては消えて行きます。ぢつと見てゐますと、その環の背後から、遠藤の異様な大きな肩が、ヒョイと出て來さうにも思はれるのです。

でも彼は、最初計畫したこと丈けは、先づ間違ひなく實行しました。節穴から藥瓶――その中にはまだ數滴の毒液が殘つてゐたのです――を抛り落すこと、その跡の穴を塞ぐこと、萬一天井

裏に何かの痕跡が殘つてゐないか、懷中電燈を點じて調べること、そして、もうこれで手落ちがないと分ると、彼は大急ぎで棟木を傳ひ、自分の部屋へ引返しました。

「愈々これで濟んだ。」

頭も身體も、妙に痺れて、何かしら物忘れでもしてゐる樣な、不安な氣持を、强ひて引立てる樣にして、彼は押入れの中で着物を着始めました。が、その時ふと氣がついたのは、例の日測に使用した猿股の紐を、どうしたかといふ事です。ひよつとしたら、あすこへ忘れて來たのではあるまいか。さう思ふと、彼は惶しく腰の邊を探つて見ました。どうも無いやうです。彼は益々慌てゝ、身體中を調べました。すると、どうしてこんなことを忘れてゐたのでせう。それはちやんとシヤツのポケットに入れてあつたではありませんか。ヤレ〳〵よかつたと、一安心して、ポケットの中から、その紐と、懷中電燈を取出さうとしますと、ハツと驚いたことには、その中にまだ外の品物が這入つてゐたのです。……毒藥の瓶の小さなコルクの栓が這入つてゐたのです。

彼は、さつき毒藥を垂らす時、あとで見失つては大變だと思つて、その栓を態々ポケットへしまつて置いたのですが、それを胴忘れしてしまつて、瓶丈け下へ落して來たものと見えます。小さなものですけれど、このまゝにして置いては、犯罪發覺のもとです。彼は怖れる心を鬪して、

再び現場へ取つて返し、それを節穴から落して來ねばなりませんでした。

その夜三郎が床についたのは――もうその頃は、用心の爲に押入れで寢ることはやめてゐましたが――午前三時頃でした。それでも、興奮し切つた彼は、なか〳〵寢つかれないのです。あんな、栓を落すのを忘れて來る程では、外にも何か手拔りがあつたかも知れない。さう思ふと、彼はもう氣が氣ではないのです。そこで、亂れた頭を强ひて落ちつける樣にして、其晩の行動を、順序を追つて一つ一つ思出して行き、どつかに手拔りがなかつたかと調べて見ました。が、少くとも彼の頭では、何事をも發見出來ないのです。彼の犯罪には、どう考へて見ても、寸分の手落ちもないのです。

彼はさうして、たうとう夜の明けるまで考へ續けてゐましたが、やがて、早起きの止宿人達が、洗面所へ通ふ爲に廊下を歩く跫音が聞え出すと、つと立上つて、いきなり外出の用意を始めるのでした。彼は遠藤の死骸が發見される時を恐れてゐたのです。その時、どんな態度をとつたらいゝのでせう。ひよつとして、後になつて疑はれる樣な、妙な擧動があつては大變です。そこで彼は、その間外出してゐるのが一番安全だと考へたのですが、併し、朝飯もたべないで外出するのは、一層變ではないでせうか。「ア、、さうだつけ、何をうつかりしてゐるのだ。」そこへ氣が

つくと、彼は又もや寢床の中へもぐり込むのでした。

それから朝飯までの二時間ばかりを、三郎はどんなにビク〳〵して過したことでせう。が、幸にも、彼が大急ぎで食事をすませて、下宿屋を逃げ出すまでは、何事も起らないで濟みました。さうして下宿を出ると、彼はどこといふ當てもなく、たゞ時間を過す爲に、町から町へとさ迷ひ歩くのでした。

七

結局、彼の計畫は見事に成功しました。

彼がお晝頃外から歸つた時には、もう遠藤の死骸は取り片附けられ、警察からの臨檢もすつかり濟んでゐましたが、聞けば、案の定、誰一人遠藤の自殺を疑ふものはなく、其筋の人達も、たゞ形ばかりの取調べをすると、ぢきに歸つて了つたといふことでした。

たゞ遠藤が何故に自殺したかといふその原因は少しも分りませんでしたが、彼の日頃の素行から想像して、多分癡情の結果であらうといふことに、皆の意見が一致しました。現に最近、ある女に失戀してゐたこいふ樣な事實まで現れて來たのです。ナニ、「失戀した失戀した」といふのは、彼の樣な男にとつては、一種の口癖みたいなもので、大した意味がある譯ではないのですが、外に原因がないので、結局それに極つた譯でした。

のみならず、原因があつてもなくても、彼の自殺したことは、一點の疑ひもないのでした。入口も窓も、内部から戸締りがしてあつたのですし、毒藥の容器が枕元にころがつてゐて、それが彼の所持品であつたことも分つてゐるのですから、もう何と疑つて見やうもないのです。天井から毒藥を垂らしたのではないかなどゝ、そんな馬鹿々々しい疑ひを起すものは、誰もありませんでした。

それでも、何だかまだ安心し切れない樣な氣がして、三郎はその日一日、ビク〳〵ものでゐましたが、やがて一日二日とたつに隨つて、彼は段々落ちついて來たばかりか、はては、自分の手際を得意がる餘裕さへ生じました。

「どんなものだ。流石は俺だな。見ろ、誰一人こゝに、同じ下宿屋の一間に、恐ろしい殺人犯人がゐることを氣附かないではないか。」

彼は、この調子では、世間にどれ位隱れた處罰されない犯罪があるか、知れたものではないと思ふのでした。「天網恢々疎にして漏さず」なんて、あれはきつと昔からの爲政者達の宣傳に過ぎ

ないので、或は人民共の迷信に過ぎないので、その實は、巧妙にやりさへすれば、どんな犯罪だつて、永久に現れないで濟んで行くのだ。彼はそんな風にも考へるのでした。尤も、流石に夜などは、遠藤の死顔が目先にちらつく、様な氣がして、何となく氣味が惡く、その夜以來、彼は例の「屋根裏の散歩」も中止してゐる仕末でしたが、それはたゞ、心の中の問題で、やがては忘れて了ふことです。實際、罪が發覺さへせねば、もうそれで十分ではありませんか。

さて、遠藤が死んでから丁度三日目のことでした。三郎が今夕飯を濟ませて、小楊枝を使ひながら、鼻唄かなんか歌つてゐる所へ、ヒョツコリと、久し振りの明智小五郎が訪ねて來ました。

「ヤア。」

「御無沙汰。」

彼等はさも心安げに、こんな風の挨拶を取交したことですが、三郎の方では、折が折なので、この素人探偵の來訪を、少々氣味惡く思はないではゐられませんでした。

「この下宿で毒を飲んで死んだ人があるつて云ふぢやないか。」

明智は、座につくと早速、その三郎の避けたがつてゐる事柄を話題にするのでした。恐らく彼は、誰かゝら自殺者の話を聞いて、幸ゝ、同じ下宿に三郎がゐるので、持前の探偵的興味から、

訪ねて來たのに相違ありません。

「ア、、莫兒比涅でね。僕は丁度その騷ぎの時に居合せなかつたから、詳しいことは分らないけれど、どうも癡情の結果らしいのだ。」

三郎は、その話題を避けたがつてゐることを悟られまいと、彼自身もそれに興味を持つてゐる様な顔をして、かう答へました。

「一體どんな男なんだい。」

すると、すぐに又明智が尋ねるのです。それから暫くの間、彼等は遠藤の爲人について、死因について、自殺の方法について、問答を續けました。三郎は始めの内こそ、ビク〳〵もので、明智の問に答へてゐましたが、慣れて來るに隨つて、段々横着になり、はては、明智をからかつてやり度い様な氣持にさへなるのでした。

「君はどう思ふね。ひよつとしたら、これは他殺ぢやあるまいか。ナニ別に根據がある譯ではないけれど、自殺に相違ないと信じてゐたのが、實に他殺だつたりすることが、往々あるものだからね。」

どうだ、流石の名探偵もこればつかりは分るまいと、心の中で嘲りながら、三郎はこんなこと

まで云つて見るのでした。

それが彼には愉快で堪らないのです。

「それや何とも云へないね。僕も實は、ある友達からこの話を聞いた時に、死因が少し曖昧だといふ氣がしたのだよ。どうだらう、その遠藤君の部屋を見る譯には行くまいか。」

「造作ないよ。」三郎は寧ろ得々として答へました。「隣の部屋に遠藤の同郷の友達がゐてね。それが遠藤の親父から荷物の保管を頼まれてゐるんだ。君のことを話せば、きつと喜んで見せて呉れるよ。」

それから、二人は遠藤の部屋へ行つて見ることになりました。その時、廊下を先頭になつて歩きながら、三郎はふと妙な感じにうたれたことです。

「犯人自身が、探偵をその殺人の現場へ案内するなんて、古往今來ないこつたらうな。」

ニヤ〳〵と笑ひ相になるのを、彼はやつとの事で堪へました。三郎は、生涯の中で、恐らく此の時程得意を感じたことはありますまい。「イヨ、親玉ア。」自分自身にそんな掛け聲でもしてやり度い程、水際立つた惡黨ぶりでした。

遠藤の友達――それは北村といつて、遠藤が失戀してゐたといふ證言をした男です。――は、

明智の名前をよく知つてゐて、快く遠藤の部屋を開けて呉れました。遠藤の父親が國許から出て來て、假葬を濟ませたのが、やつと今日の午後のことで、部屋の中には、彼の持物が、まだ荷造りもせず、置いてあるのです。

遠藤の變死が發見されたのは、北村が會社へ出勤したあとだつた由で、發見の刹那の有樣はよく知らない樣でしたが、人から聞いたことなどを綜合して、彼は可成詳しく說明して呉れました。三郎もそれについて、さも局外者らしく、喋々と噂話などを述べ立てるのでした。

明智は二人の說明を聞きながら、如何にも玄人らしい目くばりで、部屋の中をあちらこちらと見廻してゐましたが、ふと机の上に置いてあつた目覺し時計に氣附くと、何を思つたのか、長い間それを眺めてゐるのです。多分、その珍奇な裝飾が彼の目を惹いたのかも知れません。

「これは目覺し時計ですね。」

「さうですよ。」北村は多辯に答へるのです。「遠藤の自慢の品です。あれは几帳面な男でしてね、朝の六時に鳴る樣に、毎晩缺かさずこれを捲いて置くのです。私なんかいつも、隣の部屋のベルの音で目を覺してゐた位です。遠藤の死んだ日だつてさうですよ。あの朝もやつぱりこれが鳴つてゐましたので、まさかあんなことが起つてゐようとは、想像もしなかつたのですよ。」

それを聞くと、明智は長く延ばした頭の毛を、指でモジャ〳〵掻き廻しながら、何か非常に熱心な様子を示しました。

「その朝、目覺しが鳴つたことは、間違ひないでせうね。」

「エ、、それは間違ひありません。」

「あなたは、そのことを、警察の人に仰有いませんでしたか。」

「イ、エ、……でも、なぜそんなことをお聞きなさるのです。」

「なぜつて、妙ぢやありませんか。その晩に自殺しようと決心した者が、明日の朝の目覺しを捲いて置くといふのは。」

「なる程、さう云へば變ですね。」

北村は迂濶にも、今まで、まるでこの點に氣附かないでゐたらしいのです。そして、明智のいふことが、何を意味するかも、まだハッキリ飲み込めない樣子でした、が、それも決して無理ではありません。入口の締りのしてあつたこと、毒藥の容器が死人の側に落ちてゐたこと、其他凡ての事情が、遠藤の自殺を疑ひないものに見せてゐたのですから。

併し、この問答を聞いた三郎は、まるで足許の地盤が、不意にくづれ始めた樣な驚きを感じました。そして、何故こんな所へ明智を連れて來たのだらうと、自分の愚さを悔まないではゐられませんでした。

明智はそれから、一層の綿密さで、部屋の中を調べ始めました。無論天井も見逃す筈はありません。彼は天井板を一枚一枚叩き試みて、人間の出入した形跡がないかを調べ廻つたのです。が、三郎の安堵したことには、流石の明智も、節穴から毒藥を垂らして、そこを又元々通り蓋して置くといふ新手には、氣附かなかつたと見えて、天井板が一枚もはがれてゐないことを確めると、もうそれ以上の穿鑿はしませんでした。

さて、結局その日は別段の發見もなく濟みました。明智は遠藤の部屋を見て了ふと、又三郎の所へ戻つて、暫く雜談を取交した後、何事もなく歸つて行つたのです。たゞ、その雜談の間に、次の樣な問答のあつたことを書き洩らす譯には行きません。なぜといつて、これは一見極くつまらない樣に見えて、その實、このお話の結末に最も重大な關係を持つてゐるのですから。

その時明智は、袂から取出したエアシップに火をつけながら、ふと氣がついた樣にこんなことを云つたのです。

「君はさつきから、ちつとも煙草を吸はない樣だが、よしたのかい。」

さう云はれて見ますと、成程、三郎はこの二三日、あれ程大好物の煙草を、まるで忘れて了つた様に、一度も吸つてゐないのでした。

「をかしいね。すつかり忘れてゐたんだよ。それに、君がさうして吸つてゐても、ちつとも欲しくならないんだ。」

「いつから？」

「考へて見ると、もう二三日吸はない様だ。さうだ、こゝにある敷島を買つたのが、たしか日曜日だつたから、もうまる三日の間、一本も吸はない譯だよ。一體どうしたんだらう。」

「ぢや、丁度遠藤君の死んだ日からだね。」

それを聞くと、三郎は思はずハッとしました。併し、まさか遠藤の死と、彼が煙草を吸はない事との間に、因果關係があらうとも思はれませんので、その場は、たゞ笑つて濟ませたことですが、後になつて考へて見ますと、それは決して笑話にする様な、無意味な事柄ではなかつたのです。

そして、この三郎の煙草嫌ひは、不思議なことに、その後いつまでも續きました。

八

三郎は、その當座、例の目覺し時計のことが、何となく氣になつて、夜もおち〳〵睡れないのでした。假令遠藤が自殺したのでないといふことが分つても、彼がその下手人だと疑はれる様な證據は、一つもない筈ですから、そんなに心配しなくともよささうなものですが、でも、それを知てゐるのがあの明智だと思ふと、なか〳〵安心は出來ないのです。

ところが、それから半月ばかりは何事もなく過去つて了ひました。心配してゐた明智もその後一度もやつて來ないのです。

「ヤレ〳〵、これで愈々大團圓か。」

そこで三郎は、遂に氣を許す様になりました。そして、時々恐ろしい夢に惱まされることはあつても、大體に於て、愉快な日々を送ることが出來たのです。殊に彼を喜ばせたのは、あの殺人罪を犯して以來といふもの、これまで少しも興味を感じなかつた色々な遊びが、不思議と面白くなつて來たことです。それ故、この頃では、毎日の様に、彼は家を外にして、遊び廻つてゐるのでした。

ある日のこと、三郎はその日も外で夜を更かして、十時頃に自分の部屋へ歸つたのですが、さて寢ることにして、蒲團を出す爲に、何氣なく、スーッと押入れの襖を開いた時でした。

「ワッ。」

彼はいきなり恐ろしい叫聲を上げて、二三歩あとへよろめきました。

彼は夢を見てゐたのでせうか。それとも、氣でも狂つたのではありますまいか。そこには、押入れの中には、あの死んだ遠藤の首が、頭髪をふり亂して、薄暗い天井から、さかしまに、ぶら下つてゐたのです。

三郎は、一たんは逃げ出さうとして、入口の所まで行きましたが、何か外のものを、見違へたのではないかといふ樣な氣もするものですから、恐る〳〵、引返して、もう一度、ソッと押入れの中を覗いて見ますと、どうして、見違ひでなかつたばかりか、今度はその首は、いきなりニッコリと笑つたではありませんか。

三郎は、再びアット叫んで、一飛びに入口の所まで行つて障字を開けると、矢庭に外へ逃げ出さうとしました。

「鄕田君。鄕田君。」

それを見ると、押入れの中では、頻りと三郎の名前を呼び始めるのです。

「僕だよ。僕だよ、逃げなくつてもいゝよ。」

それが、遠藤の聲ではなくて、どうやら聞き覺えのある、外の人の聲だつたものですから、三郎はやつと逃げるのを踏み止つて、恐々ふり返つて見ますと、

「失敬々々。」

さう云ひながら、以前よく三郎自身がした樣に、押入れの天井から降りて來たのは、意外にも、あの明智小五郎でした。

「驚かせて濟まなかつた。」押入れを出た洋服姿の明智が、ニコ〳〵しながらいふのです。「一寸君の眞似をして見たのだよ。」

それは實に、幽靈なぞよりはもつと現實的な、一層恐ろしい事實でした。明智はきつと、何もかも悟つて了つたのに相違ありません。

その時の三郎の心持は、實に何とも形容の出來ないものでした。あらゆる事柄が、頭の中で風車の樣に旋轉して、いつそ何も思ふことがない時と同じ樣に、たゞボンヤリとして、明智の顏を見つめてゐる外はないのです。

「早速だが、これは君のシャツの釦だらうね。」

明智は、如何にも事務的な調子で始めました。手には小さな真釦を持つて、それを三郎の目の

前につき出しながら、

「外の下宿人達も調べて見たけれど、誰もこんな釦をなくしてゐるものはないのだ。ア、、そのシャツのだね。ソラ、二番目の釦がとれてゐるぢやないか。」

ハッと思つて、胸を見ると、成程、釦が一つとれてゐます。三郎は、それがいつとれたものやら、少しも氣がつかないでゐたのです。

「形も同じだし、間違ひないね。ところで、この釦をどこで拾つたと思ふ。天井裏なんだよ。それも、あの遠藤君の部屋の上でだよ。」

それにしても、三郎はどうして、釦などを落して、氣附かないでゐたのでせう。それにあの時、懷中電燈で十分檢べた筈ではありませんか。

「君が殺したのではないかね。遠藤君は。」

明智は無邪氣にニコ〳〵しながら、――それがこの場合一層氣味惡く感じられるのです――三郎のやり場に困つた目の中を、覗き込んで、とゞめを刺す樣に云ふのでした。

三郎は、もう駄目だと思ひました。假令明智がどんな巧みな推理を組立て〻來ようとも、たゞ推理丈けであつたら、いくらでも抗辯の餘地があります。けれども、こんな豫期しない證據物を

つきつけられては、どうすることも出來ません。

三郎は今にも泣き出さうとする子供の樣な表情で、いつまでも〳〵默りこくつて衝立つてゐました。時々、ボンヤリと霞んで來る目の前には、妙なことに、遠い〳〵昔の、例へば小學校時代の出來事などが、幻の樣に浮き出して來たりするのでした。

それから二時間ばかり後、彼等はやつぱり元のまゝの狀態で、その長い間、殆ど姿勢さへもくづさず、三郎の部屋に相對してゐました。

「有難う、よくほんたうのことを打開けて呉れた。」最後に明智が云ふのでした。「僕は決して君のことを警察へ訴へなぞしないよ、たゞね僕の判斷が當つてゐるかどうか、それが確めたかつたのだ。君も知つてゐる通り、僕の興味はたゞ「眞實を知る」といふ點にあるので、それ以上のことは、實はどうでもいゝのだ。それにね、この犯罪には、一つも證據といふものがないのだよ。シャツの釦、ハハ……、あれは僕のトリックさ。何か證據品がなくては、君が承知しまいと思つてね。この前君を訪ねた時、その二番目の釦がとれてゐることに氣附いたものだから、一寸利用して見たのさ。ナニ、これは僕が釦屋へ行つて仕入れて來たのだよ。釦がいつとれたなんていふ

事は、誰しもあまり氣附かないことだし、それに、君は興奮してゐる際だから、多分うまく行くだらうと思つてね。

「僕が遠藤君の自殺を疑ひ出したのは、君も知つてゐる樣に、あの目覺し時計からだ。あれから、この管轄の警察署長を訪ねて、こゝへ臨檢した一人の刑事から、詳しく當時の模樣を聞くことが出來たが、その話によると、莫兒比涅の瓶が、煙草の箱の中にころがつてゐて、中味が卷煙草にこぼれかゝつてゐたといふのだ。警察の人達はこれに別段注意を拂はなかつた樣だが、考へて見れば甚だ妙なことではないか。聞けば、遠藤は非常に几張面な男だといふし、ちやんと床に這入つて死ぬ用意までしてゐるものが、毒藥の瓶を煙草の箱の中へ置くさへあるに、而も中味をこぼすなどといふのは、何となく不自然ではないか。

そこで、僕は益々疑を深くした譯だが、ふと氣附いたのは、君が遠藤の死んだ日から煙草を吸はなくなつてゐることだ。この二つの事柄は、偶然の一致にしては、少し妙ではあるまいか。すると、僕は、君が以前犯罪の眞似などをして喜んでゐたことを思ひ出した。君には變態的な犯罪嗜好癖があつたのだ。

僕はあれから度々この下宿へ來て、君に知れない樣に遠藤の部屋を調べてゐたのだよ。そして、犯人の通路は天井の外にないといふことが分つたものだから、君の所謂「屋根裏の散歩」によつて、止宿人達の樣子を探ることにした。殊に、君の部屋の上では、度々長い間うづくまつてゐた。そして、君のあのイラ〳〵した樣子を、すつかり隙見して了つたのだよ。

探れば探る程、凡ての事情が君を指してゐる。だが、殘念なことには、確證といふものが一つもないのだ。そこでね。僕はあんな芝居を考へ出したのだよ、ハハ、、、、。ぢや、これで失敬するよ。多分もう御目にかゝれまい。なぜつて、ソラ、君はちやんと自首する決心をしてゐるのだからね。」

三郎は、この明智のトリックに對しても、最早何の感情も起らないのでした。彼は明智の立去るのも知らず顏に、一死刑にされる時の氣持は、一體どんなものだらう。」たゞそんなことを、ボンヤリと考へ込んでゐるのでした。

彼は毒藥の瓶を節穴から落した時、それがどこへ落ちたかを見なかつた樣に思つてゐましたけれど、その實は、卷煙草に毒藥のこぼれたことまで、ちやんと見てゐたのです。そして、それが意識下に押籠められて、精神的に彼を煙草嫌ひにさせて了つたのでした。

接

吻

一

近頃は有頂天の山名宗三であつた。何とも云へぬ暖かい、柔かい、薔薇色のそして薫のいゝ空氣が、彼の身邊を包んでゐた。それが、お役所のボロ机に向つて、コツ〳〵と仕事をしてゐる時にでも、さては、同じ机の上でアルミの辨當箱から四角い飯を食つてゐる時にでも、四時が來るのを遲しと、役所の門を飛びだして、柳の街路樹の下を、木枯の樣にテクついてゐる時にでも、いつも彼の身邊にフハ〳〵と漂つてゐるのであつた。

といふのは、山名宗三、この一月ばかり前に新妻を迎へたので、しかも、それが彼の戀女房であつたので。

さてある日のこと、例の四時を合圖に、まるで授業の濟んだ小學生の樣に歸り急ぎをして、課長の村山が、まだ机の上にゴテ〳〵取片づけてゐるのを尻目にかけて、役所を駈け出すと、彼は眞一文字に自宅へと急ぐのであつた。

赤い手絡のお花は、例の茶の間の長火鉢に凭れて、チヤンと用意の出來たお膳の前に、クツクツ笑ひながら（てもお花はよく笑ふ女だ）ポツツリと坐つてゐることであらう。玄關の格子が開いたら、兎の樣に飛び出す用意をしながら、今か〳〵と俺の歸りを待つてゐることであらうテ。へ、、何てまあ可愛い奴だらう。そんな風にはつきり考へた譯ではないが、山名宗三の道々の心持を圖解すると、まあかういつたものであつた。

「今日は一つ、奴さん、おどかしてやるかな。」

自宅の門前に近づくと、宗三はニヤ〳〵獨笑ひをしながら考へた。そこで、拔足差足、ソロリソロリと格子戸を開けて、玄關の障子を開けて、靴を脱ぐのも音のせぬ樣に注意しながら、いきなり茶の間の前まで忍び込んだ。

「こゝいらで、エヘンと咳ばらひでもするかな。いや待て〳〵やつ獨りでゐる時にはどんな恰好をしてゐるか、一寸すき見をしてやれ。」

で、障子の破れから茶の間の中を覗いて見ると、さあ大變、山名宗三、青くなつて硬直した。

といふのは、そこに、いとも不思議な光景が演じられてゐたからで。

二

想像通り、お花はチャンと長火鉢の前に坐つてゐる。布巾をかけたお膳も出てゐる。が、肝心のお花は決してクツ〳〵笑つてはゐないのだ。それどころか、世にも眞面目な樣子で、泣いてゐるのではないかと思ふ程の緊張ぶりで、一枚の寫眞を抱いて接吻をしたり、抱きしめたり、それは〳〵見ちやあゐられないのであつた。

さては、山名宗三、ギツクリと思ひ當る所があつたので、もう胸は早鐘をつく樣だ。ソツと二三疊あと歸りをすると、今度はドシ〳〵と疊ざはりも荒々しく、ガラリと間の障子を引開けて、

「オイ、今歸つた。」

何故出迎へないのだと云はぬばかりに、そこの長火鉢の向う側へドツカリ坐つたことである。

「アラツ」

一聲叫ぶがいなや、手に持つてゐた寫眞をいきなり帶の間へ隱すと、お花は、赤くなつたり、青くなつたり、へどもどしながら、でも、やつと氣を沈めて、

「まあ、私、ちつとも存じませんで、ご免なさいまし。」

そのいやにしとやかな口の利き方からして、食はせものだ。宗三、さう思つた。それに、あの寫眞を隱した所を見ると、テツキリさうと極つた。障子を開けるまでは、若しや自分の寫眞ではあるまいか、と、一方では大いに自惚てゐたのだが、寫眞を隱して青くなつた樣では、無論自分のではない。きつと、きつと彼奴の寫眞に相違ない。あの課長の村山面の。

と宗三が疑念を抱くには、抱く丈けの理由があつた。

新妻のお花は課長村山の遠緣の者で、長らく彼の家に寄寓してゐたのを、緣あつて宗三が貰ひ受たのだ。媒酌はいふまでもなく課長さんである。課長さんといつても、年輩は宗三とさして違はぬ年若だし、奥さんはあつても、評判の不縹緻もの、疑ひ出せば、何が何だか知れたものではないのである。宗三、體よくお下り頂戴に及んだのか、それも今となつては怪しいものなのである。

それに、もう一つをかしいのは、お花の奴、しげ〳〵と村山家を訪れる一件だ。まだ一月にしかならぬに、宗三が知つてゐる丈けでも、四五へんは行つてゐる。時には夜に入つて歸つたこともある位だ。

色々と考へるに從つて、もう〳〵癪で癪で、宗三は胸がはち切れ相だ。彼が又大のやきもち燒

きと來てゐるので。が、まづさあらぬ體で夕食を濟ませると、いつもの樣に常談口を利き合ふでもなく、さうかといつて、寫眞の正體を極めぬ間は、書齋にとぢ籠る譯にも行かず、双方妙に氣拙く睨み合ひといつた形。

「それは一體誰の寫眞だ。」

と、度々咽喉まで込み上げて來るのを、やつと嚙み殺して、宗三はぢつとお花の擧動を監視してゐる。やきもち燒き丈けになか〳〵陰險な方で、彼の積りでは、床へつく時には、きつとあの寫眞を何處かへしまふだらう。それを見極めて置いてあとから探し出してやらうといふ氣だ。

三

やがて、お花はだんまりで立上ると、こそ〳〵と、どこかへ出て行つた。はゞかりとは方角が違ふ。どうやら納戸らしい。宗三自身は見る影もない腰辨だけれど、家丈けは、親父が御家人だつたので、古いが手廣な納戸なんていふものもある。ぢやあ簞笥へでもしまふ積りかな、簞笥といつても、幾つもあるから後になつては分らない。兎も角、お花の跡をつけて見るに如くはない。で、宗三、そつと立上ると、女房のあとから、影の樣についこ行つた。

案の定納戸だ。今這入つたばかりの所で、まだ簞笥の鎖前をガチヤ〳〵云はせてゐる。一體、どの簞笥の、どの抽出へしまふのかと、幸の障子の破れに目を當てゝ、そつと覗いて見ると、何しろ二間兼用の五燭の電燈だから、それに障子の穴がやつと片目丈けの大きさなので、見當をつけるのが、なか〳〵骨だつたが、でも、兎も角、入口から云つて正面の簞笥の上の、小抽斗の左の端といふこと丈けは分つた。お花の後姿は、そこへ一物を投げ込むと、ピシヤンとしめて、大急ぎでこちらへやつて來さうな樣子。見られては一大事と、宗三、元の茶の間へ逃げ歸ると、敷島を一本、つけるが早いか口へ持つて行つて、スパリ〳〵とすました。

それから、御兩人睨み合ひよろしくあつて、だが、さうしてゐても際限がないので、どちらが口を切るともなく、砂をかむ樣な世間話を二口三口取交してゐる內に、やがて九時だ、宗三思惑があるのでいつもよりも少し早いのだが、早速床につく。

さて、その眞夜中、お花の寢息を伺つて、これなら大丈夫と思つたか宗三むつくり起上つて、寢卷の前をかき合せると、ソロリ〳〵と寢間の外へ忍び出した。行先は云ふまでもなく納戸だ。やつとたどりついて、宵に見當をつけて置いた、正面の簞笥の上の一番左の小抽斗、胸をドキドキさせながら開いて見ると、あつた、あつた。矢張り邪推ではなかつた。十數枚の大きいのや小

さいのや、寫眞の重ねてある一番上に、課長の村山の半身像が、いやにすましてのつかつてゐる。でも念の爲に、震へる手先に力を入れてその寫眞を一枚々々調べて見たが、男のものといつては村山のたゞ一枚で、あとはみんなお花の家庭の寫眞ばかりだ。もう〳〵疑ふ餘地はない。さうと極つた。うぬ、どうしてくれるか。くやしいのと、寒いので、宗三ガタ〳〵と身を震はせて、はぎしりをかんだ。

四

その翌日、物をも云はず、お花の差出す辨當箱をひつたくると、宗三、やけに急いで役所へ出勤したが、同僚の顏を見ても、癪で仕樣がない。はした月給を貰つて、あの課長面にペコついてゐるかと思ふと、どいつもこいつも、かたつ端から、なぐり倒してやり度い樣な氣がする。挨拶もしないで席につくと、ムーッと默り込んだまゝ、いやに血走つた目で、まだ出勤しない課長の机を、ゲッと睨みつけた。

やがて、意氣な背廣の課長さんが、大きな折鞄を小脇に御出勤だ。一同自席から敬禮するのを、輕く受けて席につく。鞄がバタッと机の上で鳴る。宗三は、無論禮なんかしない。燒く樣な

眼で睨んでゐるばかりだ。

村山課長、一わたり机の上の整理が濟むと、エヘンと一咳して、拍子の惡い、

「山名君。一寸」

といふ仰せだ。宗三はよつぽど返事をしないでゐようかと思つたが、まさかさうもならず、澁澁席を立つて、課長の机の前まで行つた。尤も「何か御用で」なんて追從は云はない。ムッツリとしてつゝたつてゐる。だが、課長の方では、何も知らないものだからいつもの通りお叱言が始まる。

「君、この統計は困るね。肝心の平均率が出てゐないぢやないか。エ、君。」

見ると成程、こちらの手落ちだ。平生なら一言もなく引下る所だが、今日はさうは行かない。蟲の居所が違ふ。返事もしないで、グッと相手を睨みつけてゐる。

「君はこの統計を何だと思つてゐるのだ。ご丁寧に總計を並べたりして、そんなものは入らないのだ。平均率が必要なんだ。その位のこと解り相なものだね。」

「さうですかッ。」

宗三、いきなりびつくりする樣な大聲で呶鳴ると、サッと書類を引つたくつて、そのまゝ自席

へ戻つて來た。これから、みつしり、閑つぶしの御說法を始める積の課長さん、目をぱちくり。

さて、自席に戻ると、宗三何だか一生懸命書き出した。殊勝にも統計を訂正するのかと見ると、決してさうではない。白紙を一枚擴げると、筆太に先づ書いたのが、「辭職願」

五

面喰つた課長の前に、小學生のお淸書の樣な大文字の辭表を投げつけて、ぐつと溜飲を下げた宗三は、まだ午前十一時といふに、大手を振つて歸つて來た。

「お花、一寸こゝへお出で。」

例の長火鉢の前へ、ドツカリと坐ると、さてこれから一談判だ。昨夜のことがあるのでお花はもうビク〳〵もの。

「アラ、お歸りなさいまし。どつかお加減でも……」

「いや、身體は別狀ない。僕は今日から役所を止す。その積りでゐてくれ。それから、役所を止した譯はあの村山と衝突したからだ。だから、今日以後、お前も村山家へ出入りすることはふつつり止めて貰ひ度い。これは斷じて守つてくれないと困る。」

「マア……」

といつたが二の句がつげない。

「ア、それから」と何氣なく、「お前は村山の寫眞を持つてゐた筈だね。あれを一寸こゝへ持つてお出で。」

夫の劍幕がひどいので拒む譯にも行かぬ。お花は澁々例の寫眞を持つて來る。宗三は、それを、お花の目の前で、さも憎々しく、ズタ〳〵に引きさくと、火鉢の中へくべて了つた。そして、やつとこれで淸々したといふ顏付だ。

かうまでされては、お花とて悟らない譯には行かぬ。さてはあの一件だなと、どうやら樣子が分つた。そこで、兎も角も夫の口からそれを聞いた上のことゝ、かうなると女といふものは手管のあるもので、すねて見たり、泣いて見たり、種々樣々の手段を盡して、結局隙見の一件を白狀させて了つた。

どうだ、これには一言もあるまい。寫眞をしまつた所まで調べ上げてあるのだから、何といつてもこつちに手拔りはない筈だ。宗三、勝利者の氣組みで。ぐつと落着いて、お花の樣子を眺めてゐる。

するとお花、いきなりワッと泣き伏しでもするかと思ひきや、どうして〳〵、宗三があつけに取られた事には矢庭にクッ〳〵と笑ひ出したのである。

「マア、何かと思へば、あなた、あんまりですわ。村山さんと私と……ホ、、……あなたも随分邪推深い方ね。あの寫眞、あれは、あれは、あのう、あなたのお寫眞でしたのよ。」

といつたかと思ふと、お花、いきなり赧くなつて、顔を隠すのであつた。

「僕の寫眞だつて、馬鹿な、うまくごまかさうと思つても、それは駄目だ。チャンと納戸へ尾行して、しまふ所を睨んで置いたんだからな。あの抽斗には村山の寫眞の外には、僕の寫眞はおろか、男のは一枚もありやしないぢやないか。」

「ですから、猶變ですわ。そんな澤山寫眞があつたなんて。きつとあなたは寢惚けていらしつたのよ。あなたのお寫眞は一枚丈け、大切に抽斗の中の手文庫にしまつてあるのですもの。一體あなたの御覽なすつたといふ抽斗はどれですの。」

「あの正面の箪笥の、上の左の端の小抽斗さ。」

「アラ、正面ですつて、まあをかしい。私が昨夜あなたのお寫眞をしまつたのは左側の箪笥でしたのよ。抽斗は上の左の端のですけれど、まるで箪笥が違ひますわ。」

「そんな筈はない。やつぱりお前はごまかさうと思つてゐるのだ。僕は小さな障子の穴から覗いたのだから、左側の箪笥なぞ、第一見える道理がないのだ。何といつても正面だ。いくらいそいでゐたとはいへ、正面と左側と、まるで方向の違ふものを、間違へる筈はない。」

「をかしいですわねえ。」

「をかしくはない。お前はてれ隠しに、そんな出鱈目を云つてゐるのだ。つまらない眞似はいゝ加減に止さないか。」

「だつて……」

「だつてぢやない。何といつても僕の目に間違ひはない。」

妙な押問答になつて來た。夫は部屋の正面の壁に沿つて置かれた箪笥だといひ、妻は左側面の壁に沿つて置かれたそれだと主張する。兩人の言ひ分の間には九十度の差違がある。

六

「ア、分りましたわ。」

突然お花が叫んだ。

「あなた、まあこちらへ來てごらんなさいまし。分りました分りました。」

無暗に袖を引つぱるので、宗三仕樣事なしについて行くと、それは納戸だ。

「これ、これ、あなた、これに違ひありませんわ。」

そこで、お花がさういつて、指したのは、一個の新しい洋服箪笥。去年の暮。臨時手當に拵置貯金の利息を足して買ひ整へた新式洋服箪笥。それが一體どうしたといふのであらう。

「お分りになりまして、ホラ、この扉についてゐる鏡ですよ。この扉が開いてゐて、丁度障子の穴の前に來てゐたのですよ。ですから、正面の箪笥が隱れて、飛んでもない左側の箪笥が寫つたのですよ。それが丁度正面にある樣に見えたのですよ。」

なる程、洋服箪笥の扉の鏡か、障子の穴の前に四十五度の角度で開いてゐたとすれば、そこへ映つた左側のものが眞正面に見えた筈だ。二つの箪笥の形もよく似てゐるので間違ふのは無理ではない。殊に薄暗い電燈の光で、しかも大いそぎで見たのだもの。こいつは俺のしくじりかな。

宗三あまりの事にがつかりした。

他人の寫眞だと早合點したのは飛んだ間違ひで、お花が宗三戀しさの餘り、彼宗三の寫眞に接吻したり抱きしめたりしてゐたのだとするとそんなひどい間違ひはない。ゾク〳〵と嬉しがつて

ゐるべき場合に、見當違ひの癇癪を立てゝ、取り返しのつかぬ辭表まで書いたとは。

さあ、そこで主客顚倒である。一擧にして頽勢を挽回したお花は、今度こそ本當に泣き出した。

「お役所を止して明日から何とする積りだ。この不景氣に直樣口があるではなし、さうかといつて、遊んで食へる身分でもなし、あなたもあんまり向う見ずだ。それに、私が村山家へ出入りするといつてお怒りなさるけれど、これもみんなあなたに出世させ度いばつかりぢやありませんか。誰があんな家、進んで行き度いことがあるものですか。ひとの氣も知らないで」といつて恨む。怨じる。歎く。それはそれは。

山名宗三、今は一言もない。そればかりか、さしづめこれからの身のふり方に困じ果てた。「すまじきものは嫉妬だなあ」彼はつく〳〵嘆じたことである。

だが、讀者諸君。男といふものは、少々陰險に見えても、性根はあくまでお人好しに出來てゐるものだ。そして、女といふものは、表面何も知らないねんねえの樣であつても、心の底には生れつきの陰險が巣喰つてゐるものだ。このお花だつて、お話の表面に現れた丈けの女だかどうだか、甚だ疑はしいものである。若しも、例の鏡のトリックが、彼女の創作であつたとしたらどう

だ。そして、彼女が接吻し、抱きしめたのは、やつぱり村山課長の寫眞であつたとしたらどうだ。それは兎も角男である山名宗三には、そこまで邪推をたくましくする陰險さはなかつたのである。

一枚の切符

上

「イヤ、僕も多少は知つてゐるさ。あれは先づ、近來の珍事だつたからな。世間はあの噂で持切つてゐる。が、多分君程詳敷しくはないんだ。少し話さないか。」

一人の青年紳士が、かういつて、赤い血の滴る肉の切れを口へ持つて行つた。

「ぢや、一つ話すかな。オイ、ボーイさん、ビールの御代りだ。」

身形の端正なのにそぐはず、髪の毛を馬鹿にモヂヤ〳〵と伸した。相手の青年は、次の樣に語り出した。

「時は——大正——年十月十日午前四時、所は——町の町外れ、富田博士邸裏の鐵道線路、これが舞臺面だ。冬の、(イヤ、秋かな、マアどつちでもいゝや。)まだ薄暗い曉の、靜寂を破つて上り第〇號列車が驀進して來たと思ひ給へ。すると、どうした譯か、突然けたゝましい警笛が鳴つたかと思ふと、非常制動機の力で、列車は出し拔けに止められたが、少しの違ひで車が止まる前に、一人の婦人が輓殺されて了つたんだ。僕はその現場を見たんだがね。初めての經驗だが、實際いやな氣持のものだ。

「それが問題の博士令夫人だつたのさ。車掌の急報で其筋の連中がやつて來る。野次馬が集る。そのうちに誰れかゞ博士邸に知らせる、驚いた主人の博士や召使達が飛出して來る、丁度その騷ぎの最中へ、君も知つてゐる樣に、當時——町へ遊びに出掛けてゐた僕が、僕の習慣である所の、早朝の散歩の途次、通り合せたといふ譯さ。で、檢死が始まる。警察醫らしい男が傷口を檢査する。一通り濟むと直ぐに死體は博士邸へ擔込まれて了ふ。傍觀者の眼には、極めて簡單に、事は落着した樣であつた。

「僕の見たのはこれ丈けだ。あとは新聞記事を綜合して、それに僕の想像を加へての話だから、その積りで聞いてくれ給へ。さて、警察醫の觀察によると、死因は無論轢死であつて、右の大腿を根許から切斷されたのによるといふのだ。そして、事茲に至つた理由はといふと、それを說明して呉れる所の、實に有力な手懸りが、死人の懷中から出て來た。それは夫人が夫博士に宛てた一通の書置であつて、中の文句は、永年の肺病で、自分も苦しみ、周圍にも迷惑を掛けてゐることが、最早や耐へられなくなつたから、茲に覺悟の自殺をとげる。ザツとマアかういふ意味だつ

たのだ。實にありふれた事件だ。若し、こゝに一人の名探偵が現れなかつたなら、お話はそれでお仕舞で、博士夫人の厭世自殺とか何とか、三面記事の隅つこに小さい記事を留めるに過ぎなかつたであらうが、その名探偵のお蔭で、我々もすばらしい話題が出來たといふものだ。

「それは黒田清太郎といふ、新聞でも盛んに讃美して居つた所の刑事巡査だが、これが奇特な男で、日頃探偵小説の一册も讀んでゐようといふ奴さ。とマア素人考へに想像するんだがね。その男が飜譯物の探偵小説にでもある樣に、犬の樣に四つん這になつて、その邊の地面を嗅ぎ廻つたものだ。それから、博士邸内に這入つて、主人や召使に色々の質問を發したり、各部屋のどんな隅々をも殘さないで、擴大鏡を以て覗き廻つたり、マア、よろしく新しき探偵術を行つたと思ひ給へ。そして、その刑事が、長官の前に出て言ふことには、「こりや、も少し檢べて見なければなりますまい」といふ譯だ。そこで、一座俄に色めき立つて、とりあへず死體の解剖といふことになる。大學病院に於て、何々博士執刀の下に、解剖して見ると、黒田名探偵の推斷誤らずといふ譯だね。轢死前既に一種の毒藥を服用したらしい形跡がある。つまり、何者かゞ夫人を毒殺して置いて、その死骸を鐵道線路まで運び、自殺と見せかけて、實は恐るべき殺人罪を犯したといふことになる。その當時の新聞は、「犯人は何者ぞ」といふ樣なエキサイテイングな見出しで、盛ん

に我々の好奇心を煽つたものだ。そこで、係檢事が黒田刑事を呼出して、證據調べの一段となる。

「さて、刑事が勿體ぶつて持出した所の證據物件なるものは、第一に一足の短靴、第二に石膏で取つた所の足跡の型、第三に數枚の皺になつた反古紙、一寸ローマンティックぢやないか。この三つの證據品を以て、この男が主張するには、博士夫人は自殺したんではなくて、殺されたんだ。そしてその殺人者は、なんと、夫富田博士その人である。とかういふんだ。どうだい、なかなか面白いだらう。」

話手の青年は、一寸ズル相な微笑を浮べて相手の顏を見た。そして、内ポケットから銀色のシガレットケースを取出し、如何にも手際よく一本のオックスフォードをつまみ上げて、パチンと音をさせて蓋を閉ぢた。

「さうだ。」聽手の青年は、話手の爲に燐寸を擦つてやり乍ら「そこまでは、僕も大體知つてゐるんだ。だが、その黒田といふ男が、どういふ方法で殺人者を發見したのか、そいつが聞きものだね。」

「好個の探偵小説だね。で、黒田氏が説明して云ふことには、他殺ではないかといふ疑を起し

たのは、死人の傷口の出血が案外少いといつて警察醫が小首を傾けた。その極めて些細な點からであつた。去る大正何年何月幾日の——町の老母殺しに、その例があるといふんだ。疑ひ得るだけ疑へ、そして、その疑ひの一つ一つを出來る丈け綿密に探索せよ、といふのが探偵術のモットーださうだが、この刑事もその骨を呑込んで居つたと見えて、一つの假定を組立てゝ見たのだ。誰れだか分らない男又は女が、この夫人に毒藥をのませた。そして、夫人の死體を線路まで持つて來て汽車の轍が、萬事を目茶苦茶に押しつぶして呉れるのを待つた。と假定するならば、線路の附近に死體運搬によつてつけられた、何かの痕跡が殘つてゐる筈だ。とかう推定したんだ。そして、何とマア刑事にとつて幸運であつたことには、轢死のあつた前夜まで雨降り續きで、地面に色々の足跡がクッキリと印せられてゐた。それも、前夜の眞夜中頃雨が上つてから、轢死事件のあつた午前四時何十分までに、その附近を通つた足跡丈けが、お誂向に殘つてゐたといふ譯だ。で刑事は先に云つた犬の眞似を始めたんだ。が、此處へ一寸現場の見取圖を描いて見よう。」左右田は、これが話手の青年の名前であるが——かういつてポケットから、小形の手帳を取出して、鉛筆でザッとした圖面を書いた。

「鐵道線路は地面よりは少し小高くなつてゐて、その兩側の傾斜面には一面に芝草が生えてゐる。線路と富田博士邸の裏口との間には大分廣い、さうだ。テニスコートの一つ位置かれる樣な空地、草も何も生えてゐない小砂利混りの空地がある。足跡の印せられてあつたのはその側であつて、線路のも一つの側、即ち博士邸とは反對の側は、一面の水田で、遙に何かの工場の煙突が見えようといふ場末によくある景色だ。東西に伸びた——町の西のはづれが、博士邸其他數軒の文化村式の住宅で終つてゐるのだから、博士邸の並びには線路とほゞ並行して、ズッと人家が續いてゐると思ひ給へ。で、四ん這になつた所の黑田刑事が、この博士邸と線路の間の空地に於て、何か嗅ぎ出したかといふと、そこには十以上の足跡が入交つてゐて、それが轢死の地點に集中してゐるといつた形で、一見しては何が何だか分らなかつたに相違ないが、それを一々分類して調べ上げた結果、地下穿きの跡が幾種類、足駄の跡が幾種類、靴の跡が幾種類、とマア分つたんだ。そこで、現場にゐる連中の頭數と、足跡の數とを比べて見ると、一つ丈け足跡の方が餘計だと分つた。即ち所屬不明の足跡が一つ發見されたんだ。而かもそれが靴の跡なんだ。その早朝、靴を穿いてゐるものは、先づ其筋の連中の外にない譯だが、その連中の內にはまだ一人も歸つたものは無かつたのだから、少しをかしい譯だ。尙ほよく〳〵調べて見ると、その疑問の靴跡が、何と博士邸から出發してゐることが分つたんだ。

「馬鹿に詳しいもんだね」と、聽手の青年、即ち松村が、かう口を入れた。

「イヤ、この邊は赤新聞に負ふ所が多い。あれは斯うした事件になると、興味中心的に、長々と報道するからね、時にとつて役に立つといふものだ。で、今度は博士邸と轢死の地點との間を往復した足跡を調べて見ると、四種ある。第一は今いつた所屬不明の靴跡、第二は現場に來てゐる博士の地下穿きの跡、第三と第四は博士の召使の足跡、これ丈けで、轢死者が線路まで歩いて來た痕跡といふものが見當らない。多分それは小形の足袋跣の跡でなければならぬのに、それがどこにも見當らなかつたのだ。そこで、轢死者が男の靴を穿いて線路まで來たか。然らざれば、何者かこの靴跡に符合するものが夫人を線路まで抱いて運んで來たかの二つである。勿論前者は問題にならない。まづ後の推定が確かだと考へて差支ない、といふのは、其靴跡には一つの妙な特徴があつたのだ。それはその靴跡の踵の方が非常に深く地面に食ひ入つてゐる。どの一つをとつて見ても同樣の特徴がある。これは何か重いものを持つて歩いた證據だ。荷物の重味で踵が餘計に食ひ入つたのだ。と刑事が判斷した。この點について、黑田氏は赤新聞で大いに味噌を上げてゐるが、その曰くさ。人間の足跡といふものは、色々な事を我々に教へて呉れるものである。斯ういふ足跡は跛足で、斯ういふ足跡は盲目で、斯ういふ足跡は姙婦でと大いに足跡探偵法を說い

てゐる。興味があつたら昨日の赤新聞を讀んで見給へ。

「話が長くなるから、細い點は略するとして、その足跡から黑田刑事が苦心して探偵した結果、博士邸の奥座敷の縁の下から、一足の、問題の靴跡に符合する短靴を發見したんだ。そしてそれが、不幸にも、あの有名な學者の常に用ゐてゐたものだと、召使によつて判明したんだ。その他細い證據は色々ある。召使の部屋と、博士夫妻の部屋とは可成隔つてゐることや、當夜は召使共は、それは二人の女であつたが、熟睡してゐて朝の騷ぎで始めて目を覺し、夜中の出來事は少しも知らなかつたといふことや、當の博士が、當夜めづらしく在宿して居つたといふことや、その上、靴跡の證據を裏書きする樣な、博士の家庭の事情なるものがあるんだ。その事情といふのは、富田博士は、君も知つてゐるだらうが、故富田老博士の女婿なのだ。つまり夫人は家つきの我儘娘で、痼疾の肺結核はあり、御面相は餘り振はず、おまけに强度のヒステリーと來てゐるんだ。其處に面白からぬ夫婦關係が釀成されつゝあつたことは、何人も想像し得るぢやないか。事實、博士はひそかに妾宅を構へて何とかいふ藝妓上りの女を溺愛してゐたんだ。が、僕はかういふことが、博士の値うちを少しだつて增減するものとは思はないがね。さて、ヒステリーといふ奴は大抵の亭主を狂氣にして了ふものだ。博士の場合も、これらの面白からぬ關係が募り募つ

て、あの慘事を惹起したのだらう。といふ推論は、まづ條理整然としてゐるからね。

「ところが、茲に一つ殘された難問題がある。といふのは、最初話した死人の懷中から出たといふ書置だ。色々調べて見た結果、それは正しく博士夫人の手蹟だと判明したんだが、どうして夫人が、心にもない書置などを書き得たか。それが黑田刑事にとつて一つの難關だつたのだ。刑事もこれには大分手古摺つたと云つてゐるがね。が、マア苦心よろしくあつた後、發見したのが、皺になつた數枚の反古紙だ。これが何だ。といふと手習草紙でね、博士が、夫人の手蹟を、何かの反古に手習したものなんだ。その內一枚は夫人が、旅行中の博士に宛てゝ送つた手紙で、これを手本にして、犯人が自分の妻の筆癖を稽古したといふ譯だ。なか〳〵たくらんだものさ。それを刑事は、博士の書齋の屑籠から發見したといふんだ。

「で、結論はかういふことになる。眼の上の瘤であり、戀の邪魔者であり、手におへぬ狂氣である所の夫人を、なきものにしよう。而かも博士である自分の名譽を少しも傷けぬ方法によつてそれを遂行しようと深くもたくらんだ博士は、藥と稱して一種の毒藥を夫人に飲ませ、うまく參つたところを、肩に擔いで、例の短靴をつッかけて、裏口から、幸にも近くにある鐵道線路へと運んだ。そして犧牲者の懷中へ用意の尤もらしき書置を入れて置いた。やがて轢死が發見される

と大膽なる罪人は、さも驚いた表情を以て、現場へ駈けつけた。とかういふ次第だ。何故に博士が夫人を離別する擧に出でないで此危險なる道を採つたかといふ點は、多分新聞記者自身の考へなのだらうが。ある新聞にかう說明が下してあつた。それは第一に故老博士に對する情誼の上から、世間の非難を恐れたこと、第二にあの殘虐を敢てする博士には、或はこの方が主たる理由であつたかも知れないが、博士夫人には親讓りの一寸した財產があつたといふこと、この二つを上げてゐる。

「そこで、博士の引致となり、黑田淸太郎氏の名譽となり、新聞記者にとつては不時の收穫となり學界にとつては一大不祥事となつて、君も云ふ樣に、世間は今この噂で湧いてゐる始末だ。ちよつとドラマテイックな事件には相違ないからな。」

左右田はかう語り終つて、前のコップをグイと乾した。

「現場を見た興味があつたとはいへ、よくそれ丈け詳しく調べたね。だがその黑田といふ刑事は、警察官にも似合はない頭のいゝ男だね。」

「マア、一種の小說家だね。」

「エ、ア、左樣だ。絕好の小說家だ。寧ろ小說以上の興味を創作したといつてもいゝ。」

「だが、僕は、彼は小説家以上の何者でもないと思ふね。」

片手をチョッキのポケットに入れて、何か探りながら、左右田が皮肉な微笑を浮べた。

「それはどういふ意味だ。」

松村は煙草の煙の中から、眼をしばたゝいて反問した。

「黒田氏は小説家であるかも知れないが探偵ではないといふ事さ。」

「どうして？」

松村はドキッとした様であつた。何かすばらしい、あり得べからざる事を豫期する様に、彼は相手の眼を見た。左右田はチョッキのポケットから、小さい紙片を取出してテーブルの上に置いた。そして、

「これは何だか知つてるかい。」

と云つた。

「それがどうしたと云ふのだ。PL商會の受取切符ぢやないか。」

松村は妙な顔をして聞き返した。

「さうさ。三等急行列車の貸し枕の代金四十錢也の受取切符だ。これは僕が轢死事件の現場で、

計らずも拾つたものだがね、僕はこれによつて博士の無罪を主張するのだ。」

「馬鹿云ひ給へ、常談だらう。」

松村は滿更ら否定するでもない様な、半信半疑の調子で云つた。

「一體、證據なんかに拘らず、博士は無罪であるべきなんだ。富田博士ともあらう學者を、高が一人のヒステリー女の命の爲にこの世界――さうだ、博士は世界の人なんだ。世界の幾人を以て數へられる人なんだ。――この世界から葬つて了ふなんて、どこの馬鹿者がそんな事を考へるんだ。松村君、實は、僕は今日一時半の汽車で、博士の留守宅を訪問する積りでゐるんだ。そして、少し留守居の人に聞いて見たいことがあるんだ。」

かういつて、腕時計を一寸眺めた左右田は、ナプキンを取ると、立上つた。

「恐らく博士は自分自身で辯明されるだらう。博士に同情する法律家達も博士の爲に辯ずるだらう。が、僕が此處に握つてゐる證據物件は他の何人も所有しないのだ。譯を話せつてのか。マア待ち給へ。も少し調べて見ないと完結しない。僕の推理にはまだ一寸隙があるんだ。それを充すべく一寸失敬して、これから出掛けて來る。ボーイさん、自動車をさういつて呉れ給へ。ぢや、また明日逢ふことにしよう。」

下

その翌日、――市で最も發行部數の多いと謂はれる、――新聞の夕刊に、左の樣な單字五段に亘る長文の寄書が掲載せられた。見出しは「富田博士の無罪を證明す」といふので、左右田五郎と署名してある。

私はこの寄書と同樣の內容を有する書面を、富田博士審問の任に當られる豫審判事――氏迄呈出した。多分それ丈で十分だとは思ふが、萬一、同氏の誤解或はその他の理由によつて、一介の書生に過ぎない私のこの陳述が、暗中に葬り去られた場合を慮つて、且又、有力なる其筋の刑事によつて證明せられた事實を裏切る私の陳述が、假令採用せられたとしても、事後に於て我が尊敬する、富田博士の寃罪を、世間に周知せしめる程明瞭に、當局の手によつて發表せられるかどうかを慮つて、茲に輿論を喚起する目的の爲に、この一文を寄せる次第である。

私は博士に對して何等の恩怨を有するものでない。唯だ、その著書を通して博士の頭腦を尊敬してゐる一人に過ぎない。が、此度の事件に就ては、見す見す間違つた推斷によつて罪せられんとする我學界の長者を救ふものは、偶然にもその現場に居合して、一寸した證據物件を手に入れた、この私の外にないと信ずるが故に、當然の義務として、この擧に出でたまでゞある。この點について誤解のなからんことを望む。

さて、何の理由によつて、私は博士の無罪を信ずるか、一言を以て盡せば、司法當局が、刑事黑田淸太郎氏の調査を通して、推定した所の博士の犯罪なるものが、餘りに大人氣ないことである。餘りに幼稚なるお芝居氣に富んでゐることである。彼の寸毫の微と雖も逃すことのない透徹その比を見ざる大學者の頭腦と、此度の所謂犯罪事實なるものとを比較する時吾人は如何の感があるか。その思想の餘りに隔絕せることに、寧ろ苦笑を禁じ得ないではないか。其筋の人々は、博士の頭腦が抽き靴跡を殘し、僞筆の手習反古を殘し、毒藥のコップをさへ殘して、黑田某氏に名を成さしめる程耄碌したといふのか。さては又、あの博學なる嫌疑者が、毒藥の死體に痕跡を留むべきことを豫知し得なかつたとでもいふのか、私は何等證據を提出するまでもなく、博士は當然無罪なるべきものと信ずる。だからといつて、私は以上の單なる推測を以て、この陳述を思ひ立つ程、無謀者ではないのである。

刑事、黑田淸太郎氏は、今赫々の武勳に、光り輝いてゐる。世人は同氏を和製のシャーロック